

2003

大正十三年一月二十九日(第三種郵便物認可)
昭和五年九月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人編輯



九月號

【號九十三百第】

會期九月

六日(土曜日)
七日(日曜日)

十二日(金曜日)
十三日(土曜日)
十四日(日曜日)

各日共午前十時發馬

(但シ雨天ノ際ハ順延)
(スルコトアルベシ)

秋季競馬大會

會場

京城東大門外新設里競馬場

社團
法人 朝鮮競馬俱樂部



秋、都門に入る
月よし、魚よし
蔬菜よし、一杯
の「福迎」最も
人によろし。

京城雜筆八月號酒評に曰く

三木 三村君「福迎」はさうです。

三村 京城から出て居る三點の中では一番味、香兩方

三木 共よいやうに思ひました。

三村 甲といふ譯だな。

山田 さうです。

山田 口に入れて噛みしめておれば、あとでよい感じ

がしますが、口に入れた時分は他の酒と異つた味

を感じました。香は相當いゝ酒だと思ひます。

鎌田 香も味もマコトにくせないよい酒でせうな。

常用酒として「福迎」を愛用せらるゝこ
とは、第一經濟であり、第二氣分を爽快
にし、第三健康長壽の基

京城本町（電車終點）

難波酒造場

電話 本局一四六一番
光化門一四五番

キリンビール

最古の歴史
最新の備備
最上の品質

清涼飲料

キリンエール

絶對着色なし



内省御用
麒麟麥酒株式會社

K3

金剛煎餅
金剛羹
金剛饅頭
金山

金剛山産松實花應用品菓

金剛飴

龜屋商店

京二城本町

電話二七四七番
本局四七五番

金剛柏子(松の實)
金剛おこし
金剛柏子菓(朝の實菓子)
金剛しるこ

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼
漢陽高麗編
三和焼

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

!! 期好の 翠撰御水料飲
非是に合宴御に庭家御

ソトシンボリ



社會式株酒麥本日大
所張出城京

サッポロビール

飲清
料涼

リボンシントロン



新工場落成

紀念大賣出し

高級醬油



キツコウ

キツコウユウ醬油に樽壹丁毎に
都味噌壹罐(八百匁入)又は寶味淋
(四合詰)壹本進呈

鳴屋醸造所

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用 ○鞆 に入れて携行自由 ○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

資本金 五百萬圓
 諸預金 貳千參百五拾余萬圓
 殖産積金 參千百拾余萬圓
 契約積金 參千百拾余萬圓
 代理店 朝鮮殖産銀行鮮内支店及派出所

營業案内及
 住宅資金月
 賦貸パンフ
 レット御申
 込次第贈呈
 致します。



株式會社 **朝鮮貯蓄銀行**

京城府南大門通二丁目

營業種目
 殖産積金 殖産貸付
 普通貯金 積金擔保貸付
 特約貯金 預金擔保貸付
 据置貯金 證券擔保貸付
 定期預金 不動産抵當貸付

取締役頭取 有賀光豊
 專務取締役 植野勳
 取締役兼 木村和水
 支配人

電話本局四五八〇番
 振替京城四〇〇六番

謎の大庭柯公怪死真相
 西伯利の白樺林で銃殺されたといふのは怪談だ。當時モスクワにゐた和田軌一郎氏が未劫の秘密を隠した。呪へ、冷血鬼片山港！

素描の頭山立雲先生
 藤田貞敏氏が頭山邸に日参する事一年半、颯から真珠を拾ふ如く、仙術の英雄の面目を如く！

犬養毅の伏魔的復讐
 夫人への悪言を含み公的の陰謀を復した小人の陰險な妬嫉の心術

◆澁澤と淺野◆下村と岡◆無産タラ幹總評◆
 ◆松方五郎の足アト◆女流作家私生活其他數十篇

責任編輯 **人の噂** 九月號 價卅錢
 振替東京 東京・澁谷 六二七三月日社

鮮産の愛用は まづ清酒より

名實共に内地 品を凌駕せる

酒銘「キンチヨ」

京城南大門通四丁目

齊藤酒造合名會社

電話本局一〇六六

今村鞆氏 著

歴史
民俗
朝鮮漫談

第二版

(一冊定價參圓六拾錢)

著者が當代有數の朝鮮研究者であること、
著者の筆の縦横無礙、湧くが如き興趣に充
つることは、江湖の遍く知悉するところ、
曩に朝鮮漫談第一版を刊行するや、殆ど熱
狂的歡迎を受け、朞月にして參千部を賣り
盡したり。著者今や改訂増補を行ひ新裝を
擬らしてこれを市に送る。朝鮮に於て朝鮮
を知らんとするものは、是非一本を備へ給
へ (市内各書店にあり)

京城黃金町一ノ一二二

發行所 南山吟社

高 級 化 粧 品

金 ば こ

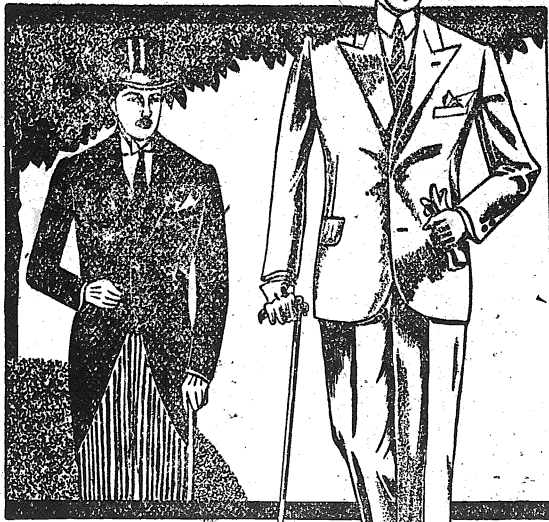
○巴里製化粧品のみ
が最高最上の化粧品で
はありませぬ。わが國に
も高級化粧品「**金箱**」が
あります。

○一たび「**金箱**」をお
用ひ下さい。その色その
香、おのづからに恍惚と
なること請合。これ以上
の家庭和樂の源泉はあ
りませぬ

○「**金箱**」は精製して
極少量を市に出します
それ故ドコの店でもあ
るとはいへませぬ。京城
にては三越、丁子屋等第
一流の百貨店にてお求
め下さい。

優良國産品
推 奨

冬服豫約開始



丁子屋

(電話本局4560-23-220)

記念粗品贈呈

豫約清規

引受期日	八月二十五日より
出来期日	九月二十五日まで
御注文後	三週間
御手付金	金五圓申受残額引替
市内御一報次第	店員参上

- セビロ (新巻三編) モーニング (上衣、チヨウキ一組) 八十五圓
- 特 (橋ウオステッド) A 七十五圓
- A (同) B 七十五圓
- B (同) コールズボンのみ 二十圓
- C (黒紺サージ) 三十九圓

引受 八月二十日より
九月二十五日まで

洋服地の御撰擇に當り最早「舶來萬能」の時代は過去りました。今回推奨の日本毛織は吾國最大の毛織會社にしてウーレンを得意とし地風は獨逸風であり、伊丹製絨はウオステッドを得意とし仕上は英國風です。何れも外國品と専門的に比較研究して製織、染色、意匠共に全く遜色なく、而も國産品なるが故に價格は遙かに低廉です。「國産時代」に斯くの如き優良毛織を、最大責任を以て、江湖に推奨申上ぐることは大なる悦びであり、愉快な次第であります。

洋服地の國産時代

九月號目次

京城つれづれ(草)	殖産銀行	守屋徳夫氏(二)
豆架瓜棚(詩)	總督府文書課	松田學蘭氏(三)
小心火車	城大法文學部	高木市之助氏(四)
九月集(短歌)	吉野町一丁目	水井れい子(五)
山と水に親しむ會	中央朝鮮協會	松岡久子氏(六)
品川雜記	城大醫學部	中島司氏(七)
巨人を見る	地質調査所	大澤勝氏(八)
親は子の爲に	京城女子技藝	川崎繁太郎氏(九)
心中を見た話	京城電氣會社	井上要二氏(一一)
慶應觀戰記	遞信信局	見目徳太氏(一二)
自然にかへれ	京城女子實業	津田常男氏(一三)
木の雲(短詩)	松峴洞社宅	辻董重氏(一五)
照乏人の金貨	金融組合聯合會	岩淵山與水氏(一五)
我輩は唐變木	辯護士	野田信子氏(一六)
松峴吟社句集	城大醫學部	山根謙氏(一八)
婦人記者と私	南米倉町	宮崎毅氏(一九)
青き稲田(短歌)	京取市場	吟社同人(二〇)
野球の話	大阪朝日支局	杉原徳行氏(二一)
漫性病治療	占部醫院	角田不審氏(二二)
オルガ姫の時計	京城婦人病院	横山巷頭子氏(二三)
無題	東本願寺	新田唯一氏(二四)
京仁の酒を啣く	道廳稅務課	占部寛海氏(二五)
南扇子室	新橋橋洞	工藤武城氏(二七)
僕の健康法回顧	京城法學專門	金田靈堂氏(二九)
小さな自然界	京城師範	三木清一氏(三〇)
小柳(短詩)	城大附屬病院	柳京太郎氏(三七)
韓柳(短詩)	野田醬油支店	甲野宗一氏(三九)
忘れぬ顔	載寧鐵道	松井權平氏(四一)
手拭の由來	朝鮮鐵道	市山盛雄氏(四二)
裸業運べ	京城新聞社	高橋昇氏(四三)
清涼里にて(短歌)	南米倉町	鈴木勝海氏(四四)
讀史漫錄	朝鮮史編修會	柄澤四郎氏(四五)
新東京素見雜記	城大法文學部	角田芳子氏(四六)
洋上閑話	遞信局海軍課	中村榮孝氏(四七)
旅より旅に	朝鮮銀行	天野利武氏(四八)
失敗を語る	總督府會計課	松崎嘉雄氏(四九)
彌生會句集	大和町二丁目	長谷井市松氏(五一)
九月一日の思出	元町一丁目	彌生會同人(五四)
呂昇の思出	櫻井町	大和田よね子氏(五五)
仁川行(短歌)	京城日報社	大村百藏氏(五七)
やまのと歌	京城日報社	徳野鶴子氏(五八)
話を語る	京城日報社	國風會京城支部(五九)
		久松前平氏(六〇)



京城つれつれ草

守屋 徳夫

(殖産銀行)

【二】

く月に守られつゝ、たどり行く夢路のいかに涼しきや。

家族と覺しき二團の陋屋の前にして群がり眠れる傍らまだ十六七の娘の獨り起き居て、小聲に何やらん月に向ひてうたへる、誰がすさびぞも、横笛の朗々として更け行く夜半に通ひ來れる、京城の夜はなやましきうちにも一脈の詩情湧くべし。砧の音など此頃よりぞ聞え初むなる。

鮮人の白衣など夏は目度度し、純白の襦袢は更なり、周衣など重ねたりとて熱しも覺えず、ましてうら若き女性の透き通らんばかりなる襦の下に、色とりどりなる裳などつけたる見るからに涼しげなり。さはれ此頃めつきり御目にかゝらぬは憐なる哉、雷公天上に失業して夕立京城に失しとや言はん。

親佐の詠めるに

夏山の楢の青葉を吹く風に
かげさだまらぬ夕月夜かな
とあり、涼味掬するに足るべし。かくして我宿にあらまほしきは體なりかし。せめて青桐もがななど思へど差しあたりては甲斐なし。楓樹などところ狭きまで頼めてはあれど早天旬日に耳れば、葉末むすぼれて見るからになやまし。

漢江などよし、孤舟に掉して河心に出づ、涼氣頓に湧いてなえたる心身を洗ふに足るべし。月天心に位して河面一條の銀線を描き。橋畔の燈火對岸の鬱林に没す。顧みて南山をのぞめば、神火點々として高く明滅するあたり、群百の

猛夏雜景

暑い哉京城、三階の高きに居すなど記さば涼しきに似たれど、天井低く窓は高く、風さへ通はねば唯蒸さるゝ心地す。扇など手早く動かして、窓外深く見はらすに南山の松柏今や早や生氣なく、一條の街路樹うなだれて動かず。藁の輝めきつらなるところ、風呂屋の煙突と覺しきものより、白煙の眞直に立ち昇るも物憂し。

調査など申す仕事夏には不向なり、一杯の冷水に息吹きかへしつ統計などあされど忽ちにして倦むべし。暫らく西窓にたゞすみて、洗るゝ汗を拭ひつゝ、やをら書類に向ふに睡魔何時の間にか襲ひて、要領の得がたきこと妙なり。ペンをとりて財界の近況を物せんとすれば、用紙腕にねばりて、すらすらとも運はず。午後四時、解放されたるが如くにして頼みなき家路につくべし。老める哉昔や。

京城にはしきは夕立なり、檐聲不斷通旬の雨、晴れては一天空乾暑氣頓に積乗す。旭日のたゞさす國、夕日の日照る國、風なく雨なく唯蒸し暑うして日は落つべし。夕立のまだ晴れやらぬ雲間よりおなじ空とも見えぬ月かな
千載集に俊惠の詠める風靜など、京城には甲斐なき願ひなりかし。

暮れ行くまゝに鋪路など、雜沓の巷と化すべし。露店の隙もなう張り並べられたるあたり、押し合ひひしめき唯わけもなく賑ふなり眞瓜など山と積みたる店先にて、皮をもむかずかぶりつきたる、狭苦しき露路の傍り群れ居て、ウドンなど立ち食ひたる、何やら色づきたる冷水を粗末なるカップに盛りつゝ、聲高らかに客を呼びたる、西瓜の三角に刻みたるを板に並べつゝ、其の一きれつゝをのゝじり賣りたる、さては怪しげなる帽子のせたる男の子のメガホン朗らかにモダンパンと號せる、この世のことゝも存せず。日用雜貨食料布木にいたるまで、何一つ賣らぬものとしてなければ、老若男女高き卑しき織るが如くに行き交ひ、軒燈街燈のきらめき輝くところ満目白衣のどよめくを見るべし。

更け行くまゝに羨ましきは鮮人のゴロ寝なりかし、開け放ちたる一間に身を入るゝばかりの蚊帳など打ち張り主人顔して横はりたるよし。板一枚の腰掛など路傍に持ち出し、器用に仰向けるなどまだ上等の分なり。莫座一枚を路上に敷き二人三人相擁して夢路に入るあり、此處の軒下、彼處の橋畔、大方石を枕に眠れば、果々として死屍にも似たりとや言けん。さはれ冷え行く大氣に育まれ、澄み行

街燈星雲の如く瞬くを見るべし。

夏の夜は月も清水に涼むとや

雲の衣をめきて入るらん

り。さはれ雜沓の如何に甚しくして往復の列車の何ぞ熱きや。月尾

島は夕方こそよすれ、群客散じて

即ち一杯の冷酒を命すべし。

必也。即ち、七月十日の夜

京城には甲斐なき願ひなりかし。
死屍にも似たりとや言はん。さけ
れ冷え行く大氣に育まれ、澄み行

して高く明滅するあたり、群百の

街燈星雲の如く瞬くを見るべし。

夏の夜は月も清水に涼むとや

雲の衣をぬぎて入るらん

俊惠の詠める面白し。

月尾島またよし、潮湯など夏の
京城人には書き入れの名所となれ

り。さはれ雑沓の如何に甚しくし
て往復の列車の何ぞ熱きや。月尾
島は夕方こそよけれ、群客散じて
四邊閑寂、夕潮岸を洗うて一條の
突堤まさに海水に没せんとす。夕
陽なごやかにして海風強くすだれ
を捲くところ樓上の欄干に倚つて

即ち一杯の冷酒を命すべし。
秘苑の御池に、東大門外の路傍
に群り生ひたる蓮池はよし。
おのづから月やどるべき際もな
ら池のけちすの花咲きにけり
など西行はうたひぬ。

豆架瓜棚

松田學鷗

(總督府文書課)

梧柳影參差。空庭不受暑。湘簾碧
以漪。搖曳夢回所。

閑點讀書火。燃髭涼夜倚。樓成題
亦就。已有新詩寄。

階下響吟屐。秋心蟲一聲。銀河流
木末。草樹露華明。

一鷓宿禽驚。清颺吹髮髮。高欄聳
碧霄。客擬捫明月。

月白風如水。叢葦咽夜涼。兩三梧
葉影。簾馬響丁當。

○
混漾簾波疊晚涼。一螢碧度水邊墻。
隣家未點讀書火。閒酌夕顏花下觴。
井欄雨過潤苔花。白日空庭綠樹遮。
午夢醒來詩思渴。山童笑煮半甌茶。
即今韓土是皇州。占得衡茅遣客愁。
三逕又栽松與菊。吟情何必故園秋。
好風吹灑夜將闌。醉後焚香倚竹欄。
天竺花開如在寺。月前殊愛露珠寒。
塵外何知夏日長。山嵐林翠濕衣裳。
黃昏一種田家樂。豆架瓜棚笑語涼。

○
我庭の姫百合もよし
庭の面の土さへさぐる夏の日に
ひとり露けき姫ゆりの花
など土御門院の詠ませ給へる目出
度し(昭和五年八月)

旭町風聞記

北漢山人

○廣江澤次郎氏が、ヒイキの遠
山滿をつれて、或るカフェで、一
杯やつてゐた。

○いつのまにか、旭町連中が、
それを見つけて、ぞろ／＼集まつ
て来た。

○皆口々に、遠山の藝術をほめ
る。『よかつたわネー』、『ほん
まに、よかつたわ』、『あつし、
とう／＼、旦那を怒らしてしまつ
て...』、『い、ぢやないの...あ
んな旦那!、ほつとくと、またの
こ／＼出て来るわ』、『さうよ、
時々ドーンとやつたるがえゝわ』
『ウフッ』

○その中一人が、廣江氏を發見
して(それまでは、この偉大な存
在を忘れてゐた)、『ホ、今日
は』と目禮して、そして『あんさ
んの直待も、よい出来やつたし、
ナー○○はん』...廣江氏とうと
う直待にされて、刺味のツマほど
の禮讚を頂いた。恐れ入つて『ヤ
、ど、どう致しまして』

小心火車

高木市之助

(城大法文學部)

△つい昨日歸つた滿洲の旅の感想二片。

△汽車が鴨綠江を無事に——無事にといふのは鐵橋があんまり長いからではない。橋の袂にあのものがくしい砲臺が屹立してゐるからだ——通過してまづ、私の眼をたのませたものは、あのこまかい、それこそほんとうに鱗のやうな、町屋の支那瓦だ。それに、あの屋根の棟通りの曲線の美しさはどうだ、日本建築のマッチ箱式直線でもなく、といつて朝鮮式の誇張した、不安定な反りでもなく、きやしやに、鷹揚に、すんなりと流れて行くところ、あれでこそ、軒端に支那服の美女をたすませるによく、うしろに一むら楊柳の緑を配するにふさはしい等々、支那を旅行——或は素通り——した人々の中にはこんな私のやうな支那瓦黨も少しはあるだらうと思ふが、さて爾來數日、金州城外の雨に逢つて鬱陶しい馬車の中で聞いた話をないしよで我が支那瓦黨のお耳に入れて置かう。曰く『あの瓦はあれで、長雨に逢ふとほとと〜と漏り出しましてね、中國人の家主に修繕を頼めば、こんな長雨に雨がもるのは當前だ』といつて取りあひませんし、つまり支那瓦は、燒きが不十分で質が脆いので、少し雨が續けば、水がしみこんでしまふんですね云々』これではいさゝか避易せざるを得ない。

△支那瓦の次に私の眼に入つたのは、沿線の『小心火車』の立札だ。さうしてあの長たらしい『汽車に注意すべし』を思ひ出した。

一体ローマ字論者や、假名論者がよく漢字を云々するが、その結論は兎に角漢字そのもの、効用なり能力なりを、もう少し實際に調べて見てはどうだらう。これは反對の漢字論者にもお勧めしたい。と云ふと大分ことやかましく聞えるが、實は右の小心火車から考へつたほんの氣まぐれに過ぎないけれども、兎に角私の意見はかうだ『道が支那は文字の國だけあつて其用法が手に入つたものだ』とよく人がいふ。もち論同感である併し感心の仕方が私のほんの少しづつである。つまり、支那人の用字法が、實に藝術的であつたり意味があつたり、風流であつたり微妙であつたり、する外に、實によく實用的であり簡單明瞭であるといふ點に於て感心したのである。『注意』といふ用語の中にも用字の上のうまさはある、注の字など殊にうまい、併しこのうまさは要するに藝術的なりまさであるが、『小心』にはもつと別のうまさがある。試みに二字の姿をじつと見つけて見たまへ、何といふ簡單明瞭な字面だらう。これ程簡單にこれだけの内容を發表し得る文字が一体世界の何處に存在するだらうかといひたくるではないか。

【四】

△小心の次に私の眼に入つたのは驛によくある『脚』の下げ札だ勿論日本の『便所』だが、たつた一字で實によく用をたしてゐる。字畫が多少こみ入つてはゐるが、たつた一字といふ強味は大したものだ。人生不可欠の此の要所を唯の一字で案内してくれるところが是れ亦世界の何處にあらう。かういふと言下に『WC』の簡單に若かずと抗議が出さうだが、これは兎にも角にも二字であり、而かも略符なのだ。略符でよければ脚だつて『でい』。『で』は唯と間違ふといふなら、W、Oだつてロントンの眞中にあるWC (West-end car)とまちがふといへよう。論には際限がないが、詮する處、唯の一字で、而かも略符のたぐひでなく、正々堂々、簡單明瞭に『べんじよ』乃至『toilet』の代用をするといふ事實を動かす事は出来ないであらう。

△あまり話がかたがたつて風俗擾亂の虞があるとならば、今度はぐつと危険な思想問題で行かう。中華民國の三民主義が現行國定教科書中に多數の排日主義教材を織込んでゐる事は衆知の事實だが、その中の韻文の一を御紹介に及ぶと

○五九國恥

同胞記否

民國四年五月九

廿一條無理的要求

日本提出竟承受

同胞記否

民國四年五月九 小學黨化教材

第四册)

尤もこゝで問題は排日問題ではなくつて『記否』の問題である。あゝ記否！およそ簡明な表現ではないか。之を譯して『記憶するや否

や』などとする事けどんなに間のびがしてお上りさん式醜態を發揮

んでしまふんですね云々」これではいさゝか難易せざるを得ない。

一体世界の何處に存在するだらうかといひたくなるではないか。

「記否！おおよそ簡明な表現ではないか。之を譯して」記憶するや否

や」などとする事けどんなに間のびがしておよりさん式醜態を發揮して氣恥かしい事であらう。思ひきり節約して見ても精々「覚えてゐるか」位の處だが、何處の國語に譯したつてまづこの程度と思はれる。だのに記否！實に記否である。漢字には一面からした實用價值、簡單明瞭味があるのだ。この方面をローマ字論者も假名論者も乃至は漢字論者ですらももつとほんとうに調べて見たらどうだらう△好い氣持になつてまくしたてゝ來たが、さて、顧れば、これも亦支那互體讀の類かも知れない。その中に雨が漏つて來なければ幸である。

◆學界風聞記

漢 江 漁 郎

○城大法文學部の麻生教授は、江戸文學の講座を擔任して居られるが、その方面の蘊蓄は、實にタイしたもの、講義は趣味津々、時の移るを知らないといふ有様。○殊に西鶴や、爲永春水の作物に至ると、説いて微に入り、細を穿ち、人情の妙所に徹底して、生徒は唯だもろいとなつてしまふ。先生時々注意して曰く、『ヤ』皆さん……大分涎の流れてる人がある。『先づコ、でお掃除をいたしませう』
○他の學科で神經衰弱を起してゐるものも、二三度この講座に列すると、忽ち起死回生の喜びを得る學徒相傳へて曰く、『われらの麻生先生は、實に偉いもの』

九月集

水井れい子

庭草に露しげければこの朝け付添ひ女らは足袋はきにけり
ひそやかに秋はくらむかたくみらが門を繕ふ管の
牙えたる
朝光の梧桐かげにうく月の淡きを見ればけながく
やみぬ
草薺の花におもたき朝の露病舎の庭に下りたちに
けり
朝心かなしく下りし廣庭の石に座りて嘆きつるかも
草露は結びし小夜の門畑にすもちよはなかずこほ
ろぎのこゑ
思ひいつかなしき事に及びをり軒のあかしあに
雨のさやける
はたはたと吾が動かす團扇の風夜半のさうひはゆ
れにけるかも
ははき草にこもるみどりのすみくれや夕べをくも
る向つ岩山
たよりなみ君は海へ旅立ちぬ訪ひきてかなし梧
桐の花
北の海に君旅立ちていく日ならむ梧桐の花枯れそ
めにけり
東の山ゆさしいづる月かけは歸りゆく子をおほに
照らせり
青堂をふみしだきゆく松山に山のむかうの自動車
聞ゆ
電燈のもとにつながれし馬の顔つつましくあり驛
の廣場に
集りの夜ふけて歸る路次の上にカシオベヤ屋座す
みてかかれる
君が家の石段下り道にいでつ庭松の枝にこもる月
よみ

山と水に親しむ會

松岡久子

(吉野町一丁目)

【六】

「昨年の會で手ほどきをして頂いた子供が、今年はクロールで仁川の大プールの縦断が出来ると大喜びです。」

東京から『どうか山と水に親しむ會の始まらないうちに京城へ歸れますやうに……』と切なる願ひを云つてよこすのを見て、どんなにそれが楽しいかはわかりませんが、自然を湯仰して自然に親しむ。それけ誰にも心地よいことに違ひありません。然し私の最もうれしいと感ずることは、この會をしてゐる人達の自然らしい無邪氣さです。

『誰に頼まれたか知らないが……』と或人がこの會の存在を賞めたそうです。損得を考へたり、頼まれたのでは到底出来ない會なのです。なればこそ子供達があと一日と終の近づくのを惜しんで『また来年もして下さい』とせがんでゐるのでせう。

切つた水は硝子の鉢を思はせる清らかさです。

『皆、すぐ飛び込んではいけません。暫く休んでから』、お預けをもらつた犬のやうに、ともすれば動かふとする手と足を制へて、皆うつとにらめつこです。

『よし！』と號令を待つて、大人も子供もどぶんぐと飛び込みます。さながらの蛙です。嬉々として子供が水に浸つて居る時は恐らく大人連大活動の時です。

『泳げない者は浅瀬で遊ぶ』
『小父さんが手を持つて居る、身體を浮かして〜！』
『そーらもう一息だ、思ひ切つて顔をつけて浮いて見る』

『誰と誰れとは横断をやつて見る』
『皆あがつた！』

といふ號令が出るまで、水でなく膽を冷やしつゝ、恐らく冷汗淋漓でせう、お氣の毒なことです。

水から上れば今度はお断です。子供に圍まれた布袋様そのまゝ、濱口氏の口から乃木大將が出ます。岩見重太郎が躍り出します。西洋お伽のジャックまでとび出して賑やかなことです。

かうした河童の群は河岸をかへて、或日は清涼里の林間に賢探しや陸上競技としやれ、あちらの浅川氏等の御好意で、おでんを御馳走になつたり、或日は仁川へ遠征にも出かけます。

昨年の夏此處に『山と水に親しむ會』といふのが出来ました。夏休を利用して、子供を中心に大人も混つて、山に遊び水に親しまふといふので、浅川伯敬氏、濱口良光氏、渡部久吉氏等の合作です。

私達を圍繞する山々、朝日を浴びては紅に、夕陽を負ふては紫に月明には模範として、時々刻々に姿をかへます。京城に住むほどの者、誰しも是等の山々に對して渴仰の念を抱かぬ者はありません。常さへも水に乏しい此土地の盛夏です。不斷の溪流をせき止めた洗劍亭のプールときいては大人でさへも胸が躍ります。

青雲洞先の山麓で自動車を捨て爪先上りに半丁ほど、彰義門のアーチの下に立ちます。

地方より京城に入る街道は四方に設けられて居りますが、此地點から見た京城は、いかにも城の都と云つた感じがはつきりとして、何處から見たよりも一番美しいと私は思ひました。まくわ賣と肩を並べて心ゆくまで涼風を入れますほんとうに此地ならではの得られない情景です。

溪流に添ふて迂曲しつゝゆく田舎道數町、樹や草の緑と川のせまらぎに暑さはさまで苦になりません。

自然の岩床をそのまゝせきとめたプールから、水は潺々と溢れて瀧となつて落ちてゆきます。澄み

◆總務と野球

漢江漁郎

○民政黨總務の敗山耕藏氏、近年ムヤミに肥満するとあつて、心痛一方ならず。近ごろ野球道具を買ひ込んで、令息、書生、運轉手を相手に、盛んに汗を流してゐる。○ところで、野球天分は、令息が最も豊富で、おん大はネツカラ上達の見込なく、『駄目だ！、お父さんだけ見込がない！』と頭ツからコキおろされる。スルト總務『まアやかましくいふな。俺のはこれで、愛嬌だけは、満點だぞ』
○讀者！、光景を御想像下さい

品川雅巳

者はプラットホームから丸ビルの方へ蜿蜒として長蛇の列を成す

自然の岩床をそのまゝせきとめ
たプールから、水は滲々と溢れて
瀧となつて落ちてゆきます。澄み

川氏等の御好意で、おでんを御馳
走になつたり、或日は仁川へ遠征
にも出かけます。

『まアやかましくいふな。俺のは
これで、愛嬌だけは、満點だぞ』
○讀者！、光景を御想像下さい

品川雑記

中島 司

(中央朝鮮協會)

盛夏行進曲

金もなければひまもない。夏を避暑などと洒落れて過ごすやうな警澤は眞似もできない。一ぺんはそんな身分になつて見たいと思はないでもないが、とても自分には金儲けなどできさうもないので先づは非望は抱かないことにして神妙にその日を送るのが一番安全だらう。四人の男の子を持つてゐるから、長生きするうちには四人の中から避暑位にはやつて呉れる者も出るかも知れぬ。まあ當てにしないで待つて居やう。

さて何處へも暑を避けないとすると、毎日家に居る外に仕方がない。と言つて暑中休暇をとつた所で、狭い住居にござろして居るのでは、暑いばかりであるのみならず、たまの日曜日に在宅してこそ細君にも珍重がられるが、續けて休んで居たのでは、やれ座敷を散らかすとか、やれお晝の仕度が面倒たとか、兎角に家内から邪魔にされるのが業腹だ、そこで自ら進んで暑を迎へ、潔よく暑と戦ひ斷然暑を克服すべく、積極的に汗を流すことにした。これは今年に始まつたのではなく、例年の例だ。

以前とちがひ酒席が少なく、自然夜ふかしをしないので、朝は大抵五時には離床する。夏の早起きは一種の避暑法だ。家人は未だ眠

りより覺めない。四隣も静寂だ。顔を洗ひ身体を拭ひ、さつぱりして、椽側の簾椅子にもたれ早朝の淨い空気を胸一杯に呼吸しながら心地よい無我の境地を樂しむ。涼風腋下に在りだ。

我が家我が庭で朝一番早くから活動を開始するものは蟬と蠶だ。私が起こす前から、蟬は椽の梢に啼の歌をうたつて居る。暮は庭の眞ん中を横行闊歩して居る。彼等は夏の早朝に於ける私の常連友達である。時偶々彼等の聲がしなやか姿が見られぬ朝は何となく物足りない一種の淋しさを覺える。

新聞が三種配達される。それを見て居るうちに朝飯になる。暑い朝付裸で箸を執る。夏は裸体に限る。七時半頃には食事が済む。八時頃郵便が来る。來ない日もあるが大抵は来る。簡単な返事の出來るのは直ぐさま筆かペンを執る。そして洋服に着かへてバスで品川驛へ。品川では時間を計つて横須賀から來る高速電車を待つ。此れだと他の省電で東京驛まで十四五分を要する所を八分で行ける。速くて涼しいから、又一種の避暑法になるといふものだ。

ラッシュアワーの東京驛、九時少し前頃の人の浪人の渦はとても凄まじい。殆ど間断ない位に來て停まる電車から吐き出された涌動

者はプラットホームから丸ビルの方へ蜿蜒として長蛇の列を成すその列に伍してプラタナスの生ひ茂つた街路を横切り、丸ビルのエレベーターの前に立つ。

戀の丸ビルなどと言ふと大變粹なやうだが、其の丸ビルは決してらくぢやない。午後九時の照り返し、風はあつても熱を帯びて居るから、室内はムツとして釜中に在る思ひだ。此處で事務を執る間は文字通りの迎暑だ。汗みどろの生活だ。併し丸ビルの中でも苦熱を感ずるのは七月の末から八月の初めまで、炎暑堪え難しなど言ふのは贅澤だ。塵熱のパラック式建物の中で働らく人々の事を思ふとまるで極樂淨土に在ると言ふべきだ。

さて一日の勤めを終へて夕方近く家に歸る。ワイシャツを透して上着までにじみ出た汗、その暑さも、バスの停留所にねえやに連れられて迎ひに來て居る幼児の片言交りの歡迎の辭「とうちやま、居た」と言ふのを聞くと一ぺんに汗が引つ込んで萬斛の涼味を覺えるのだ。兒の手を引いて歸り、熱い湯で行水をする。湯殿から上がる天井欄漫たる素つ裸で、夕飯のテーブルに對する。家族と快談しながら魚の洗ひやトマトなんぞの淡白な新鮮な魚菜を相手に一本の小瓶、冷蔵から出したでのビールを傾むける。此の時こそ正に涼味百パーセントで、暑さも疲れも忘れてしまふ。

進んで暑を迎へて之に對抗する其處に私の消暑生活が毎日同じやうな行進曲の下に續けられる。敢て避暑なんかに行かなくても、避暑の方法は決して乏しきを愛へない。

巨人を見る

大澤 勝

(城大醫學部)

此間新聞を見たら朝鮮一の巨人智異山の僧某の事が出て居て身の長七尺三寸と號して居る、なる程七尺三寸とあれば朝鮮では一かも知れ無い、又數年前東洋一の巨人と云ふのが新聞に出て居た事があつた、之は支那北平の住人で何でも禁苑の番人だとか云ふ事であつた、此方は朝鮮一より舞臺がひろいだけに三寸ばかり高かつた。

それで今度は僕が経験した巨人を擧げて之に追補を試みて見ようと思ふ。

時は一九二三年の十月の末の事で僕は所用あつて和蘭『アムステルダム』に旅行をした或る夕、レムブランドの家の近くの廣場の一角の『レストイラン』で全行の友達と晩飯を食べて居たそうすると何だか店が急にざわつき出した、所でウェーターがやつて来て『アムステルダム一番の大男が来て居るから一寸来て見ろ』と云ふ、始めは別に大男だつて化物でも無いんだらうと思つて友達も僕も尻を持ち上げなかつた處がウェーターの先生無精をせず一べん見ても驚くからと頻に云ふので隣の部屋に行つて見て驚いた、僕は此世の中にこんな大きな男の居る物とは知らなかつた、巨人は僕等と同じく飯を食つて居る、何分料理屋の椅子は世間なみの人間を標準として作つてあるの

で腰をかけた處を見ると如何してもしやがんで居るとしか見えない、正に膝が顎にふれんとして居る、見て居ても飯がまづそりで氣の毒になつた、その中に僕等も巨人も食事がすんだので亦見に行つた、一つ念の爲背くらべをやつて見た、先づ六尺豊かな土地の人間が傍によつた、正に脇の下に頭がはいつた、誠に恐入つた次第で今度は吾輩が傍によつて見た、情無いがな僕の頭は彼の腰の上いくばくも出て居ない、乳までは恐らくは達しなかつたらう、斷つて置くが僕は日本人としては大きくは勿論ないがさりとて小さい方でも無い、身長は正に五尺五寸になん／＼として居る、即五尺五寸にして斯の如しで少からず度臆を抜かれた、それで後學の爲に一体あなたはいくらあるのかと聞いて見た、處が二、六七『メートル』と云ふ答だ、それから鉛筆を出して計算をして見た、三、三をかけるるとざつと八尺七寸ばかりになる、いや大した物だ、念の爲に両親は大きかつたかと聞いて見たら普通位な處だと云つて居たが体重は惜しい事には聞き洩した、しかし肉つきは相當によかつた、何しろ大きい者だ、僕にとつては空前の大男で其後今日迄こんな巨人は見た事が無い、東洋の巨人を以て許される先生がたつた七尺六寸、朝鮮となると七尺三寸で即尙一尺一寸乃至一尺四寸の低位にある以上此後とてもそうぢやい／＼御目にかゝる機會は無いだらう即、僕にとつては空前にして恐らく絶後だらう、但し『レストイラン』の『ウェーター』はアムステルダム第一であるとは云つたが小國和蘭一とも云はなかつたし勿論ヨーロッパ第一等とも云はなかつた。

か
ぬ

かね

川崎繁太郎

(總督府地質調査所)

かねと一口に言ふが其の意味は時と處とによつて著しく違ふものである。昔は武士にかねを強請つて長いかねでスバリとやられた無頼漢もあつたとのことである。強請つたのはかね入れの中のかねで斬られるのはハガネのかねである。かね槌かね氣のかねは鐵である。佛前で叩くかねはフセガネの鉦であつて御寺で撞くかねはツリガネの鐘である。カナシバリ、カナツンボなどのかねは堅いと云ふ意で鐵で縛つたり鐵製の耳の意でないことは明らかであり、又カネキンは鐵でも金でもない。葡語であつて素地細かき布に過ぎない。日本語のかねは言海に據るとカーンと響く音から出た語で金屬の意だそうであるが、語原は兎に角元來はカナブツ、カナヤマのかねの様に金屬の意である。而して以前はかねの種類は主としそ其の色で分けて居つた。即ちコガネは黄金であり、シロガネは銀、アカガネは銅、アラガネは鉛、クロガネは鐵である。之を五金と云ふた。

かねは漢字では金である、金は元來支那では金屬のことであつて黄金のことではなかつた。漢書貨貨志には『金ニ三等アリ黄金ヲ上等トシ白金ヲ中等トシ赤金ヲ下等トス』とある。日本で金屬の名を其の色で分けることとく支那でも同様にして分ける。黄金は即ちコガネで白金はシロガネ即ち

銀で赤金はアカガネ即ち銅で青金は鉛で黒金は鐵である。説文に『五色ノ金ノ内ニテ黄ヲ長トス』とある。即ち金屬中黄金は大將であると説いて居る。今も昔も變はりはない。

白金に銀と云ふ字はあり、赤金に銅、黒金に鐵、青金に鉛と云ふ字はある様に黄金にも之を一字丈で表示する字はあつたらしい。爾雅に『黄金ヲ邊ト謂ヒ其美ナルモノヲ鑠ト云フ、白金ヲ銀ト謂ヒ其美ナルモノヲ鑠ト云フ』と載つて居る。我源平盛衰記に『平重盛砂金千兩南銀百兩祈禱料トス』とある。南銀は銀貨であつた。

この様に黄金には鑠と云ふ字はあつたが何時の代にか之に代用するに金の字も以てした。これは黄金は金屬の大將であるから金屬の總名を採つたものであらう。時珍の本草綱目に『金山金ト沙金トノ二種アリ』と出て居る。此の金は黄金のことであることは明かである。又同書に『石ハ氣ノ核ナリ、土ノ骨ナリ、大ナルハ岩巖トナリ細カキハ砂塵トナル、其ノ精ハ金トナリ玉トナル』とある。此の金は金石の金で金屬の意である。

玄奘譯の阿彌陀經には極樂世界の七寶を『一ニ金、二ニ銀、三ニ吠琉璃云々』としてある。又鳩摩羅什の譯には之れを金、銀、瑠璃云々とし、神和譯には金、銀、

吠琉璃云々とある。最後にマツクス、ミユレルの英譯にはゴールドシルバー、ペリル云々となつて居る。此の四譯を比較して見ると古い漢譯の金は黄金であることは明である。七寶の内他の一二は一致しないが茲には横道となるから説明を省く。兎に角金の字を黄金の字の代りに用ひ初めたのは随分古い昔からであると云ふことはこれで判かる。

そこで日本語のかねに種々の意味は潜在して居つて時と場合で出て来る。之れと同じ様に金字にも種々の意は含まれて居る。一金幾何と書けば貨幣の金高となる。又金と書いてキンと讀めば黄金であり、かねと讀めば金屬である。例へば金山をカナヤマと讀めば鑛山でありキンザンと讀めば黄金花さく美知のくの金山である。まぎら

はしいのは金の字である。貨幣の意を示す場合は又銀で代用することが多い。即ち銀行、貨銀、路銀等之れである。

金穴と書き日本流の意では金持ちであるが朝鮮流ではクムヨルと讀み黄金鑛山である。又金をキムと讀むと人の姓となる。金さんの穴など誤讀すると大きな嫌な間違ひとなる。金店は金鑛精錬場の事であつて金さんの店舗ではない。又錢屋でもない。

本草綱目を度々引き合ひに出すが此の書の金の條に面白き事は記されて居る。『洛陽江ノ溪河ニハ皆金ヲ産ス、居人ハ多ク鷺鴨ヲ飼ヒ其ノ尿ヲ探リ之レヲ以テ金ヲ陶次ス』と云ふのである。鷺鴨の糞尿と金粒とは科學上如何なる交渉があるか。敢て一笑に付すべきものであらうか。

黄金は中及北歐諸國では皆黄色

の意の語原から来た言葉である。之れは東洋と相似の點である。又金屬を英語でメタルと云ふが此の語原は希臘國の埋すといふ意味の言葉から来た鑛山と云ふ言葉である。故に鑛山と云ふと希臘では金屬を探索する意味である。實に鑛業の第一義は探鑛であらねばならぬ。鑛山の失敗は概ね之れを忽せにして徒に採掘製鍊の設備に資力を費すにある。眞鑛に考ふべきことである。

白金は元來シロガネと讀み銀を指したものであることは既に述べたが、今はシロガネと讀む人はなくハッキンと讀みてプラチナムを思ふ。悪い和譯である。プラチナムの漢字としては寧ろ支那流の鉛を採つた方がよい。そして之れをハッキンと讀ませばよい。之れならば銀と思ふことはない。支那には假名がない。其れで舶來の金屬の爲めにドシ／＼新しく字を作るか又は宛字を用ふる。左に重なるものを並べて見よう。

- 一 鉍 (亞鉛) 錳 (滿俺) 錳 (安質 母尼) 鎳 (タングステン) 鉬 (水鉛) 銻 (ニッケル) 鉛 (白金) 銻 (コポルト) 鋁 (アルミニウム)

何れを見ても特に錳鎳鎳鉛鉍銻は羨ましい字である。さすがは漢字の本場であつて實に妙哉である。赤金もアカガネと讀むと銅となるがセキキと讀めば赤味のある黄金であらう。銅は金に同じと書く。之れは『銅ハ金銀ト同一根源ナリ故ニ銅ハ金ニ從ヒト書ス』(本草綱目)とのことである。

昔は金屬を五金の屬と稱して金銀銅鉛鐵を數へたものである。今は泰西の學に倣ひ五十余の金屬を算するに到つた。然し其の十中八

九は貴金屬か又は其の儘では使用出来ないものであつて量に於て最も多く社會に奉仕して居るのは矢張り五六種に過ぎない。鐵銅鉛亜鉛及鋁(アルミニウム)である。之れを現代の五金と云ひ得る。

次に黃白赤青黒色とりどりのカネを得る原料の事に移るが、昔の人は金は石の精であると考へて居た事は既に述べた。金屬を得る原料は即ち原石又は粗石である。之を和名ではアラカネと呼び、支那では鑛の字が之れに相當する。我々は丁寧にも之れに又石の字を足して鑛石と稱して居る。漢字の濫用である。鑛の代はりには支那の書物には即又は鉍と云ふ古字を用ひて居るものもある。鑛の字は何故にアラカネに相當するかと云ふと矢張り本草綱目に『鑛ハ粗惡ノ意ナリ五金皆粗石アリテ之ヲ銜ム、故ニ粗石ヲ鑛ト名ツク、恰モ麥ノ粗ナルヲ麩ト曰ヒ犬ノ惡キヲ獺ト曰フガ如シ』と記してある。それから鑛と礦の二字あるが同意味である。粗石なるが故に礦であり金屬の原料なるが故に鑛である。何れを用ふるも變りがない。之れを特に使ひ分けするに及ばない。黄金のアラガネは主として水晶と同質の石英である。砒素や硫酸の原石は銀色の毒砂や金色燦たる黃鐵礦である。使ひ分けも實に不可能である。

最後に大寶積經と云ふ佛書に『金輪ノアルトコロヲ金輪際(こんりんざい)ト云フ、大地ノ厚サ一百六十萬由旬ノ底ナリ』と云ふ文句はあるやうである。之れは即ち何千年前の地心金屬説である。今の科學は數百年の研究を積み漸く大地の厚さ一千七百料の底から中心迄は金屬から出來て居ると云ふ

地心金屬説に達し得た。歴史は繰り返へすと云ふ。此の學説も同じく繰り返へしたものと云へる。しかも、二千五百年と云ふ随分長い周期で繰り返へしたのである。今後此の地心金屬説は再び忘れられて次の二千五百年目頃に目新しき學説として三度目の御勤めをするであらうか。

問嶋の回顧

一 記者

○藤田(治策)博士最近の執筆に成る『問嶋問題の回顧』と題する一冊子を買った。

○國際公法學者たる氏が、愛國の熱誠禁ずる能はず。一身を懸つて、明治四十、四十一、四十二年の交、邦人未到の間嶋に入り、朝鮮と清國との間に、所屬權を争ひ來つた同地の問題に、指を染めた外交秘録である。

○例に依つて、暢達雄勁な文章は、一氣に全卷を快了せしめた。そして一行の苦心と、在問嶋の鮮支人の關係と、歴史的交渉經過は判然として我々に印象して來る。○一讀物としても實に面白く、大懸りなものだ。

○博士は、自らを語らず、多く齊藤大佐を假つて、男子體操の氣を吐いてゐるが、末段兩三章の熱意と氣魄とは、博士その人の全面目を露呈して、惻々々々迫るものがある。

○この書の如きは、我が外務當局の事勿れ主義の、一つの生き證據、且つ彈劾狀ともいへよう。

親は子の爲に

其の後子供に對し種々の言辭を弄し夏は暑い故短髪がよい、仲は

銀銅鉛鐵を敷へたものである。今は泰西の學に倣ひ五十余の金屬を算するに到つた。然し其の十中八

○この書の如きは、我が外務當局の事勿れ主義の、一つの生き證據、且つ彈劾狀ともいへよう。

親は子の爲に

井上 要 二

(京城女子技藝學校)

親は子の爲に惱まされ苦しめられ又た慰められ又た教えられることは日常頻々に起ることであるが最近私は妙なことを幼少なる子供より觀察されて親として大に驚り親は子の爲には日常座臥進退の動作は勿論、外觀上の容貌服裝等に到るまで、注意せねばならぬことの考を深くさせられた。

親が子の爲に教えられて身を慣まねばならぬと思ふたことは、子供が私の眞似をして時々鏡の前にいつては頭に油をつけたり、櫛を使ふて彼自身の頭髮を梳らんとするのみならず、髪を長くせんとして髪を短く切ることを拒むようになった。

私は昨年初春の候、不圖盲腸炎に罹り約四十日間種村病院に入院治療を受けることになつた、其時病床に於て頭髮が大分長くなつた入院前頭髮は五分刈といふか、二三分刈といふかの頭に於て居つたが、頭がかゆくてならぬ、頭髮を伸ばしたらば或は少しはよいかもしれぬと教えてくれた人が有つた故、若返り法の一つともなるかも知れぬ、伸ばして見んかと考へて居つた時であつたから、大患臥床四十余日の記念と思ふて髪を伸ばすこととした、其れより一年有半の歲月が経つた今日である。

彼の髪が長くなつて醜く且つ暑く見え五月蠅さそうであり、又た子供としては髪があまり長くない方がよいと思ふて、散髪屋に行くと命じても散髪屋に行くと髪をきるから行かぬ、御父さんの様に髪を伸ばすと主張して私共の言ふことを聞かない、又周囲の種々の人より説得せしめんと努めても中々承知せぬ、御父さんの様に髪を伸ばすと御父さんの髪の様子が白くなるぞと、言ひ聞かせるると白髪が奇麗でよいと申して如何にしても親や周囲の人々の言ふことを聞かない、この幼兒の言辭たるや又た其の心情たるや眞に親を動かす貴き教訓を含んで居ると思ふ昔より『負ふた子に教えられて淺瀬を渡る』と言ふ名諺があるか、四歳か五歳位の頭の單純なる可き者に如斯觀察力があることを思ふ時に、人は親より受くる感化の最も多きことは考ふるまでもなきことであるが、すべての環境より種々なる感化を受けることの偉大なことが眞に明瞭になる。

其の後子供に對し種々の言辭を弄し夏は暑い故短髪がよい、伸ばしたいならば涼しくなつてから伸ばせと言ひ聞かせて無理に散髪なましめた處、子供心にもあゝ頭が涼しくて氣持がよい、家内に居つても戸外に出ても涼しい〜と言ふて悦んで居る、秋涼の候が来る時如何なることを申し出るか？

◆ 佳人才子錄

北漢山人

○京畿道の××視學は、尾崎紅葉の小説にあるやうな好男子——色白く、眉濃く、華奢で、背のヌラリとした秀才型。さてまた、××夫人と來ると、時代の尖端を行く豊麗型——その皓齒明眸といひその肩や、腰の線のカーブといひまことに以つて、近代男の贊嘆措かざるころであるといふ。

○夫人は、現に某校で教鞭をとつてゐる。

○いつか女流教育家六七名、某所で落ち合つた席上、『似合ひの夫婦——美男美女の結合といふことは、なか／＼むつかしいことで大抵が一方がよければ一方が悪い實に不思議なものである。若し佳人才子遭逢の幸運を得たものがあつたら、随分おこつてもいゝわね』と中の或るものが何氣なくいひ出すと

○卒然『だつて……だつて、そりや困るワ……』といひ出したものがある。見ると××夫人で『でもネ、あたしお汁粉位なら……奢つてもいいわ、皆さんそれで勘忍して……』

○一同がその時、どんな顔をしたか。皆さん考えて御覽なさい。

短髪の時毎朝頭を冷水にて洗ふて其の後は手入は全く不要であつたが、長髪となると中々厄介で櫛も使はねばならず、油も少々はつけねばならぬと言ふことになつた、この頃は毎朝鏡に向ふて整容することを忘るゝことはなくなつた、が最初の頃は時々頭を洗ふたばかりで、整容することを忘れ、蓬々たる髪にて外出することがあつて大に滑稽を演じたこともあつ

心中を見た話

見目徳太

(京城電氣會社)

近松物等で描寫された心中物語には美的な點や詩的な部分を多分に含み若き心には共鳴し得る處もあるであらうが、さて心中の現場を見て詩と美を感じる程の餘裕はとてもない。芝居で見える様な思ひ入れの「くさりよろしくあつて醜し出された劇のクライマックスの雰囲気に向ふをうならし、氣の弱いものは涙を落し、覺えのある身につまされてすすりなく聲も聞えたことであらうそのあとの始末がこの有様とはなさない」と云ひたくなる程のものでみにくいものたち勝つてゐるのが一般の心中のあとである。

私はこれまで二度も心中を見てゐる。一度は私が十一か十二の頃で隣の町の小學校に通つてゐた時である。學校の歸り途に村外れで心中があると聞いて友達三三人と飛んで行つて見た。それは小川のほとりの草叢の中で村の十八九の娘と隣村の若者とが獵銃で心中をして居た。二人とも全く血にまみれて、あたりの草も小砂利もどす黒い血に染まつて全く二た目と見られなかつた。私はその晩は夕食も食べられなかつた。又怖くて獨りで便所へも行けなかつたことを今だに記憶して居る。二度目は私が二十二の時東京で出遇はし

たのである。本所の親戚の家から朝早く學校へ行く途中腰襦の袂の棒抗に若い男女の抱合死体が引かかつて居た。二人は緋のしごきでしつかり括り合はせて居る。女は髪が大分亂れて居たが水に透き通つた横顔は全く凄じ程綺麗に見えた。裾は友禪の長襦袢が捲くれて白い太股まで現らには見えてゐた。暫くして巡査が来て二人の上に蕪を掛けてしまつたので見えなくなつたから私も残念ながら學校へと急いだ。此の時のほちつとも怖いと云ふ感じはなく反つて少し變な氣になつた。

以前私が撫順炭坑に勤めて居た時、私の使つた圖工に三度も心中をし損つた男が居た、此の男その頃は三十餘りであつたが、心中の相手はいつも藝者で三度も相手は死んで自分は助かつたのである。私はその男を一夕自宅に呼んで心中話を聞いたことがある。三度目の時仰向けになつてゐる女の上に馬乗りになつて女の喉を目がけてまさに短刀を突き立てんとする刹那、女は自分を見て、さも嬉しげにつこり笑つたので、最初の一刀は手許が狂つたと自白してゐる。兎に角、死の刹那はとても嬉しいもんだと云つてゐる。此の男は美男と云ふ程でもないが、小肥りした顔に笑へば頬に鷹の出来るおつとりした様子であつたが、會社ではさつぱり役に立たないのに女に對する魅力は確かに絶大であつたに違ひない。私はそれからと云ふものは、男で此の人は女に惚れられるかどうかを判断する尺度を此の男に置いて居る。

慶應觀戰記

津田常男

(遞信局)

慶應来る。今の慶應こそ野球ファン憧憬の中心である。我等はいつも活字の上でその活躍を想見するのみ。東京に居ればとてあの物凄くファンの殺到振では、外野裏でも見れるかどうか、第一観る氣にならないかも知れない。

京城に居る有難さには、悠々として心ゆくまでスタンドの人となつて、この慶應が、我等と馴染深い京城三チームとの快戦を観ることが出来たのである。

今年の長い雨季の眞唯中で、不思議に野球のあるその日、甚だしきは野球のあるその時間だけが雨の脅威から免れて、豫定のプログラムがスラ／＼と運ばれたことは巧な盗塁にも似た鮮かさで、私はつく／＼主催者及びファンの幸運を想はない譯には行かなかつた。

第一日の對鐵道戦は、いはばファンに取つても前哨戦である。曾に聞く慶應軍なるものの實際の程度が知りたかつた。第一選手の顔も見たかつたので、私は慶應ベンチのある一壘側に居た。で私はこれから秋の東都リーグ戦の記事を讀んでも、慶應選手に對しては、最早活字だけから来る空想的な人物を想像する必要がなくなつたのである(正直にいふと、私の漠然たる氣持は、昔から早稲田勝負なんだが、見た感じは今度の慶應は餘り悪くない)。

慶應はどの試合にもだが、斷然

餘裕を持つて居る。餘裕は力から来るのであるが、見て居る感じから行くに餘裕が力を作つて行くやうにも思へる。慶應が田舎だからといつてもつとも調子を落して居るのだとは思はないが、力瘤の入れ具合が違つてくる點はあつたかも知れない。唯斷じて動じないといつた自信ある態度がよく現はれて居た。

宮武や山下は餘りに英雄兒的に扱はれて居ることに苦笑して居るやうでもあつた。宮武が三振したとき、ワッツと揚つたスタンドからの喊聲は無理もないやうなものだが、默殺の方もつとよかつたらう。ポツクスに立つと餘りに深く守り過ぎた。といつてその見當はなかく六ヶ敷い。その山下が二壘惡投に一壘で逸球したときは苦笑して居たが、鐵道はこの回のチャンス遂に掴み得なかつた。

鐵道の西村投手が交替したときは、戦績からいへば未だ必ずしも退くべきでなかつたかも知れないしかしその退いて行く後姿はこの上神經を使ふのは嫌なんだといふ風に見えた。丁度下り坂の横綱が突然隠退の聲明をしたやうなものであつた。しかし、鐵道は善闘した。敗れて悔なしである。もつと慶應を慌てさせる試合が起らないものだらうか。

第二日の對遞信戦には、遞信の投手が最初に誰であらうかとファ

ンの間に問題になつた。俄然岡崎がプレートに立つた。一回一點、二回三點を献じて、三回金田と代つたが、この回も亦二點を獲られた。しかし爾後遂に最終まで點を與へなかつたことは偉とするに足る。往年大毎軍を惱したミラクル投手の面影が消えない所興味が多い。始めから金田だつたらといふ者もあるがその結果は保證の限りではない。慶應軍にしても最初の三回以後無得點とは餘り名譽ではない。遞信には淺野の美技があつたが、二回慶應のダブルスチールに乗せられた如きは未だ洗練の餘地が多いといはなければならぬ。慶應はこの日も多くの餘裕を保持して居り、軽くあしらつたともいへるが、遞信も亦善闘した。鐵道と同じ得點を與へて、兎に角一點を得たことは、その健闘を賞してよからうと思ふ。

第三日對殖銀戦は、種々の意味に於て京城に於ける紀念すべき試合であつた。ファンの殺到したことも京城空前のことであつて、私が四時きつかりに役所を飛出してグラウンドに駆けつけたときは、スタンドの大半は既に觀衆で埋つて居た。漸く三壘側の後方に席を見出した爲に、井川や楠見の美技が稍都合好く見られるといつたものであつた。

試合は極めて波瀾曲折に富んだといへる。但しこの波瀾は試合を一貫した性格的のものではなかつた。そこに京城チームに對する最後の不満がある。そしてこの不満を味ふことが慶應チームを迎へた一つの意義でもあるのだ。慶應はこの日、ベスト・メンバを編成した。それは對敵行動としても、對ファン行動としても當然であつた

殖銀は宮武の球を能く打つた。二回には二點を得て一點をリードしたのである。これは前二回の試合には見られなかつたことである。殖銀の持つ積極味といふものが發揮されたのである。しかし、この積極味が敵に不安を興へる代りに次第々々に安心を興へる様になつたのは、三回、四回、五回に殖銀が拙み損つたチャンスにある。相手が慶應でなかつたら當然物にして居る筈の好機を齒痒くも、ポロリと落して行つたのは、無論慶應の心憎いまでの餘裕の爲であり、技量の爲であるのだが、あれまでに肉薄し得る力があつて何故あの結果に到るだらうか、大に考へさせられた。五回の裏では果然慶應が反撥してしまつた。この時關ヶ原の戦は終つたのである。六回の李榮敏のホームランは、

それ自身一つの大きな美技であつた。日本の代表的投手宮武の球に對して演ぜられた本壘打である。單なる記録としても誇るに足らうファンの歡喜も亦大きい。唯之を試合経過中の一出來事として見れば、大阪陣の眞田幸村の奮闘のやうなものであつた。七回以後は慶應一流の循環式交替によつて、宮武は水原に代り他の選手の入替もあつたが、どんなもんだいといつた風の好調子になつたに反し、殖銀は守備の上に意氣が阻喪して下つた。最終回の難球も捕見の好捕で、遂に殖銀には捕尾の勇を振ふ餘地さへ興へられなかつた。スコアも一-A對三といふ荒れ方をして居る。試合の振幅が大いだけに各場面には面白さがあつた。殖銀の努力は勿論賞すべし。そのスタイルの大きさは儘にこのチームの特

色である。荒削りから仕上げを如何にするかがこのチーム將來の問題ではなからうか。

無秘訣の話

三木一彦

○醫學の教授稻本龜五郎氏には五人のお子さんがあり、順々に日之出小學校を卒業し、今では末の坊ちやん唯一人、同校に在學中だが、いづれも六年間首席でブツ通し、『お羨ましい……』と、口々にいはれてゐる。

○稻本夫人に聞くと、『宅では何んにも申しません。本人のするやうにさせてゐます。秘訣?……そんなものがありませうか。あれば、私共の方から何はせて頂きたうございます』

將棋道閑話

永樂町人

○今夏の京城の將棋界は、なかく多事であつた。

○月初めに、矢野七段が來た。六十餘年の生涯を、將棋に捧げた人で、その棋風は、豪壯の二字でつくせる。

○京日の後援で、當地の辻六段と二番指した。

○最初の香落經は、形勢頗るよく、殆んど矢野氏の勝ときまつてゐたが、少し焦り氣味で、惜しいところを盛り返されて敗。

○平手番は、鮮銀の色部氏のところで指したが、これは始めから辻氏に好手多く、何としても勝負

のない將棋であつた。

○その翌日矢野氏は、黯然として、『年をとつて、私の將棋もユルミました。何となく早う死んでしまいたいやうな氣持がします』マジメであつた。

○甲旬になつて、藤内六段が來た。大阪朝日專屬の棋士で、當今六段中の最強者である。三十六才立派な体格をもつてゐる。

○京日の後援で、辻、藤内、池田(平壤、六段)の六段決勝戦を行ふことになり、招電に依つて、池田氏は、急遽平壤から馳せ參じた。

○第一戦辻對藤内は、藤内の勝
第二戦池田對藤内も、藤内の勝。
第三戦辻對池田は、池田のもの

なつた。

○即ち藤内二勝、池田一勝一敗二敗といふ順である。

○一番勝負だから、何ともいへぬが、藤内は、理つめを以て勝り池田は、闘力を以て他を壓し、辻は、一流の精緻と、粘強とを以て勝つてゐるやうに見られた。

○何分辻氏は、晝の勤務がありまた體質上、他の二君に比して、割の悪いところがある。考へてやらねばならぬ。

○この空前の對戦に對し、京日、等神氏、鮮銀色部氏、木本氏、十八銀行の井上氏、並に土木方面の横井、木間兩氏の御後援、御鞍旋は淺からざるものであつた。ファンの一人として、御禮申上げる。

自然にかへれ

眞の八世の幸福は何れに存する
を感じない。
金殿玉環美衣美食一タの支風

自然にかへれ

辻 董 重

(京城女子實業)

平和な眠を續けてゐる。彼等には、いふせき住居さへもない。

自然より亨くる天の試練はファイヂアス像の其のもの、様な肉體と健康とを與へる。

一食五錢の眞瓜代は優に彼等の生活を支持して保健上何等の支障

○平手番は、鮮銀の色部氏のところで指したが、これは始めから辻氏に好手多く、何としても勝負

○第一戦辻對藤内は、藤内の勝第二戦池田對藤内も、藤内の勝。第三戦辻對池田は、池田のもの

横井、本間兩氏の御後援、御斡旋は淺からざるものであつた。フアンの一人として、御禮申上げる。

を感じない。

眞の人世の幸福は何れに存する
金殿玉樓美衣美食は一夕の夜風に
忽ち肺尖を犯され、ウイタミン何
とやらの不足に膏瓢單の様な顔を
する。物質文明の餘毒は滔々とし
て人生を奈落へと導く。

消費節約も失業救済も先づ根本
の自然に歸り自然に順應するの原
理に立ち歸らなくては嘘である。
眞の幸福を滿喫する點に於て世の
所謂富豪と稱する者よりも以上に
彼等には心からの幸を享受して居
るのではあるまいか(昭和五年八
月十五日)

私は夕食後散步等々此等の人達の状況を仔細に觀察して訓へられ戒しめらるゝ點が頗る多い、昨夏以來此の路上休息者の最も多かつたと思はるゝ或夜の數を調査してみると、百五十二名といふが最高レコードであつた。大部分は一家眷族總出の盛觀を呈してゐる。只一枚の疊表又は筵の上に旦那さん奥さん、娘子供と六七人も群をなして居るのも珍しくない。

清溪川を撫でる川面の涼風を體身に浴びながら世俗を超越して華胥の境に逍遙する其の寢顔、全く平和其のものである。奥様と娘の寢様はさすがに謹み深い。其の隣りには屈強の若者も横はつてゐる然し此迄に赤裸々であると風紀上の問題も醸す眞はあるまい。電車車庫の幾千燭の電光と月光に照され且つ殆ど一枚の夜具もない彼等の間には。

特に我々に訓へらるゝのは子供である、母親の大きな乳房に縋つたまゝ丸々太つた全身を砂上に抛げ出して安々と眠つてゐる。

室内の暑熱に喘ぎ喘いで眠に就かれず、十二時一時の深更に起き出て見ても彼等は極めて原始的な

木の雫

岩淵山與水

○ 花さし更えた板の間の水ふきひろげ

○ 雨あと木の雫ゆくうしろ車のベル

○ 裏ツ開梅雨照るイツツ建つたの大けバラツク

○ 行きは朝かげ道べを草の旭匂ふが穂を

○ 朝たけ霽れも小雨草花おしねなみだれ

○ 築地しめりを落つが栗花や手拭を肩

○ 橋かけくまの沙を渚の生えつゞく草

照 穂

野 田 信 子

(松 峴 洞 舍 宅)

【一六】

に振つて見せると、パパもママもすつかり上機嫌だ、僕はおかしいからハ、ハ、と笑つてやると皆家中で「ワハ、ハ、ハ」

○この間姉さん達二人が元山へ海水浴に行つて居てつい二三日前歸つて来た、『迎へに来る時氣絶しない様に仁丹でも用意して来て下さい』といふ事だつた、チール程黒いも〜暗闇だつたら顔の輪廓なんか分るまい、眼と歯だけが特別に目立つて美しい、よくママはブラットホームの薄暗い所で二人を見つけたもんだ、パパはゴルフで焼いてかなり黒い、兄ちゃん二人も終日カン／＼した炎天で野球したり、仁川へ行つたりで眞黒い、家中で白いのはママと、しもちゃんも、僕だけだ、テーパーにつくどどうしても黒の方が優勢なのでパパは僕を病人扱ひにして「チツト肝油を飲ませて呉れ」：アーン僕はお陰できらいな肝油を日に一度付きつと飲まされる。

○暑い時僕のキライなのはアセモだ、この頃散髪をされてタル坊主になつたので幾らから〜にはなつたけれど、家中の誰でもがそんなに苦しんで居ないので僕一人一番ひどく苦しめられるのはホト〜閉口する、時々僕は肝癪を起してやる、夜中でも大聲を立て、泣いてやる、するとママは起きて僕を涼しい所へ連れて行つて團扇であほいではシツカロールをつけて下さる、男のくせに首や腋の下に白いものをべた〜つけられるのがたまらなく嫌いだ。

○姉ちゃん達皆音楽が好きだ、僕は兄ちゃん二人よりもずつと好きで日に一度レコードを聞かぬと氣がおさまらぬ、兵隊さんのラツパとか、オーケストラなら大抵氣

僕のママが雜筆社の水井さんに度々催促せられて居るのを見て可愛想だから僕が代つて隨筆一くさり。

テル坊の隨筆

○僕が初めてオギア〜と初聲を上げたのは忘れぬ去年の八月廿八日だつた、あれから早や一ヶ年の月日が流れた、ほんとうに早いものだ。

毎年夏になると大人は暑い〜と云ふ、去年と同じ位でも今年は格別の暑さだ〜とほす。僕はママのお腹の中で小さく居るよりも早く廣々とした世の中へ出て娑婆の風にも當つた方が胸口だと思つて豫定日より一週間ばかり早く飛び出したらママは面喰つてうろたへた、シモちゃんも、青くなつた、パパもハラ〜した。何故つて余り僕が急いだので産婆さんが間に合はなかつたんだもの、でも幸ひ夏だつたから風も引かずに済んだが僕も後から一寸あわて過ぎたナーと思つた、併し大体僕に相談もせず勝手に豫定日を極めるなんて大人はけしからんよ。

○僕のことを家中の者がテル坊〜と呼ぶ、時にはテル〜坊主なんていふ、實に失敬千萬だと腹の内では怒つて居るが顔へは表はさない、今怒つて見たつて皆が面白がつて余計にいふだけで止めはしないから大きくなつてからかた

めて怒つてやらう。

○僕はお腹に居る時分からロン子さんかバリ子さんかなんて皆から變な名を期待されて居たが、パパは『どうせ苗字が野田なんて百姓名前だから姓にふさわしい名の方がいゝよ、田に一面稻穂が照り輝いて居る意味で、照穂？はどうかネ』と仰つた、ママは『何んだか坊んさんの名前の様ですネ、でも姓と名とつり合ふんならさうしませう』といふ事になつた、或時他所の小父様が赤チャンの名前は？と御聞きになつた、ママが照穂ですと答へたら、『ナール程お父さんのお職掌にふさわしい名前だネ、優良水利組合か、アハ、ハ、ハ、皆は譯を合はせて笑つた何がおかしいんだか僕にはサツパリ判らん、人の名前を笑ふなんて随分だ。

○僕には姉さんが二人と兄さんが二人ある、二對二だと言つて居たのに、男の方が一人優勢になつたら、チイ(小)姉さんがハンパになつたと嫌な顔をした、兄さんは達は大喜び、『野球のチームをつくるからママもう六人産んでネー』とネダツた。

○この頃僕が少しづゝ人眞似をしたら家中でよつてたかつて幾度でもやらせる、坊『テル自動車』と聞く。『ブ〜』といふと皆はとても喜ぶ、『電車は『ゴ〜』と手も足も体中一緒

に入る、森の鍛冶屋のコケッコも好きだ、中途頃から鍛冶屋の

のしらべ〜』なんて馬鹿にあはれつぽいキ〜聲をして『夜の

さない、今怒つて見たつて皆が面白がつて余計にいふだけで止めはしないから大きくなつてから、かた

車は』と聞く。『ブー〜』といふと皆はとても喜ぶ、『電車は』『ゴ〜』と手も足も体中一緒

きで日に一度レコードを聞かぬと氣がおさまらぬ、兵隊さんのラツバとか、オーケストラなら大抵氣

に入る、森の銀治屋のコケユツコも好きだ、中途頃から銀治屋のかねの音がチン／＼とひびき出すと思はず身体が浮き／＼してハワイのフラ／＼ダンスの様に下半身をヒョコ／＼と振り出す、手もたゞ度くなる、皆は僕の様子がおかしいといつて笑ふけれど、笑はれたつて、チツトもかまやしない、一生けんめいフラ／＼おどる、でもあの悲しいメロデーのトロメライなんかをかけられると、聞いている内にポロ／＼涙がしぼれて来て仕様がな、小姉さんなんか僕が悲曲をすかないのを知つて居てわざと泣かせ様と思つてテル坊／＼『アワレーゆかしき歌

旭堂翁の句

三木一彦

のしらべ〜』なんて馬鹿にあはれつぽいキ〜／＼聲をして『夜の調』なんか歌ひ出すもんだからたまらなくなつてペソをかくと、アハ、ハ、ハ、ごめん／＼なんて笑つてる、おどつても泣いても笑ふんだもの、大人なんか僕等に同情がない、實に壓制なもんだ。あゝ何んて馬鹿らしい大人の世界!!!

本誌原稿

毎月十日までに御送付願上ます。行數字詩等御隨意

○過般物故した高橋章之助氏は旭堂と號し、多年俳句を樂んでゐたが、それは何々悉く思君愛國的なもので、互選でもすると、誰でも一目して、先生と判つた。○選に洩れなると、ツマラなささうな顔。『今の人には、拙者の句は判るまい。』御座近く置かれし菊の譽れ哉松茸や土のまゝなる御臺驛献上の葡萄に國の譽れかな下萌や新たに拜す多摩の陵

商賣往來

明治屋

婦人記者

曆の上で秋はたつたといふものゝ少しも涼しさを感じないこの頃である。街を流れる人通りの息詰るやうな騒音をよそに涼しい酒の話。ここは明治屋の事務室の奥。支店長はかねて味覺の通であるといふ事をきいてゐた。月並な店務の話でもあるまいと何か晩涼にふさはしい話をと持ちかける。支店長は、無論、あつさりした、通な、ほんとに酒を味ふといふ形である。『盃は薄手の小形で、ふくらみのついたもの、これに冷蔵庫で冷したお酒をついで飲むと、眞珠のやうにころころと咽喉にころげこ

むので……』お潤をしたのは間もなく顔に出るが、冷したのは食後にでる。酒はむろん月桂冠で量は?……二本でせうと、口をさしはさめば、『アハ、ハ、ハ、まるで、覗いて見てきたやうな事をいふ。』これビールになると、ビールは酒一合に對して一本といふ割合になるから一本では足りない譯になる。冷酒——冷蔵庫で冷した酒を頂く時は、うに、しをから、このわたからすみ、こんなものがほんの一品あればいい譯。夏になつて胡瓜や茄子が出てきさう欲しくはない。やつぱり冬のさむい時、小指位な胡瓜を食べる事は涼しい味覺を啜る。私も——カンカン燃えさかるストープの側で南國の胡瓜をカリカリと味ふ事は、全く涼しい爽快な事だと同感する。ましてそれが二錢や、三錢の端はなものでない事に於いてをやである。最近、中山莊の支那料理がおいしい

と思つたとの事。京喜久などといふさうである。ビールにはチースが一等だ、チースとメリケンゴをこねたビスケットなどもいい。ビールだといつても夏冬を通じて用ゐられる。冬、ストープを焚いた室の押入に入れて置くと、丁度いい温度になる。まあ夏の湯上りと同じ位な愉快な氣持は味はれる。ユツプは無論、薄手でビール一本が二杯になる位な大きさだ。ドイツの學生連が何々組といふのを作つて、陶器製の手のついたもので飲むのもあるさうだ。これは酒の話ではないが、橙や柚子に匹敵すべく猶ほ高尚なものにレモンがある。カリフォルニアの産ではるばる太平洋を渡つてきたものだが、あれどあななどの實用にも役立つが、これの使用によつて食味が倍加するのを感じる。その香氣と視覺に訴へる美感とに於いて他に比べるものがないともいへる……

貧乏人の金貸 と金持の借主

山 根 諒

(金融組合聯合會)

日本は金利の高い點では世界の四等國とか五等國とか云はれて居るブラジル程度であると云ふ人がある。而し近年は日本の金利も随分下つたからブラジルと比較するのは無理の様に思はれる。が事實高いことは間違ない様である。

金利の高低は能く一國の文化の度をも卜するに足ると云ふから世界の一等國日本も一寸此點では怪しい譯である。

大體日本の金利の高い原因は色々あろうが、金融機關の統制が充分に行はれて居ないで小銀行が個々分立して居るが爲めに資金の運用操縦に於て遺憾の點が多いばかりでなく徒らに經營費が嵩むからであらう。

英國は四十五の銀行しかないが其の支店は五千六百に達し、一行で千餘の支店を持つて居るのもある。獨乙は伯林に八大銀行がガンバツて居て地方の數千の支店を持つて居る。米國は是等の二國より劣つて居るが一本店に對して十四四の支店銀行に當つて居ると云はるゝが、日本はまだ一本店二、三支店であらう。これでは經營の合理化は前途遠慮であり金利の低下も期待出來難い次第ではある。

それやこれやの關係から日本でも銀行合同の必要を唱導さるゝことは既に久しい以前からのことである。

ある。が中々目的が達せられないで居た。

然るにここ數年來金融經濟界の大恐慌が次から次へと襲つて來て無理な經營に墮して居る銀行業では、やつて行かれないと運ればせながらに氣が附いたのか、銀行合同の勢は大分促進した觀があり、經營も自ら合理化せんとする傾向にあることは喜ばしい事である。

而しながら銀行合同の斯る趨勢は結局資本の助長となり、資本主義の達成に一段と役立つこととなるのであるから、之れに相對立して庶民金融機關の整備發達が伴はなければ到底一國金融經濟界の健全なる發達は望まれない、金利の低下より期待は出來ないのである。否寧ろ此の點に着眼しなかつたならば爲に反て憂ふべき結果を招來するかも知れないのである。

資本の集中は結構であるが、細民の零細資金迄も此の勢に吸ひ込まれては大體である。近時大藏省當局は此點に鑑み庶民金融機關の改革に付てあせつて居らるゝのも無理からぬことと思はれる。

内地の庶民金融機關としての代表的ものは貯蓄銀行、信用組合郵便局をも擧げてよからう、而して是等の機關の依つて蒐集せられた資金は素より主として庶民の粒々努力の蓄積であらうが、抑もそ

【一八】

の資金は何れに又如何なる方法で使はれ居るのであらうか。若し大銀行の資源となり國家事業や民間大事業に投資せらるゝものが大部分であるならば是等の機關は遺憾ながら庶民金融機關としての働きを十分に爲して居ると認め難いのである。

云ふ迄もなく庶民金融機關は集積せる資源を庶民の上に還元する作用を營んでこそ初めてその價値が發揮されよう、庶民は年四五分で預けて年二三割の金を使つて居るのでは助からない譯である。蓋し内地の現状は多數の貧乏人が債權者となつて居り、少數の金持が債務者となつて居るかの如き奇現象を呈して居る様にも見らる。

斯くては金利の低下は云はずもがな、一國の金融經濟界は素より合理的發達は期せられないであらう。

我朝鮮は如何、諸君は能く知つて居らるゝのである。

電話風聞記

漢 江 漁 郎

○大學のS博士の電話番號は、本町のカフェ赤玉の番號とテヨツと違ふだけである。

○そのために、たひく間違が起る。

○「もし、赤玉でせう。一寸しいちゃんを呼んで下さい」、博士も心得たもので、それからチリンと來ると、「エーしいちゃんは、今晚活(活動)ですよ。おあいにく様!」、電話のぬし(獨語)「ハテネ、誰と行つたらう。フ、不都行千萬な!」

吾輩は唐變木である

が其際は普通五十錢、ネット裏五十錢増、學生券三十錢、外野券廿錢と唐變木の計數に近く決定して

それやこれやの關係から日本でも銀行合同の必要を唱導さるゝことは既に久しい以前からのことで

て是等の機關の依つて蒐集せられた資金は素より主として庶民の粒々努力の蓄積であろうが、抑もそ

あいにく「電話のゆし(獨語)」「ハテネ、誰と行つたらう。フ、不都台千萬な」

吾輩は唐變木である

(笠神さんに)

宮崎 毅

(辯 護 士)

本誌八月號に京日の笠神さんは野球入場料決定の経緯を書いて野球大衆は之れを信用せよと信用の押賣をやつてこの押賣を素直に諾かぬ奴は唐變木だと断定された、そこで僕は甘んじて唐變木になる

チームを遇する所以ではない、そこで總てを三等程度の計算で京城に十日滞在するを見て一人二百圓なら充分だろう(選手が何等の汽車で来たか唐變木は聞き洩らした)

同氏曰く野球の入場料を決定するのは先づ失費を見積り之れをフアンに分擔させるのだとある、だから其立前は國家豫算の編成と原則を同ふし斷じて營利的ではない

同氏も……不當利得をせしめてはねざめが惡いといつやる(因に云ふ僕は新聞社で野球を興業して儲けても強ち不當利得だとは思はない)

唐變木は大學チームが如何なる條件で招聘に應ずるものか知らない、唯だ信じたいのは恐らく實費で應ずるのであることこれである、若し實費以外に報酬を受くると云ふのであればそれは全く角力や俳優と同一心事に居るもので學生チームの純眞を傷めること甚しい、故に若し此の前提が誤りで實費以外に報酬を興ふると云ふのであれば唐變木の計算は皆んな違つてくる。

さて假りに實費で来てくれるものとして實費はいくら掛かるか、それも掛けやうで總てを一等の大名旅行でやれば一人に五百圓も七百圓も千圓もかゝるだろう、併しそれも質實剛健を生命とする學生

チームの數を豫定しなければならぬのだがこれは兎に角今を盛りの慶應軍が京城の一洗チームと戦ふのであるから三日間に最低一萬二千は確實と見てよかつたらう(實際は三日間で一萬五千を突破した模様だ)すると唐變木の計算によれば七千圓を一萬二千人に分擔させるのであるから一人六十錢弱となる、故に先づ普通五十錢、ネット裏一圓位に決定されるのが相當の線に思はれる(冒頭に斷るのを忘れたが之れは重に今夏の慶應軍の招聘に付いて書いて居るのだ)所

が實際は普通一圓ネット裏一圓五十錢と云ふ倍額に近い決定をして居るのは一體何んなぞろばんから出て来るのか。

慶應軍の次に立教軍を招聘した

が其際は普通五十錢、ネット裏五十錢増、學生券三十錢、外野券廿錢と唐變木の計數に近く決定して居る、唐變木の考へでは双方共に東都六大學チームの一だから物質的には別に差別待遇をしなくてもよからう、立教と慶應では人氣が違ふから入場者は慶應の方が多からう、失費が同様で入場者が多ければフアンの負擔は反對に輕くなる理合である、これが逆に行くのは何う云ふ譯か、之れを説明するのは二つ丈だ、一は慶應と立教とは招聘の値段が違つて慶應は五千圓で立教は三千圓と云ふ具合になるのか、或は新聞社が慶應では五千圓儲けるが立教では二千圓にして置くこと云ふのか、二者其一でなければならぬ。

もう一つ唐變木に分らない事は京城の各チームが出場の報酬を得るか何うかである、僕の解する所では京城の各チームは何れも一定の職業を持つてゐる人か然らざれば學生であつて野球は趣味でやつてゐるので内職に小遣取りをして居る譯ではなく従つて別に出場の報酬を得るとは思はれないが若しこれに何程かの報酬を興ふるのであれば前述の計數は又變つてくる筈だ。

私は前にも述べたが新聞社が野球や音楽會をやつて假りに儲けた所で敢て不徳だとも不都合だとも思はない、現在大資本を擁して居る新聞は兎に角その他の地方新聞は其經營が容易でない(これは京日を指すのではない一般的にだ)而も新聞は公器で我々は新聞の恩澤に浴すること多大である、新聞の經營難は我々社會人が分に應じて後援すべきで其方法として野球や音楽會をやるのは感心ししない

が已むを得ない、只唐燼木は飽く迄公明正大なスポーツ精神の一貫を望む。

以上は全く内幕を知らない門外漢の考へだ、計數を示さずして只信用の押賣で押し付けやうとする態度は公々堂々だとは云はれない唐燼木の敢て一言する所以である

峰岸清之氏主宰
拓務評論
月刊一部五十錢

◆醫界風聞記

漢江漁郎

○總督府文書課の蓬田さんといふ人……三人の子供がある。二三年前一番上の、男の子が、關節結核に罹り、方々の病院で診てもらふが、金と時日が懸るばかりで少しもよくなりません。

○最後に、人に勧められて、瀬戸先生へ行つた。「先生!、どなたに診て頂いても、少しも利目がないんです」、スルト先生曰く、「君ア醫者なんか診てもらふからだ。醫者に何が出来るもんか」蓬田さんビックリしたさうだ。

○瀬戸先生は、懇切に日光の偉力と、光浴の方法とを教へ、「儘ますにやりなさい、時々私が行つて診て上げやう」

○その通り實行した。一年、二年、いまだ三年ならずして、さしもの難症も、キレイに癒つた。

○子煩悩の蓬田さん、涙を流して、「君、瀬戸先生は……!」

松峴吟社句集

夏の月、螢、茂

安達綠童選

- 吾船に尾を引く波や夏の月 大藤 波天
- 満潮に乗る船足や夏の月 收 牛人
- 潮満ちて風なきにけり夏の月 野田 神郷
- 川に來て人浴みけり夏の月 收 牛人
- 堰止めて馬洗ふ川夏の月 大藤 波天
- 松原のキャンプ白さや夏の月 收田 奇正
- 我庭の葵の延びや夏の月 塞河江羽骨
- 夏の月鶯のからみし冠木門 同
- 抱く兒の豆提灯や飛ぶ螢 鈴木 芸窓
- 草かれし籠に螢の骸かな 收 牛人
- 消えもせず水に流るゝ螢かな 大藤 波天
- 流れ行く草に螢の光り居り 收 牛人
- 急流に深ひ飛ぶ螢早きかな 大藤 波天
- 螢飛ぶ旅舎の人となりけり 矢鍋 如是
- 山莊の客となりけり螢飛ぶ 野田 神郷
- 螢の一つ流れし軒の闇 河淵 天風
- 仰ぎ見る杉の高きに螢哉 大藤 波天
- 藪の中水ある處螢かな 大藤 波天
- 桐の葉に大き螢の一つかな 大藤 波天
- せらぎも聞えて谷の茂り哉 能登 行源
- 茂り出でゝ頂に立つ眺め哉 收 牛人
- 閉門の一樹茂りて草深し 能登 行源
- 別莊や茂りを漏るゝ山羊の聲 矢鍋 如是
- 腹水のこぼるゝ岸や草茂る 塞河江羽骨
- 茂より漏るゝ朝日を仰ぎけり 矢鍋 如是
- 布團干す寮窓見えて茂りかな 能登 行源
- 病める身を椅子にかゝりし茂りかな 矢鍋 如是

○日當れる榻見て涌る茂りかな 安達 綠童

同

んな規約をつくりました」一紙の規約書を差出さる。一、論文書上げ一圓

年、いまだ三年ならずして、さしもの難症も、キレイに癒った。
○千煩惱の蓬田さん、涙を流して、『君、瀬戸先生は……』

塗幅の照りつく通る茂りかな
同

雑筆婦人記者と私

杉原德行

(城大醫學部)

んな規約をつくりました』一紙の規約書を差出す。

一、論文書上げ 一圓

二、論文發表表 一圓

三、瓦斯を消さずに歸宅 一圓

四、名札置換へを守らざる時

十錢

五、器械、器具破損(試験管も

然り) 十錢

此處までよく研究室にある内規

だ。これからが振つて居る。謎の

在所だ。

六、婦人よりの電話 十錢

但し女房よりの電話は二分間

通話に限り免除

七、婦人の訪問、對話十分間毎

に二十錢、もし同伴して外出

する時は一時間と見做す。又

女房の訪問の時は其テーマに

應じて衆議を以て決す。

女房とテーマ。教室員偉いぞく

八、婦人よりの手紙 十錢。女

房又は母等よりの手紙と雖も

然り。又差出入の氏名なき時

は婦人よりの手紙に準ず。

我輩大學生の時、寄宿舎に居つて

この規約をつくつたものだ。そし

て出金の多からむことを密に祈つ

た事もある。

九、其他の事と雖も衆議を以て

十錢乃至一圓までの罰金を料

すべし、議決は多數決にして

絶對的とす。

右罰金を以て夏期中アイスクリ

ーム並に西瓜を満喫する事を以

て、研究室の銷夏法とす。

我輩これを讀む間、小使の特異症

狀は益々發揮せられて遂に『ウフ

、、』と爆發す。見れば『先生

猪食つた酬めですよ』といふ面構

えである。我輩『これでは僕にも

大分掛けがありそうだね』

A君はすかさず『先生は婦人訪

或日小使が研究室に居る我輩に

向つて、『先生お客さんで御座い

ます。へへへ』といふ。

小使の物云ひ中、語尾のへへへ

エーといふ薄笑ひは頗る我輩の神

經をいらだしめる。我慢して小

言もくらはさず、研究室から自室

へ歸る。

室には雑筆婦人記者○女史が

鎮座しまして御座る。此頃の我

輩の苦手は二つ。一つは麻雀に夜

更して歸宅の時、隣家のブルドッ

グ君が『ウォー』と一躍浴せかけ

る事。一つは今直面して居る事。

『先生どうぞ來月號には是非とも

御原稿を』と。

談論風發、議論に花を咲かせた

り、そこはかとなき浮世話に一

口乗り出して大學理髮部の床屋の

御大から御常連の一人に加へらる

ゝ御光榮を擔ふの我輩。これらの

事は男の仲間であつて、由來女か

らの攻撃にはたちゝの男。○

女史からの御催促には意氣頓に銷

沈。永樂町人の戦法の爲大方の雜

筆寄稿者諸君もタチゝならん。

惟へば永樂町人誠に人が悪い。

寸をのがれ尺を延ばすの戦法を

もつて心ならずもあつての紺屋

をきめ込み、先づ難物を撃退して

ホット一息。

憂しとも思はぬ書く事がごうも

御婦人からヤンワリと強制せらる

ゝといやけがさすかと我ながら不

思議。アマンジャクなる事をつく

つく自覺する。

さて數日を経て又々小使が『先

生御客様で御座います。へへへ

』と例の語尾に薄笑ひの余韻を

殘し、口を半開し烟を兩方共心持

ち下にひき、やゝ上眼をつかつて

申しやる。

研究室から自室に歸れば例の如

く雑筆記者○女史が鎮座しま

して御座る。

小使が薄笑ひの語尾を引く事三

度目に及んだ時には我輩は苦手の

御入來を豫感する事が出來た。事

程左様に小使の薄笑ひのへへへ

一は特異症狀である。特異症狀の

發因を患者に尋ねる醫者はない。

然し醫者はその發因を知らねばな

らぬ。醫を研究する我輩。其特異

症狀を小使に尋ね、聞き直つて大

目玉を喰はすのは誠に大人氣なき

次第。とはいふものゝ其因は氣懸

りになる。

或日の事偶然に其謎が解けた。

小使が大聲して呼び掛ける。『K

先生、電話、女の方からですよ』

と。同室の研究員一同『罰金十錢

!』といつて之に和す。

さてはこの頃教室員が造るアイ

スクリームの代金の出處はこれだ

な。我輩は金の出處も知らずに毎

日ノホホンと御馳走に預つて居つ

たつた汗滴者だつたのか、そこで

我輩傍らの研究員に向つて『君、

女から電話が掛かると罰金かね』

『バレチャツタ……、實は先生こ

問五回、延べ時間締めて一時間と四十八分。これこの通り小使がプロトコールをとつて居ります。何でもプロトコールをとつて置き給へと營々研習員に述べるのでその實行をしたのだらうだ。

罰金二圓二十錢也。其日はアイスクリームと西瓜。

A 『先生あの御婦人は愛し好くイリームですかね』

我輩「思慮な、そのスイカを何と心得る、これでも内には、可愛い女房が……」いひながら西瓜をガブリ。

K 『緊急動議。今の先生の甘い言葉を』

A 『罰金二圓也』

K 『本日罰金二圓二十錢を支拂ひ、情狀酌量すべき態あり、罰金二十五錢の動議を出す』

一同「異議なし」

實驗動物の蛙も兎も雄ばかりの夏の研究室に嬌媚な浴衣姿の○○○女史の御訪問は眞鶴が掃溜に下りた観である。そして無味乾燥の室にたはいな花が咲く。我輩は財布の底をたたく。

◇人我閑題目

漢江漁郎

○うどん屋の松月のあるじ、大の野球狂で、中にも優勝軍のことゝ來たら、マルデ血涙で奔走します。

○細君も、呆れ果て、『ぬしにも愛憎がつきんすわいの』

○その松月君、慶應後援團をつくらうと思ひ、先づ渡邊博士を訪ふて、一流の猛辯をまくし立てた。スルト博士は、『のら松月君

青き稲田
角田不案

花のなかの隠者とや言はむ水草の稲田にひそみ
輪咲けり
穂を孕む水田の稲の出来のよき株はふとりて掴み
るぬまでなり
出来のよき田ごとの稲は株ごとに穂をし孕めりそ
の莖ごと
莖ふとり穂をし孕みて力つよくそだちし稲のその
健やかさ
すこやかに穂をそ孕める稲の田のくろをゆきつゝ
稲の香に酔ふ
老らくの父住み給ふ故郷のにはひかくかに稲の香
をかぐ
一人立つ青き稲田のなかにして父の姿の眼にはさ
やかに(五、八、七)

我々ファンが斯うして樂めるのは京城の網ての球團があるためだ。スルト慶照が可愛くて、龍中が憎いといふ法があるまい。どうだネ

コ、は一つ、總ての球團の綜合後援團をつくるといふ事にしたら』

○松月君理の當然に、『ハッ……それも「ト理屈」を頭を掻いて引き下つたが、よく考へると、慶照が可愛い。何が何んでも可愛ゆくてたまらない。門外一步……唸つて曰く、『さて』

學者は、廻り廻いもんやデ』
X X
○山口大兵衛氏は、今年の夏の盛りを、東京で暮してしまつた。

○有嶋(武郎)家の遺産整理のためである。氏は、有嶋家とは、縁戚に當り、殊に先々代とは、無二の親友であつたさうだ。

○山口氏は、そのお子さん達にとつては、最も理解ある父であり、また最も金放れよき後援者でもあるが、キビしいところに實に思ひ切つたキビしさで、お子さん達が職を求め、縁につくことには、何一ツ援助をしない。『自分のことは、自分でやりなさい。親をたよるなどは、男子の道でない』、アレほど人の子のために奔走する氏が、横を向いて、空囃いてござるさうな。

鏡台

最中でありました。十分二十分々念の入つたものです、ははア汽車の混雑は下二回(二、三、四)の

鏡 台

横山巷頭子

(南山吟社)

○その松月君、慶應後援團をつくらうと思ひ、先づ渡邊晋博士を訪ふて、「一流の猛辯でまくし立てた。スルト博士は、『のら松月君

學者は、廻り廻いもんやデ」
× ×
○山口太兵衛氏は、今年の夏の盛りを、東京で暮してしまつた。

るなどは、男子の道でない」、アッほど人の子のために奔走する比が、横を向いて、空囀いてござるさうな。

カレンダーに記されてある休日
は、其れが日曜であると祭日である
とにか、はらず、半ヶ月も以前
から、何かの豫定に繰込れてゐる
が爲に、むしろ會社の机に向つて
ゐるより以上に忙しい目を見るこ
とが常であります。

八月××日の前日になつて豫期
しない休日が與へられました。折
柄連日の炎暑に苦しめられた私は
此のプログラムにない一日を如何
に有効に過ごさうかと思ひ悩ま
ました。元山へ日歸りの海水浴を
試みやりかと考へましたが、夜行で
行つて夜行で歸るとすると翌日の
疲労が思ひやられるので、これは
やめました。

温陽の温泉もまだ知りませんが
一日では物足らなく思はれたので
これも中止。三防も駄目。釋王寺
も水原も最近行つて来たばかりで
ある。いつそ金剛電鐵の御厄介に
なつて、天下の名勝の玄關口を覗
いて來やうかと思ひついた時に困
つた事が起りました。

今年七歳になる坊主が「お父さ
ん僕も一緒に連れてつて」と水筒
とリュックサックを持出し、頑と
して主張を曲げないのであります
かうなると親仁の權威も木ッ葉ッ
ぢんです、何も彼も取消し、結局
坊主本位に月並な月尾島行きのお
供を仰せ付かつたのであります。

汽車に揺られる事一時間、あの
突堤をあぶなつかしい自動車に乗

せられて、お伽の國のお城の様な
建物の中へ運び込まれました。元
氣なのは坊主ひとりです、海が見
える、船がある。汽船が煙りを吐
いてゐるのも、何もかも嬉しいと
見えます。

一時間いくらかの貸間は大分
に高價なので時節柄と云ふ譯けで
もないが、濱口さんの主旨を尊重
して、一人前金三十錢也の大入場
である處の廣間の一卓へ、小さく
なつて陣取りました。

仲々大騒ぎです、卓と云ふ卓は
三人、五人の家族連れに圍れて、
足の踏み場もない盛況を見せて居
ります。のんびりと寝轉るなど云
ふせいたくは以ての外であります
お堀り持參、汽車辨持參で盛ん
に召上る組。子供が泣く、赤兒が
わめく。仲々賑やかなものです。

なんのことはない、何かの避難民
雑居と云ふ光景であります。
とても雑筆讀者諸賢には想像が
つく次第のものではありません、
氣の小さい私は戻せた身体を一層
縮めて御近所の人様の邪魔になら
ぬ様、一所懸命に氣苦勞をして居
りました。

處が此の人込みの一個に素晴ら
しいものを發見いたしました、御
亭主と四五歳の女兒を同伴した洋
装の異様です、年は三十を二ツ三
ツ出てゐる肉付きの好い体格の所
有者で、私達が入場した時は備付
けの鏡台を引寄せお化粧の眞ッ

最中でありました。十分二十分仲
々念の入つたものです、ははア汽
車の混雑で汗に崩れたのを直すの
だなど多少好感を持つて眺めて居
りました。
其のお化粧が出来上つて、晝飯
を召上つて暫くすると、お堀ひで
潮湯かプールへ出かけたのです。
そして二十三分の後、元の場所へ
歸るが早い、又鏡台と差向ひに
なること三十余分。大層奇麗に仕
上つたと思つてゐると、まだお氣
に召さないと見へて今度はコンバ
クトを出して鼻の頭を叩いてゐる
のです。

それもよろしい、それから暫時
横になつたかと思ふと又鏡台では
ありませんか。それがこの混雑
の中で悠々と出來上るんだから實
際寒いものです。

一体女と云ふものは可成りツウ
ツウしいものと思つて居ります
が月尾島へ來て一日御化粧で暮す
なぞは、鳥渡類があるまいと思ひ
まして、餘計な憎くまれ口ながら
一頁埋めさせて頂きました。

◆新小笠原流

三木一彦

○鐵道局の林原憲貞氏、有名な
運動家だが、そのプールで泳いで
ゐるのを見ると、二つの脚を眞ッ
直にそろえて、丁度上半身と一本
の棒になつて、行進してゐる。

○圖書館(鐵道)の林といふ人
が、珍らしさうに、それを眺めて
「何流だネ、珍らしい」、答へて
曰く、「ウン、これか。これが新
發明の水中小笠原流一。判つた
かね」

野球の話

新田唯一

(大阪朝日支局)

野球のファンとしての私も随分と古いものである、約三十年になるのだから……未だ一般に野球の普及してゐない頃から試合といふ試合は勿論のこと、練習などでも探し歩いて見物するといふ熱狂振りであつた、ではあるが一向に野球技の専門的に亘ることは判つてゐない、それは單なるファンであるに過ぎないからだ、一球一打に胸の高鳴りを禁じ得ない純真な小兒の心持ちになり得る野球見物がどれだけ私の一生を明るく愉快にしたことであらう、野球技は私にとつてはひとり興味の問題ではないのである、凡ゆる試合を通じて、そこに幾多の教訓を體得し來つたのである、今後とても同様である筈だ。

× × ×
私の社で主催してゐる全國中等野球大會の朝鮮豫選についても寺内總督時代は嚴禁されてゐたのを、大正十年に私が時の學務局長柴田氏(現大阪府知事)に數次交渉の結果として獎勵はせぬが出場を默認するといふ言質を得て漸く開始されることになつたのである、だから本大會は十六回であるのに朝鮮豫選は十回を算してゐるに過ぎない、それでも三校か四校が集つて貧弱な豫選大會を行つてゐた朝鮮が今年の如きは實に二十有六校も參加して烈日の下に正々堂々と雄々しくも戦つて呉れたことは私の限りなき喜悅である。

× × ×
豫選大會の第四日目に京城商業と新義州商業とが試合をしてゐる際に海江田侍従が來場されたので私は『この大會は内鮮學生が眞の運動精神を發揮して意氣と熱とで終始する點が特色であります、技量については氣候の關係もあり内地の先進チームに比して多少の遜色はあるかも知れませぬが遠からずしてレベルに達するものと確信して居ります』と申上げて置いたのである、海江田侍従が如何なるお考へで來場されたかは想像の限りではないが極めて良い印象を残されたであらうことは私の信じて疑はない所である。

都鳥

鳥割水
烹焚

旭町一丁目
電本三三六六

◆快漢竹越君

北漢山人

○城大總長の自動車の運轉手を竹越君といふ。

○當世稀に見る快男子であります。

○大學には教授は教授、事務の人は事務の人で、おの／＼野球團をつくり、時々對抗試合をやります。竹越君これをチラツと横目で眺め、『ウ、面白い!、こつちも一ツ』といふワケで、即日機を傭人——小使、門番、掃除夫——の徒に飛ばし、忽ち一箇の傭人野球團をつくつた。『へへッ、どんなもんだい!』

○そして他のチームに試合を申込み。が悲しいことに、こつちは生年コゝに六十歳の茶沸かし爺さんもあれば、マダ口の端の乳ツ貝い給仕君も居る。どうしても選手の呼吸が合はぬ。従つて、戦へば大抵敗れる。

○快男子竹越君、味方の悲況を見れば、もうたまらぬ。腕を扼して憤然。『どうだい……一萬二千圓の自動車! (コゝが竹越君得意の檀場) 乗つたことあるめい。……へへッ、田舎者め!』

へで來場されたかは想像の限りではないが極めて良い印象を残されたであらうことは私の信じて疑はない所である。

で憤然。『どうだい……一萬二千圓の自動車！(コ)が竹越君得意の種場)乗ったことあるめい。……(ハッ、田舎者め』

慢性病治療の第一義

占部 寛海

(占部 醫院)

殊に慢性病に於ては、外因よりも内因の方が、一層大きな影響を與へて居るものでありまして、たとひその病氣が一局所に存在してゐるにしても、その實その人全體の病氣と考へた方が至當であると思ふのであります。

急性病に就ては、現在一般に行はれて居る醫療によつて、割合悪まれて居ますが、慢性病の治療と云ふ事は、比較的等閑に附せられて居るやうに思われます。醫者にかゝつても、藥を飲んで、中々効顯の見えぬ、昔からよく云ふ所謂持病と云ふ奴は、中々の難物と見えて、之に惱んで居る人は随分澤山なもので、輕症者を加へると或は世人の大半を占めて居るかも知れないのであります。して見ればこの慢性病の治療と云ふ事は、中々の重大問題であります。

さて慢性病とは一體如何なるものかと申しますと、漠然としてならば、誰でも判つて居るやうで、さて判然と定義を下せと云はれると、一寸明言に困るだらうと思はれます。

一般に慢性病とは、急性病に對して名付けられたもので、長い間徐々の経過を取る病と思はれてゐますが、療法の如何によつては急に治ることがあり、又何かの動機で急性病に變化することがあります。尙慢性病を急性病の延長と考へる人もありますが、而し始めから慢性の経過を取るものもあるものであります。

で、私はこの慢性病を、病氣の力と、治療の力とが、伯仲の間にあつて、その勝負のつかないものであると考へて居るのであります。抑々病氣なるものは一體どうし

て起るかと思つて、一般には黴菌とか、寒暑風雨とか、食物の不良とか、凡て外より作用する力その凡てかのやうに、考へられて居るやうであります。若し左様だとすれば、同じ環境に於かれた人は、皆一様に同じ病氣に罹らねばなりません。然るに事實は決して左様ではありません。それは何故かと申しますと、一體病氣と云ふものは、外から加はる外因だけ出れるものでなくして、之を受け入れる内因があつて、この二つが合致して始めて成立するものであるからであります。若し如何なる病原が外部から歸つて参りましたも、之を受け入れる自己内面の弱みがなかつたならば、決して病氣になるものではありません。

不幸にしてこの娯遊世界に生きてゐる吾々は、全然外因から遠ざかると云ふことは、絶対不可能な事で、彼の所謂病原菌などは、人間の住まふところ行くところとして、ウヨ／＼してゐるのでありますから、絶対に之を避けやうと思へば、先づ今生をおさらばして、彼の世へでも行くより外に仕方がないのであります。

して見れば吾々はどうしても先づ第一に、内因をつくらぬことに工夫を凝らして、如何なる外因が襲つて來ても、之を受け入れないと云ふことより外に眞に健康を贏ち得る道はないのであります。

昔から持病とはよく云つたもので、自分の持前の病であります。換言すれば、外から來た病でなくして、自分が産み出した病と云つても差支へないのであります。この事がよく理解されてゐない爲に一般の慢性病者は、醫師又は藥劑の力にのみ頼つて病氣を除いて貰はうと思ひ、自己自身の本然の治病力が出さうともしないのであります。従つてそれが不結果に終ることとは當然で、結局は悲觀、煩悶、呪咀と云ふ醜い姿に陥るのが必然であります。自分が持つて出た病でありますから、先づ何より自分自身が第一線に立つて戦ふといふのが當然であるのであります。

慢性病者は凡てデッチあげた一種の囚はれた主觀を持つて居るのであります。従つて慢性病を治すには、その囚はれた主觀を轉換して、その性格を改造しなければ、病は治らないのであります。慢性病者は多く自分の身體から病だけを驅逐しやうと試みますが、それが到底駄目な事でもあります。人間そのものを改造するより他に、慢性病の治療法はないのであります。従つて症狀だけを目的に養生してゐる人は、一日も早く、その誤つた觀念を根本から覆へさなければなりません。

一旦慢性病に罹つたが最後、誤つた主觀はいよくその勢を溜うして、益々病氣を重らせ、遂には病を恐怖し、恐怖することを更に

恐怖すると云つた場合に、兎角慢性病者は二重三重の苦しみに悶えて、一刻も早く此の苦痛を脱れたいとあせり、無闇に種々な藥物や療法に迷うて、愈々益々深みに陥つて終には生きることにさへ、苦痛を感じて來るのであります。

又、慢性病者は、その殆ど凡てが神經衰弱的傾向を帯びて居て、多くは記憶力の減退や判断力の鈍麻を訴へて居りますが、それにも不關書物を読んでも、他人の話を聞いてもそれに自分勝手な判断を下して、自ら好んで苦しみを増すやうに、努力してゐるかのやうに見受けられるのであります。種々の療養書などを漁つては、自己の病に關することのみを部分的に知り、而かも自己の病に就いては醫者そこ退けの自惚れを持つて、彼方此方の醫者の門を叩いては受診とは名のみで、事實は却つて彼の醫者はどうの、此の醫者はかうのと、醫者の方を診察して廻つてゐるかのやうな有様で、事此處に到つては最早實に濟度し難い悲惨なものであります。

何等基礎的知識のない薄薄偏狹な而も誤つた主観によつて判断された自分免許の醫學ほど、恐ろしいものはないのであります。種々な病氣の症候を讀むと、どれもこれも皆それを持つてゐるやうに感じ、所謂病の間屋となつて、遂には自分の持つてゐる病氣だけでは物足らないのか、何でも彼でも病氣は皆んな引受けたいと思ふかのやうな態度を取るのであります。その證據に、慢性病者に對してあなたは何もあるだらう、かうもあるだらうと、種々な症候を摘發してやると、實に我意を得たりとして喜ぶのであります。之に反

して、患者の訴へる苦痛を無碍に否定でもしやうものなり、それこそこの醫者は藪だと、全く信頼を失くするのであります。

實際慢性病者の苦惱とするところは、多くは患者の主観が拵へたもので、言葉を變へて云ふならば多くの慢性病者は、自らの造つた偶像に惱まされてゐるのであります。言はゞ空に惱まされてゐるのであります。而もその空なるものを、具體的方法で追ひ出さうとするところに、現代の慢性病治療の缺陷が存在するのであります。觀念で生じた病は觀念を以て治せばよろしいのであります。だから一旦主観が改造された場合には、あらゆる症候は旭に向ふ霜の様にわけもなく解けてしまふのであります。醫藥によつて難治と稱せられてゐる慢性病もこの點に於て最も

治し易い性質を持つて居るのであります。

尤も一般の慢性病者が、そこまで徹底することは中々の難事でありますから、醫者なりその他の治療家がこの點に注意して、患者の主観の改造に適當な導きを致しましたならば、此上ない好都合であります。あまりに物質的に囚はれてゐる現代の醫者なり病人自身が何處迄も具體的方法で追ひ出さうとするから、慢性病を扱ひ兼ねるのであります。

彼の醫者にも藥にも厭きくした慢性病者が、民間療法家や神佛の信心によつて治ると云ふ例が、世間に往々見受けられるのは、全く病人自身が懺悔更生によつて囚はれた主観を一變するによるのであります(以下次號)

◆京城驛閑話

三木一彦

○京城驛の人混みの中で、橋本(豊)氏と廣江(澤)氏が、顔合せました。

○スト廣江氏は、『橋本さんよいものを御紹介します』とて、つれて來たのは、ヌバラしい稀代の麗人!。流石の橋本氏も、まぶしく、三歩下つたといひます。

○廣江氏意氣昂然、『小原小春女史であります』

○橋本氏一矢酬めずんばあるべからずと、『私も一人、紹介したいものがあります』、向ふをむいて、『一寸手招きすると、芳絶二十一二歳、さながら白百合のやうな佳人が來て、しとやかに廣江氏に

一體。あまりの美人なので、大和町もボーッととなつた。足元がフラフラした。

○橋本氏得意満面『この方が…アノ道中道つれの、例の小林ふみ子嬢であります』

○あとで、この話を聞いて、つまりどつちが凱歌を奏したんですと問ふと、互に指で相手をさして『アノ…ウフフ』



オルガ姫の時計

自分は千九百十三年の八月、モスコイ醫科大學婦人科教授ドクトル、オットーとよ白林大君(公)に

もあるだらうと、種々な症候を摘發してやると、實に我意を得たりとして喜ぶのであります。之に反

て、一寸手招きすると、芳紀(十二歳)、さながら白百合のやうな佳人が来て、しとやかに廣江氏に



オルガ姫の時計

工藤 武城

(京城婦人病院)

饅頭大の厚形、ニッケル側のウォルサム製の、とても武張つた頑丈な懐中時計の持主たる小生の、書齋の机側に置いてあるのは、優形の、精巧なる佛蘭西美術の粹を蒐めた、きやしやな貴婦人向の七寶置時計。方僅かに一寸、高さも一寸五分に満たぬ。粗野な主人公のお人柄と餘りにかけ離れた對照なので、誰れしも一見して不思議そりな表情をする。無遠慮なものになると、滯歐中の曰く附きの紀念品ですか、お熱いことなどで、氣味の悪い笑ひかたをするのすらある。

何時までも世間に氣をもませて置くのが能くもあるまい。

恰かも今年の七月十七日は此時計の故持主の悲しい第十三回忌に當る。聊か其由来を記して、悲慘なりし其末路を弔ふこととする。

○ 京城長沙洞妙心禪寺別院の開山現住から先々代の住職、F禪師が内地に移錫せらるゝに際し、鮮人寺男の小仲、Kと云ふのが、學校の出来がいゝと云ふので、高等普通學校を卒業したのを預つた。當人が希望するに任せ京城醫專に受験せしめたが、仕合せと入學を許され、卒業まで自分の病院に置いて面倒を見てやつた。

○ 婦人科醫者も案外つまらぬと見

くびつたのか、卒業すると其まふいと何處へか飛出して爾來音信不通。従來數人の鮮人學生の世話をして、何時も喰ふ手であるから別に氣にもせず忘れて居たが、大正八年の十二月にひよつこりやつて來た。

○ 無口なKがほつり、く詰るところを綴合してみると、彼は卒業と共に露西亞に入り、軍醫となり、醫者不足の國柄とて、間もなく大尉相當官に任ぜられた。

千九百十七年の秋、革命と共にレーニン統率の共和政體となり、廢帝ニコラスは、ツアルスコエ、ゼロの宮殿に送られ、次で西シベリヤのトボスクに遷された。

○ 此時の従者、護衛、總數三十八人の中に彼も加へられた。ザ一の悲運は、猶ほ執念深くもつき纏ふ。

○ 此トボルスから西南、百五十哩、ウラル山脈のなだらかな傾斜に沿ふた美しい靜かな小都會、エカテリンブルグに廢帝一門は送らるゝこととなつた。

○ ニコラス廢帝の一族は、廢帝、皇妃、皇女オルガ姫(二十四歳)、タチアナ姫(二十歳)、マリー姫(十八歳)、アナスタセア姫(十六歳)、以上妙齡の四皇女と、たつた一人の皇子ザレビツチ(十三歳)の七人であつた。

○ 自分は千九百十三年の八月、モスコイ醫科大學婦人科教授ドクトル、オットーとは伯林大學に於て机を並べた同窓である。舊誼を暖むべく同地滞在中、オルガ姫(當時二十歳)はクレムリン院祭式參列の爲めにモスコイ宮殿に居られたので、兩三度車上の芳姿を拜するの榮を得たが、世にはこんな崇高佳麗な存在があるものかと、つくづく感に堪へたものであつた。

○ ロマンフ一家の境遇が、急直轉下の變化と、不衛生極まる生活の爲めに、病氣は絶へず其一門を訪つた。

○ 然かも廢皇太子ザレビツチは、如何なる神の惡戯か、不幸にも血友病の遺傳を受けて、起居も自由ならざる廢人である。

○ 従者、護衛の人數の中、醫師としては、唯だ侍醫のドクトル、ボツキンと、彼れKとの二人に過ぎない。

○ 惡鬼、羅刹の如き赤兵の監視嚴なる中に於ても、此兩醫師は、比較的自由に廢帝一族と接近する機會が多かつた。元來が語學の才にたけたKは、其頃は自由自在に露語をあやつることが出來た。

○ 從兄にあたる英吉利皇帝、露帝一門の此不幸に對して全然風馬牛であるし、皇妃の里方の獨逸からも知らぬ顔の半兵衛をする。

○ 賢いオルガ姫は、彌々其最後の運命が迫つたことを豫想されたものか、千九百十八年(大正八年)七月の始めつたかの或る日、『ドクトル、K、長らく御世話になりました。さすらいの旅にも好きだから持つて廻つた此時

計、何れは名もなき無頼のシベ
リヤ赤兵のさかで、になるに極ま
つてます。記念にそちにあげま
しよら』

○ 果して旬日を過ぎた大正八年七
月十七日午前一時、凶漢コロブス
キーの魔手により、他の十一人の
一門従者と共に、オルガ姫は病身
のザレビッチ皇太子を抱いたまゝ、
世が世なりせば露西亜大帝國ロマ
ノフ家の第一皇女と生れし天成の
佳人、雖ては何れかの大國の皇妃
となるべく搖籃に誦はれし身の、
エカテリンブルグ陋屋の地下室に
て、敢へなき最後を遂げられた。

○ 『先生、多年御厄介になつて、
何一つ御恩返しも出来ませんで
した。右の次第で貰つた時計で
す。露西亜帝政最後の記念に相
違ありません。先生に上げます
舊恩師の寫眞たとて、退屈凌ぎ
に姫に見せましたらば、貸して
呉れとて其儘です。どうなりま
した事やら、誠に濟みません』

○ 餘計なことまで附け加へて、否
むのを無理に置いて、其まゝ、飄然
として再び去つて仕舞つた。
其時計がこれである。
○ 爾來又々音信が無かつたが、郷
里の故老から強いられて、平安北
道の或る片田舎に開業したと聞い
て居たが、かねての美酒の祟りか
一昨昭和三年の八月に、まだ若い
身の可愛想に此れも他界の人とな
つた。

○ 不遇高貴の佳人オルガ姫と、愛
弟子風雲兒Kとの二重の記念とな
つた此置時計、能獲の野武士の自

分とは、甚だ不釣合の存在たるこ
とは眞々承知の上ながらも、今尚
ほ机側に置いて居る。

◆博士と指輪

漢 江 漁 郎

○ 城大の第一世總長服部宇之吉
博士は、溫雅重厚な立派な學者で
した。

○ 珍らしいことには、氏の左の
クスリ指には、いつでも可憐な、
あでやかな、一箇の指輪が、キラ
〜と人の眼を射てみました。

○ 老學究と、モダン好みの指輪
……一才不思議なとり合せで、
それけがありました。

○ だが、博士も青春の思ひ出は
あるんです。實をいふと、この指
輪は、その夫人と、その昔約婚し
た當時の、忘れられぬ記念品なの
です。

○ 品物は、いつまでも若々しく

人蔘劑では
一も二もなく

總督府
專賣局

精製の蔘精
に限りませ

發賣元

貴生堂藥品店

京城本町二丁目
（電本一三八番）
振替七六一番

さうして人は、いつしか白頭にな
つてしまひます。博士は、折々そ
れをつまぐつては、感慨無量の面
地でした。

○ ……と、また、不幸なことに
博士夫人は、この年ごろひどいヒ
ステリーで、その發作時になると
ハタキや帯をとつて、御主人に打
つて驅られます。猛虎無人の野を
行く勢ひ……。博士は、あつちの
部屋、こつちのドアの蔭と、危難
を避け給ふ。決して荒い言葉一つ
おかけにはなりません。で、奥様
の疲れ果て、ぐつたりとなり、漸
く正氣になられた時、そーッと手
を添へて、お横にやすませて上げ
られ……。そこで、『いつ見ても、
この指輪は……』と、例の一品を
心から賞嘆せられます。と、また
奥様も今までの事は夢。全くそれ
こそケロリとせられて、『アノ時
は……ホ、……おかしかつたわね
ー……ホ、……極々の上天氣。
○ 博士の指輪の効用……どうで
す、お判りになりましたか。

無題

金田 靈堂

(南山本願寺)

柔道を稽古する時は人を倒すことの外に倒される時の稽古もやる人間一生涯の仕事も同様勝つ事にのみ一生懸命にならず、敗ける時の稽古をする必要はないか。然るに世の實相は勝つことのみならず、敗ける事によつて、敗ける事に意を用ゆる者は殆んどない。財産の上からも、地位の上からも、智慧の上からも、又は静の上にしても、たとへんとして、勝つてやらうといふことに全力を注いでゐる相が所謂急走急作して頭燃を拂ふが如きではないか。

然るに驕つて思ふに、時に敗けると云ふこと、眞に敗けることは確かに大切な事ではないか。普通我々は敗けた相や形を顧すことは稀ではない。例へば卑下自慢といふ場合、即ち卑下することに由つて自慢以上の自慢をやる場合が少くない。こいつは表面に敗けた相を上をほひ内面で勝ち誇るといふ單なる自慢以上に憎むべき心事である。わしが悪るかつたと云ふては、内心に却て何養と驕りたかぶつてゐる。こゝにいふことを我々はよくやる。

眞宗の開祖親鸞は自ら愚充と名乗つたが、これは凡てに本統に敗けた者の持ち得る宗教的自覺である。蓋し宗教上の事實は本統に敗けることの外に本統に勝つことではないであらう。この意味に於て勝

ち誇つた日運よりは、敗けたといふ親鸞の方がどれだけ本統の意味に於て勝つて居るか知れない。

世渡りの秘訣にしても困ると思ふが柔よく剛を制すといふはよい言葉だ。

それから常識には勝つことはむづかしいからうが、精神上の事實に於ては敗けることの方が一層むづかしいはなからうか。俺は偉い、といふ思ひよりは、偉くないのだと思ふことの方が幾十倍むづかしいか知れない、對他的には偉いと思ふ人間でも、最深最奥の内面の事實は誰れでも偉くないのだ。山中の賊よりは心中の賊を平げることに根を切らずではないか。この意味に於て修養とは偉い人になることではなくして、偉くないといふ自覺を持たせることである。

○ 自分は世の中のことが餘りよくわかつてゐる方の仲間の人間ではない、が世間で今の教育をば智識偏重だといふと成程そうでないかと素人にもそう思はるゝ節がある。勿論學問の目的が物識を作るにあるのではないと云ふことはわかり切つてゐる。然し大學や専門學校の制度のうちには單に物識にしかなれないのではないかと思はるゝやうに出来てゐる處もある。

その結果かどうか、も分らないが、學校出をばあいつは威張つてゐるとか、生意氣だとか、と學校

不遇高貴の佳人オルガ姫と、愛弟子風雲児との二重の記念となつた此置時計、能麗の野武士の自

た當時の、忘れられぬ記念品なのです。
○品物は、いつまでも若々しく

！……ホ、極々の上天氣。
○博士の指輪の効用……どうです、お判りになりましたか。

出でない者がよく云ふのを聞く。

そう云ふ方の心持を全然肯定はせぬが、云はる方も反省を要する點があるのではないか。殊に女で學問のあるらしい具をさする奴は誰が眺めても好感は持てぬ。

それは云ふても自分は無學を獎勵する意志はない。然し國家や公人が大學や専門學校をたてゝゐるのはまさか威張る人間や生意氣な人間の獎勵のためではあるまい。寧ろ學問自體の目的は驕慢や生意氣を矯めるにあるのではないか、反對の結果を收穫し乍らそれに氣附かないといふことは學問のために如何にも情ないことでないか。蓋し謙讓は人生の白蓮華である所謂識ることは識らぬに勝る幾倍であらうが、驕慢だとか、生意氣だとか感じさせて迄持たねばならない程いゝものではなからう。

學問があつて而も人間として偉い人もあるには違いないが、寧ろ學問などなくて偉い人の方が多いのではないか。

◆筆のしづく

三木 一彦

○松村殖産局長夫人に、お歌を頂くことになつてゐたが、御病中と聞いて、しばらく遠慮をしてゐた。

○十二日(八月)の夕方、もうおよろしいかも知れぬと思つて、官舎をお訪ねすると、氣輕く玄関に出て來られ、『原稿……來方がおそいですネ……やんわりと一本、お面を頂いた。』

○さうです、夫人の方が『締切十日』を、よく知つて居られるのです。汗顔々々

京仁の酒を啣く

[110]

三木 清一 田村凜太郎
 平石 鎌吉 鎌田 直助
 山田 貫三 三村 誠一
 佐田 吉衛 石川銀太郎
 上野 吾一 (その他数名)

山田君金剛鶴はどうです。

山田 さうでござんすね、金剛鶴も非常によい酒と思ひますが、後口がどうかと思ふ。その位しか感じませんでした。それ以外にはいゝ酒と思ひました。

鎌田 いゝです。香が少し鋭いと云ふ氣味があるらしいが、大體いいと思ひます。

佐田 これも上のはうですな。併し慾を云へば多少苦味、澁味があると思ひますね。これは販賣容器の關係と思ひますが……。

上野 私も良い酒と思ひましたが強ひて云へば佐田氏の云はれるやうに苦味、澁味があるやうに思ひました。

平石 私も良い酒と思ひます。矢張上位に行くのではないかと思ひます。

三木 七點の中ですよ。

上野 さうです。尤も木の香が少しあり過ぎはしないかと思ひました。

佐田 さう思ふね。

田村 私は少し苦味が多過ぎると思ふ……。

三村 私は無論甲の部類に屬するやうに啣いてをります。

石川 香は中に、味のほうは口ざわりがよく無論上位のやうに感じました。

三木 『誠鶴』はどうですか。

山田 誠鶴は味は上々ですが木香の關係が少し工合が悪い様に考ました。他には別に考へません。其點を頭において啣きました。鎌田 三巴自慢に拮抗するものと思ひます。

佐田 今日出て居る酒は中々上等ですな。やつぱり『誠』に美味い誠鶴と云ふ宣傳をやつてをる通りに美味い酒で、飲み手から

三木 今度は『大錦』に行きませう。

山田 私は常に大錦を飲んで居ります。關係上慣れてをる關係があるかも知れませんが、味も香も一番よくはないかと思ひました。

併し飛びぬけて一番ではありませんが。一番の部類が二つ三つあります。上酒に屬するもので癖のない、いゝ酒と感ぜました。

三木 石川君どうですか。

石川 香味がよくて良い酒だと感ぜました。

三村 良い酒の様に感じました。

田村 私は三巴自慢と同等の甲のほうに入れてをるんですが、唯三巴自慢に比較して何と云ひませうか。淡いと云ふ點です。それは好く人もありませうし、好かない人もありませうが、淡過ぎると云ふ點に於て三巴自慢の次におかうと考へたんです。

三木 淡白なといふんですか。

田村 さうです。淡白なのが、いか悪いか人に依つて違ひませうけれど……。

平石 味は非常にいゝと思ひます。

が香がもう少し強かつたらと思

ひます。

三木 味はいゝと云ふんですか。順位ほどの程度ですか。

平石 乙です。

上野 自分を標準として申しあげますれば、味がシヤンとして居ると思ひます。少し苦味と云ひますか。さういふものがあるのではないかと思ひました。併し酒として悪いものぢやない様ですな。

佐田 山田さん、これは桶から取りましたか。桶から取りましたか。大錦は知りません。聞いて來なかつたです。こんな事なら立會つて封緘でもして來たらよかつたと思ひました(笑聲)

佐田 これは甲の部でございませう。軽い酒でせう。田村さんの云ふやうな淡白なと云ふのが本當だらうと思ふです。美味いけれども軽い。燗して飲み上りする酒と思ひます。強ひて飲點を云へばいくらか締る、これは樽から來たのではないかと思ひます。

樽から來るのであれば、燗すれば差支へないが、其の點がどうかと思ひます。

鎌田 味も香も先づ普通です。

三木 次は『金剛鶴』にませう

平石 味は非常にいゝと思ひますが香がもう少し強かつたらと思

鎌田 味も香も先づ普通です。三木 次は『金剛鶴』にしませう

誠鶴」と云ふ宣傳をやつてをる通りに美味い酒で、飲み手から

云へば、少し飲み飽きが來はしないかとも思ひますが、少し飲む人にはまことに以て上々と思ひます。

上野 私は此處にある酒では一番口ざわりがいゝやうに思ひましたが、今日は何か頭がはつきりしないので喇き方を誤つて居るかも知れません。

平石 この中では一番口當りがよく一番上位に屬するものと思ふ田村 之も苦味がありますね。金剛鶴とよく似た酒だと思ひますさう云ふ譯で同じ品位に入れて居ります。

三村 甘過ぎるとでも云ひませうか。
石川 私は香、味とも上の部にはいるやうです。併の味のほうは多少男性的なところが足りない押がないとでも云ひませうかね
三木 この次は『瓢正宗』はどうですか。

上野 少し味が優れて居ないぢやないかといふ様に見ました。香は相當あります、之は私だけの感じかも知れません。そしてこんな酒は市場では却て評判がよいもので、商品としては可なりなものだと思ひました。
三木 誠鶴、金剛鶴、大錦、福迎天佐、三巴自慢、瓢正宗のこの七點の中で、一番自分の氣に入つて自用に使ふといふのはどれですか。

上野 同じ自用でも自分が日常愛用するものと、來客のときに用ふるのがありますか、どちらを申しますか。
鎌田 客を招ふには早く酔ふのが宜いでせう(笑聲)
三木 自分だけで飲む場合です。
上野 誠鶴がよいと思ひます。

本場銘仙
毛糸各種

ち、ぶや

本町二丁目
電話五〇五番

平石 私も誠鶴です。
田村 私は福迎です。

三村 私は大錦だと思ひます。
石川 私は金剛鶴、大錦、三巴自慢は同點にはいるだらうと思ひます。その中で一番氣にいつた酒は、そりや第一審の結果を見ないと分りません(笑聲)

田村 良い酒といふことと自分が需要したいと云ふ事とは異なます。良い酒は三巴自慢であるが需用したいと思ふ酒は福迎であるとの意味で先程申しました。
三木 それで結構です。山田君どうですか。
山田 私は大錦が一番いゝと感じました。
三木 君は大錦を用いて居ると云つたね。

鎌田 私は三巴自慢がいゝな。
三木 實際、自分が晩酌で酒を嗜まうとするとき嗜好に別があるやうですが商品としてはどれが一般向きだらう。
上野 商品とあれば大錦だと思ひます。

田村 私は福迎だと思ひます
上野 大錦邊りは商賣人としては

良い酒ではないかと思ひますな
佐田 商品となると商人はまた見方が違ひますねえ。割の利く酒を好むやうです。
山田 商品としては誠鶴が一番よいと思ひます。商人は割のきく酒を取る。

田村 大錦は労働者向きでなく、大變御上品な酒だと思ひます。
佐田 さうですか……。
田村 つまり多數消費者側の望には叶つてをらぬだらうと思ひます。
佐田 これで爛をするとトント違ひますよ。

上野 それは大に違つて來ますな
三木 冷で喇くより、寧ろ何だか皆爛をして喇けばいゝんだな。
佐田 爛上りをする酒があるから……。

鎌田 どういふやうな酒は爛上りがして、酒がよくなるのか知ら
佐田 どうもそれは理論的には云ひにくいですね。
鎌田 三巴自慢はくせのない『芳醇な』と云ふ言葉は確かに常飲まるやうに思ひますが、あゝ云ふのはどうですか。

佐田 あれは爛したら遙によくなくなる。

上野 (三木氏に向ひ) 何も批評

のお話がありませんが……。

三木 数日前から風邪をひいて了

つて、酒の香も味もわからない

今日は折角だけれども酒を剛い

た結果を話したり批評したりす

ることは差控へてをる。ハハ……。

上野 さうですな、お尋ねするの

が無理でした。ハツハツハ。

三木 レッテルを貼つてあると喇

いた感じが違ふやうですな。

佐田 それはさうですな。

鎌田 私は此前煙草の鑑定をやつ

たことがあるが、その日の天氣

本町二丁目
龜屋喫茶店
(電話本四二四五)

模様で違ふ。又その時の氣分で

も違ふ。それから一番、二番と

順位をつけて置いて、今度はそ

の等級を見ないで、又やつて見

ると、必ずどこかで違つて来る

それから今云ふやうに、その當

時の日光の関係でも違ふし氣分

によつても餘程違つて来る。だ

からレッテルを貼つてあると、

そこへどうしても違ひが出て来

ると思ふですな。

佐田 朝鮮酒は面白いですよ、金

浦の品評會で表彰授與式に、誰

が表彰されたと云ふことが村中

に知れ渡ると、あれが優等賞に

になつたのは「目がよかつたか

らだ」と云つて部落民が噂して

をつたそうです。

鎌田 それはあつて居るかも知

れんぜ。アハ……。

佐田 酒のことは云はないで目が

よかつたとは面白いことを云ふ

ものですか。

山田 併しレッテルが貼つてあつ

て、入亂れて混戦状態になつて

をると、仲々酒は剛けん。殊に

私らは鈍感の方だから……。

上野 どうもレッテルを見るとい

かんなあ。

三村 私は福迎を飲んでをる、以

前は此の木香が厭な感じを興へ

るので、い、のを一升持つて来

て貰ひたいと頼んでも、持つて

来た酒が全部同じ香がして、初

めは何だか變でしたが、飲慣れ

てしまふとそれがよくなつて来

て、今頃は非常に飲みよいです

佐田 酒屋に云はせると、酒の小

言が多い。早速取替へますと云

つて同じ物を持つて行く。今度

は大變良いのだからといつて持

つて行くと、ウーンこれは上等

だといつて喜んで飲む。どうも

お客さんは面白いものだといつ

て居た人がありました。

三木 尤も同じ値ではいけないそ

うです。前の値より高いものに

して品を吟味して持つて来たと

云つてね。

佐田 殊に酒はその欄の加減によ

つて、その都度味が違ふですか

らねえ。

三木 それぢや今日はこれで閉會

致しますせう。大變色々お話を承

つて有難うございました。又こ

の次には樹耐なり薬酒などにつ

いてかういふやうな催をしまし

て皆さんのお話を拜聴すること

に致しますせう。有難うございま

した。

鰻井

五拾録

お壽司

一度は御試食を

本町五丁目

阿波文

(電本一八三七)

航空風聞記

三木一彦

○航空會社の飛行機の便所は、
どういふものか、扉の開閉が、至
つて具合が悪い。

○土地信託の末森氏も、這入つ
た切り出ることが出来ず。打てど
叩けど、アノ爆音で、誰一人それ
に氣づくものはない。とうとう泣
きの涙で、次のお客様の来るまで
辛抱した。

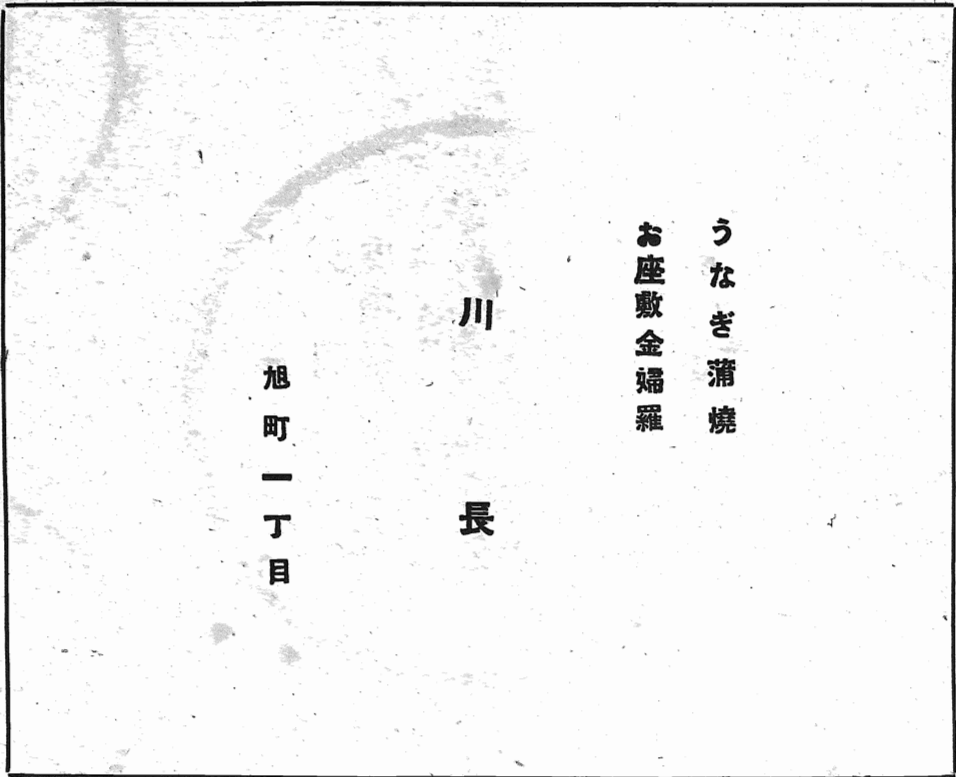
○コ、に哀れをとどめたのは、
可部商會の事務の今井さんで、同
じく這入つた切り雪隠詰め……。
凡そ知る人々の名を擧げて、いち
／＼助けを求められ、効果更にな
し。今井さん一段悲聲をしばつて
とうとうおきの、奥さんの
名を呼んださうだ。が、それでも
効果はなく、とうとう大阪まで雪
隠往生。今井さんゲツソリ度せた
といふ評判。

○それで……戻り(東京からの)
は、この暑いのに、エットン／＼
汽車旅行、或る人が見つけて「オ
ーヤ、お宗旨が違ひませう」とい
ふと、今井さん憂鬱な顔!。あり
し次第を説明して、「だつて君、
女房の名を呼んでも、尙ほ且つ利
目がないんでネ」

になつたのは「目がよかつたか
らだ」と云つて部落民が噂して

に致しませう。有難うございま
した。

女房の名を呼んでも、尙ほ且つ利
目がないんでネ」



茶いろく
茶器いろく
青々園茶舗
京成本町二丁目
(電話本局二二二番)

外科
皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸 潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

内科
小兒科
中島病院
明治町二ノ七七
(電話本局三七八番)

お二人で一つの保険に
はいれる然も保険料は二人保険
普通の一人分餘ですむ
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期預金の外 不老保険
に普通預金がつきます

M式卷上日覆
各種テント
非露車常用雨覆
フット常雨覆
其他帆布製品
製作販賣

京城中
前 西
會商トシテ
八四八二本電

京城永樂町二

酒井婦人病院

院長 酒井一郎

(電話本局二八番)

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三
電話本局三六二番

內科
小兒科

木村醫院

院長 木村文三郎

京城府吉野町九一
(電話本局七二五番)

京城本町二丁目

一番瀨醫院

院長 一番瀨慶次郎

(電話本四〇〇五番)

明治町二ノ七五

利根川齒科

院長 利根川清治郎

(電話本局二八七番)

秋涼
御機嫌御伺

西洋料理
支那料理

東西の美酒を
とりそろえ御
入來待入候
御東上の際は
是非御立
り被下度候

東京芝新櫻田町

泰明軒

衆議院そば

南扇子室

ふ人はまつ無からふ、おと涼し相
など云ふ感銘が、多分に湧くであ
らふ、そこで次々夏の眼玉を思ふ

南扇子室

柳 京 太 郎

(新 橋 洞)

1、秘 法

近頃、尖端的百パーセントのエロ横溢が大流行、淺草カッパ、フオリあたりは、正に百パーセントのエロ跳躍で、觀衆の膽を冷し心臓の熱を高めてゐる譯であるが、近來エロに因む耳よりのコント一ツ――

扱て不況で商賣も思ひの儘ならぬ矢先き、此處は裏通りの某々鳥料理、入れ替り立ち替りの大盛況、此の不況に何んぞ曰くのあり相と、其の種や仕掛けをと主にきけば、

『やはり女ですよ』との返事だが、女衆は、美しく若く、處がよろしく、年は二十二から三四迄、但し男を知らぬ女は駄目なんぞ、一度は亭主を持つたが今は全く獨り身と云ふ處、女衆はすべて住み込みさせ、通ひはいけません、勿論外泊などは絶對に禁じ、これは特に取締る必要があるんで云ふのは風紀上と云ふ譯合でなくつまり男に饑えさせると云ふ寸法――處で、客へのサービスは上々吉、親切で丁寧で愛嬌よろしくしかも當節流行のエロ味はたつぷり、申し分無しと云ふ處で御覽の通り千客萬來――囁みしめてその味誠に妙、又ぎき乍ら御披露に及ぶ如件。

2、楠公と親子丼

首なし美人と云ふのが、そもその初まりかどふかは、筆者も詳にし得ないが、近頃世に續出する奇妙な題目、曰く赤い白鳥――曰く静かなる暴風――曰く青ざめた馬――曰く眞鍮の眞操切符――曰く天皇とプロレタリア――曰く丈高き小人――曰く楠正成と親子丼――曰くツロースを穿き忘れたお嬢さんの話し――曰くマシマローキッス――曰く明眸の盲人――曰く風船玉とスプリングコート――曰く馬美人――曰く老妓と風呂場――曰く辱められた映畫――曰く曰く、此れも近代風景の一つ。

3、傳統と習慣

浴衣に足袋など穿くもんでない、年寄りにきかされて、又そんな風な夏姿を見習つて来た私は素足を入襟にしめすのは失禮と云ふのであろふか、近ごろ浴衣に白足袋を穿いて、御丁寧なものになると、半襟迄付けてる人を見受ける様になつたが、夏姿にしては随分無趣味な流行である。

うすものや、素足自慢の女談と云ふのは、その界限の流行ではなくして、それが本格なのである。

今、夏の果物屋の前に立つて考へる――水瓜、メロン、葡萄、桃、レモンと雜然と強い色乳が混和して、視覚に訴へて来る。
あゝあつ苦ししい色だ――と思

ふ人はまつ無かるふ、おゝ涼し相など云ふ感銘が、多分に薄くであらふ、そこで次に夏の服色を思ふ譯であるが、涼しい夏の色は、決して白、水色、桃色、淡緑などの淡い調子の色とのみは限らないと云ふ事である、あの果物屋の店頭に見る色乳の調子――之を夏の服色に持ち來つたらどふであらふ、さても暑くるしい服の色、とは決して考へられまい。

傳統と云ひ、習慣と云ふが、浴衣に足袋など穿く習慣は、覺えぬがよく、涼しい色は、淡い調子の色だとのみの傳統は、今一應考へ直すがよろしい、特に地肌の黄色い東洋人に、淡い色のしつくり肌、調和する筈がないのだから。

◆左利きの辯

北 漢 山 人

○見玉政務總監は、有名な左利き……ペンを持つのも、箸をとるのも、左の方がズツと器用だといはれる。

○ところが、先日の中等學校の野球試合の、始球式には、珍らしく右の手で、しかも立派なストライキが出たので、觀衆一同「ヤァ奇妙だナァ……きつと稽古をせられたんだらう」

○それが耳に入ると、總監「君等は、二本の手をもつてゐても、その實一本(右)しか役に立つまい。手の効用は、左右協働、殊にどつちでも、いつでも役に立つ……それでなくちやネウチはない。どうだネ君……間違つてるか」

○圍繞の人々、眼をパテグリ。

僕の健康法回顧

鷹松龍種

(京城法專)

【三八】

ある。

凡そ生病死は人生に免かれ難きところ、御難題以來幾億萬の人間が苦心しても、容易に解脱の彼岸に達し得ないのである。秦の始皇帝が不老不死の靈藥を求めたのも、スタインナツハの若返法に世人が耳目を聳てたのも、健康法の書物が本屋の店頭を賑やわして居るのも、みな延命長壽無病息災を希ふ人情の流露で、凡人たる我等としては無理ならぬ事である。僕は常に思ふ。健康法は必ずしも一方法を固執するに及ばぬ。各人の境遇と體質に應じ適當と考へる所に従て在來の方法なり、自己獨創の方法なりを試みるが良し。併し何づれにしても自分は健康法を實行してゐるから才夫で長命をするといふ安心を得るが肝要である。要するにかの佐藤一齊の言の如く小藥は是れ草根木皮、大藥は是れ飲食衣服、藥原は是れ治心修心に外ならないと思ふ。

れを振廻したものだ、回数を増すにつれて、時を要するのと、それに心臓に悪るといふ者もある。一年ばかりで止めた。次に初めたのが冷水摩擦である。これは渡鮮後も相當に續けたが、いつとはなしに止めてしまつた。

誰でもそうした経験があることと思ふ。別に病苦に悩まされて居る譯でないが、人並みに何にか健康法をやつて居ないと気が濟まない。そこで體操、深呼吸、冷水摩擦、精神療法、人蔘服用など色々な方法の内から其の一を選んで試みて見る。一年か半年續けて見るが、一向效驗が顯はれて來ない。もと／＼確乎たる決心の下に初めたのでないから、旅行に出掛けたり風を引いたのが機會になつて、其の儘になつてしまふ。それで暫く經つと又同じ様な氣分になつて他の健康法を試みるが、それもいつの間にかやめてしまふ。こんなことを繰返してゐる間に、知らず知らず白頭を戴くに至るのである。僕の父は八十歳の高齡を以て、先年郷里で身まかつたが、數十年來早朝飲かさず井戸端で冷水を浴び、四肢に力を入れて踏張るを例として居た。僕が幼時、寒い朝であつたが、洗面を嫌つて父に叱かられた腹立ちに、瘠我慢を出して、父と井戸水を浴びた。所が遂に其の爲に發熱して楽しい正月を病褥に呻吟した記憶がある。父の晩年には父が寒中冷水浴をやるのを見て健康法とは氣が付かずに、法華信者とも思つたのか、御信心なこと御座ると挨拶する人もあつた。

僕の學生時代にはサンドウの鐵啞鈴が流行して、細い腕で盛に之

れを振廻したものだ、回数を増すにつれて、時を要するのと、それに心臓に悪るといふ者もある。一年ばかりで止めた。次に初めたのが冷水摩擦である。これは渡鮮後も相當に續けたが、いつとはなしに止めてしまつた。

たしか大正三年頃の夏と記憶するが關屋宮内次官が學務局長時代に同氏や田中寫眞館主などと、橋本五作氏指導の下に、岡田式靜座法の講習を受けて、腹の大きくなるのを楽しんだものだ。當時のことであるが、腹は人格を代表するものだ、彼の男は腹が太いとか、腹の出來てゐる男だといふ如しと橋本氏から聞いて、感服したのであるが、間もなく上杉博士の講演會で、外界の財物を手で握るのが權利の發生する基である。今でも手は人格を代表するものだ、例へば技手、運轉手といひ、彼の男はなか／＼遣り手だといふ如しと聞かされて、聽者たる僕は大に迷つた事がある。最近流行の觸手療法では上杉博士の説に左撥するであらう。兎に角、靜座は僕の健康に利益した様であつたが、例の癖で其の後、九大の櫻井醫學博士と全北の故育總會で同席した縁故から同氏主唱の所謂紳士體操に宗旨を變へた。最近には友人勧められて冷水摩擦を簡便にした様な、健康ブラシなるものを買つて見たが、果していつまで續くことか疑問で

訪問帳から

むらさき

- 三越の化粧品部に、マダ若い二人の女店員の方が居られます。
- どつちも水際立つた御容姿で殊に地肌のおうつくしいこと、全く惚れ／＼としてしまひます。
- 或る日お二人に、「ヨ、の化粧品をお使ひなすの……それそんなに」と、お尋ねすると、「ホ、……」とつ／＼ましくお笑ひです。
- 化粧品部に、こんな方々を選定されたのは、流石だと感心いたしました。

小さな自然界

△初めに概観したときと餘り變りがなくなるではありませんか。
○一見さうですが其内容から見ると大した相違があります。例へ

僕の學生時代にはサンドウの鐵
啞鈴が流行して、細い腕に盛に之
果していつまで続くことか疑問で

定されたのは、流石だと感心した
しました。

小さな自然界

甲野宗一

(京城師範)

△自然界は餘りに廣大で一寸研

究しても容易に其真相を把握する

ことが出来ませんが、何とか手取

早く之をつかむことは出来ないも

のでせうか。

○仲々六ヶ敷いことですが一つ

やつて見ませう、先づ櫻の芽を探

つて来て、外部的の形態や構造を

觀察して御覽なさい。

△一番外側には黄褐色をした角

質の堅い鱗片が丁度鱗状にきつち

り重り合つて内部を包んで居ます

少し芽が伸び出して膨らんだもの

では、其鱗片の内部に薄緑色で稍

厚手の苞がやはり鱗状に片々相重

なり合つて居ます。一層成長した

ものではその中から若葉とか蕾と

かが覗いてゐます。

○それでは次に其芽の伸び出し

て中から若葉が覗き出したものを

二つ三つ採つて、外部から鱗片・

苞・葉といふ順序に解剖し、これ

らを一枚も捨てないやうに外側か

ら順序よく一列横隊に列べて御覽

なさい。

△三通り列べて見ました所が、

大變なことになるました。

○何か大発見でも出来ましたが

△不思議です。初め芽を外側か

ら剥たときには、鱗片・苞・葉と

三者が夫々の特性を有つて居て判

然たる區別がつきましましたのに、か

うして並べて見たらこの三者の區

別がつかなくなつて終つたのです

○何處が區別がつかぬと云はれ

るのです。

△鱗片は外部から内部のものに

至るほど、下部に苞の様な柔かい

質の部分を増して漸次苞に似て來

るので、終には兩者の間が一連り

になつて區別がつきません。又苞

は内部のもの程葉に似た形質を備

へて來るので、これも葉と區別が

つかなくなりませう。

○なる程芽を外面的に概観した

ときには、何等の疑點も挟まず三

者の區別がついたのに、更に進ん

で内部を解剖し其各部各部を詳細

に比較研究して益々明確になるべ

き三者の概念が反つて混沌として

來た。初めに分つたと思つたとき

は、ほんの上面丈が一寸解つたの

で所謂半可通なのです。愈々解剖

的に内部まで微に入り細を穿つて

研究して見ると反つて解からなく

なる、それが自然界の真相です。

初めに判然と解つた様なのはほ

んとどうに解らないので、後に解ら

なくなつたのはほんとうに解らな

いといふことが解つて來たので眞

に何よりです。

△それでは鱗片・苞・葉の三者

の間には差別はつけられませんか

○つけられます。そんなに各々

を集めて並べて、之を通觀し比較

研究した上で、苞よりも鱗片に似

た特性を多分に有つて居るものを

鱗片とし、同様葉よりも苞に近い

ものを苞として區別して取扱ふの

です。

△初めに概観したときと餘り變

りがなくなるではありませんか。

○一見さうですが其内容から見

ると大した相違があります。例へ

ば朝鮮と支那の境を地圖上から概

觀すると、簡単に鴨綠江であると

か白頭山であるとか合點するので

あるが、實地踏査して其境界線に

臨んで見ると、鴨綠江の河の中に

も幾つも大小の島があり、或處は

河幅が素敵に廣くなり、狭くなり

分水界に當る處にも廣ッばもあり

して、何處からが朝鮮に入り支那

にはいるか、愈々判然しなくなる

それを實地に調査研究して明瞭に

境界を決定するやうなものです。

△分りました。それでは實際は

この三者の間には劃然たる區別が

つけられない一連のものであるか

ら、只便宜上區別して取扱ふので

すか。

○然り、自然界のものは相互に

連続した一連一体のものであるか

ら此處から彼處までは何、彼處か

ら其處までは何々、といふやうに

判然たる區別がつけられるもので

はありません。だから芽を一体を

なす小さな自然界と考へたならば

其一体を構成して居る部分部分に

夫々明かな差別がつくものではあ

りません。

各が一連であり差別のない處に

區別を立てやうとすると屹度何れ

かに無理がゆくものです。それを

承知の上で區別して取扱つて行く

のが自分の立場なのです。

△このやうに並べて見ると鱗片

苞・葉の三者の間には如何にもよ

く似通つた處があるので、これら

は元同し血統から發達して來たも

の、様に想はれますが如何でせう

○成程前には芽の各部を分解的

差別的に觀たのですが今度は綜合

的普遍的に観ると同じ祖先から生れ出て来たもの、様に考へられるとは面白いことですね。凡そ植物体は根・莖・葉の三部分が基本形態であるから、花も實も棘も纏て根か葉か莖か何れかの變形物であるといふことになります。

△それでは鱗片や苞は『葉の變形物』として一括して考へてもよいものなのですね。

○さうです。そんな風にして自然界に在るものを、或は差別相から眺め、或は普通相から翻て行く。個々の知識が明確になつて来るばかりでなく、系統化され合理化されて来るのです。さうして普通相の洞察から法則が発見され眞理が掴み出されて来るのです。

○今度は鱗片・苞・葉は夫々如何なる役目を務め、どうなり行くものであるかを觀察し考究して御覽なさい。

△鱗片は堅い角質でしつくりと重なり合ふと内部の葉や花や莖になる元ものを包圍して、雨露風雪外敵等を防いで安全に冬越しが出来来るやうに巧妙に出来て居る。苞は春になり芽が膨らんできて鱗片で包み切れなくなつた時鱗片に代つて内部を保護する様面白く適應して居るが、これも莖葉の伸長につれて脱落して死亡します。

葉はこれら兩者に保護されつつ發育し、春夏秋にかけて、悠々として而かも間断なく呼吸作用、同化作用、蒸散作用等を營んで、遂にはこれもあつさり脱落し朽ち果ててしまひます。

○この三者を通覽して、共通點とか類似點とかいふものを見付け

出して御覽なさい。

△これらのものは皆夫々自分の出来得る丈のことをやり遂げて死滅して行きますから分を守り分を盡して死ぬといふことが分りました。而かもこのことを他の種々様々の自然物に當てて見ると、どれもこれもこれにもよくあてはまるのでこれは天地萬物に通ずる間違のない一貫の眞理であると信ぜられて参りました。こう信じてきたとき何とも云ひ様のない心底から湧き出すやうな喜びを感じて参りました。

○痛快く。貴重な眞理を發見されました。而も之を心味体行されたのですから、ほんとに君の精神界に永遠の存在となり血となり肉となつて養つて呉れる無限の糧である。眞に身に着いた寶です。その眞理を『萬物は分を守り分を盡して死すべきものなり』としては如何です。

△成程鱗片や苞も葉も自分の役目が済んでも尙脱落せず永久に固着して居つては困ります。死すべき時に死なないで戀々として居ると所謂邪魔物になりますから、天分を全ふして斃るべきものと訂正した方が一層適切なやうです。

○これら三者が分を守り分を盡して死ぬ目的は何れにあるのです。△芽を進展させる爲めです。

○さう、芽を構成して居る部分最善の奉仕をして斃れるといふことになりまます。だから今假りに芽を小さな自然界として考へて見ると、自然界の一部分をなして存在してゐるものは、それらが集まり成して居る全体(自然)の進展の爲めに最善の奉仕をして死すべきものであるといふことになりまます。

即ち生物其他萬物の生存(存在)する目的は大自然(大生命)の進展に貢献せんがため、それに對して、充分なお役に立つならば、死して大満足が得られ本望を遂げることになるのです。

こんなふうになつた芽を解剖してこれを展開したときにも、恰もそれを自然界の展開であると考へて、これに對し、或は科學的に、或は道徳的、經濟的、藝術的、時間的、空間的、宗教的に觀察考究を進めて行きますならば、そこには眞理の緒が見出され、それを基礎として、廣く自然界の萬物萬象の上に歸納し演繹して行けば、所謂宇宙の眞理を窮めて行くことが出来るのです。

◆女史の寢姿

北 漢 山 人

○高商の岩佐先生は、少年の頃下田歌子女史に愛せられ、しばらくその邸で勉強せられたことがあつたさうだ。

○女姓でも、アノ位の人になると、いろ／＼及び難いと思ふ點もあるが、その一ツに、女史はやすまれる時、たとへば、右脇を下にして寝に就かれると、終夜唯一回の寢返りだにせず。翌朝目の覺めるまで同一姿勢で整然としておやつてゐられたさうだ。

○もち論健康のせい、慣習のせい、それもあるだらう、しかし如何なる場合にも動せぬ心、おちつき切つた心算——それなくてはあのやうにはあり得まいと、岩佐先生は評されてゐた。

ものには支那に種のあるものが少くないと云ふが、記憶に残るのは水滸傳の解珍解寶孫立孫新大に年

小説

松井權平

(城大醫學部)

果ててしまひます。
○この三者を通覽して、共通點とか類似點とかいふものを見付け

成して居る全体(自然)の進展の爲めに最善の奉仕をして死すべきものであるといふことになります

き切つた心境——それではなくてはあのやうにはあり得まいと、岩佐先生は評されてゐた。

現代大衆文學全集も本月大佛氏のを以て四十巻となり完結するが大方通讀したけれど一向印象を遺したものは無い。著者には失禮な申し分が知れないが無論娛樂消閑の讀物で眠氣を催す爲め尾籠な話だが便所、稀にする旅行の折等欠伸押へに見たのだがこう千頁四十巻と積み上げると大したものだ。之ばかりではなく富士に立つ影とか江戸三國誌、赤穂浪士等も見れば講談、落語の全集も通覽して居る。巢立ちする猛禽が方角を變へず飛んで飛んだその結果元の古巣にかへるとか云ふ事であるが、人間の空想の所産澤山集めて見れば似たものが出てある數の筋書の種々な組合せにすぎない。目あかし劍客、美人、俠客、大盜等の入り亂れ、實物か機密文書の爭奪競争をする外に出ない。子供の頃は八犬傳の如き昔の讀物の外新聞の繪入小説には浪六の首賣二三、鷲重とか桃水の胡砂吹風を、仰天子や連山人、新兵衛氏等の所謂童話、押川春浪、江見水蔭の冒險物と一所に面白いと思つた。胡砂吹風など丁度日清戰爭頃で源義經の後裔義種とか云ふ壯漢が主人公であつたとしか覺えて居らぬ。少し後に故大橋乙羽氏の累卵の東洋と云ふ東海散士の佳人の奇遇をまねたと稱する極めて生硬な、而も美文で綴られたのがあり、智奴と云ふ一印度青年が鹽を作つて罰せられそ

の爲大に發憤して反英運動するが筋であつたと記憶する。丁度ガンヂーの様な者だ。之に序や題辭が澤山あり高橋太華山人は文章を批評して錦上鬘を添へる如しとて用語の雅俗混淆を皮肉り、綠雨は累は「カサネ」卵は「タマゴ」、カサネのタマゴが化けて出たらば可笑かるべしとし、「ぶぐ汗や劍見て居る醉さまし」紅葉、「狼の足あとながら雪残る」など賑やかなものがあつた。大衆物の本山とも稱すべき白井氏のものはその博學が隨所にあはれ獨樂に樂城に軍學に其蘊蓄を傾倒し説明的であり、八犬傳の「龍」の亞流のやうな所が無きにしてもあらず。國枝氏の山嶽族が出て主に甲信の邊に舞台が開展し台灣の東部山岳へ入つて何族とか云ふ代物が飛び出して來るやうである。お二人の物語中に慧星のやうに輝いて出、再び來ないで消える人物がある。自身大衆文學で無いと云ふが中里氏の大菩薩峠は面白いと思ふ。自分の郷里の人でその事が多く書かれて居る爲ばかりではない。大内山の奥深く道灌以前にローマの寶劍が埋めてあつたとか江戸三國誌その儘の新聞記事が此八月に三百年振で行はれる御泉水の手入報導に付け加へてあつた。此三國誌にも同じ著者の麝香猫にも高麗村の條や怪少年の美人に侍する等筋の似た所がある。之は同一人であるが馬琴の

ものには支那に種のあるものが少くないと云ふが、記憶に残るのは水滸傳の解珍解寶孫立孫新大に牢を却す所が美少年餘樵一郎、八重作等の勇男女囚牢を鬧る原圖であり、京傳の本朝粹菩提の蛇娘は美濃の蟹滿寺(?)の蛇蟹の傳説をそのまゝに入れてあり、深く注意しないで讀過したのもでも一寸思ひ出すのが之位あれば詳しく研究的に見たら面白い分類が出来るかも知れない。純文學と云ふ方面の小説は餘り知らない。明治大正文學全集は續けてとつて居るが殆んど讀まない。從來漱石、藤村、武郎、健次郎氏らは全集が單行本で中學の頃から全部讀んだ。之等の人のものは西洋小説に似て居て好きだ。西洋のは露西亞のものを一番多く見た。主に「レクラム」と「インゼル」出版のものでツルゲネフ、ドストエウスキーを殆ど全部讀んでトルストイを大部見た。ゼンキーウキツも、「クオオバジス」の外大部は「ボラニエツキ」の家族を見たが大分忘れ、只「ラスカルニコフ」も「トイフェル」も読まれて居るやうな氣持がشدストエウスキーに頼欄のよく出るのを覚えて居る。デンマークではアンデルセンを一番多く讀み法醫の圖書室でアスムセン、フレンゼン等見た。佛國のはゾラとユーゴーの有名なものを見たが殊にユーゴーを拾ひ讀んだ。佛國には面白いものが多い事と思つて折角佛語佛文を勉強したが小説は齒が立たない。獨乙はズーデルマンの「ロマン」を全部見た、演劇ものは元來苦手で一つも讀まない。ハウプトマンも「フリードマン」と云ふ小説を沈鐘の著者のものと心得たらある人にその見たとを教へられ

韓 郷

市山盛雄

歌集『韓郷』出しておかなむ憂鬱なこのごろこころいぢつになりて

何かしら不安なものに追はるごときこころにいそぐ歌集なりけり

くるしきをまして金にもならぬ歌集出さむ願ひのあはれなりけり

貧しかるこれの歌集を友ら来て賣りてやるぞとうれしがらせり

たましいの息吹きをかけて詠みたりきまつしけれどもこころた入り

聊か忸怩たりであつた。ズーデルマンは我邦に來ると云ふ噂があつた丈にコンラッドの叔父のレンシユシッドが吉原を知つて居る。けれどフライターハの『ゾルウインドハーベン』にはお伽の國の王様のやうに日本皇帝と一寸あつたやうだ。先頃改版中の『プロックハウス』に東郷元師と乃木大将と混同し居るそうだ。英雄元師の如きにして然り、未だ西洋人は思つた程に我邦を知つて居ないやうだ。北歐物はデンマーク以外殆んど知らない。ワイスマンの進化論に科學者としてはルイ、アガシー文學者としてはストリンドベルヒが進化論に反對な人とあつたので丁度外遊中黒い旗と『コチツク』の部屋とを讀んだが成程進化論を歐哲學と云ひ犬と女が嫌いな鬮や巴里の『シテ』に起つた旋風に力を入れて居る邊さもそうすと點頭かれる。トン、キホーテは餘り武勇傳を讀んだ爲め遂に『ロシナンテ』に鞭をあげ『サンホ、バンサ』と武者修業に出るやうになつたさうだ。小説に中毒しても感心せないから此位で止める。

◆ 應接室閑話

漢 江 漁 郎

○外遊當時の山田新一氏……或る時京城高商の柴山教授と一緒に伯林に遊んだ。

○その頃山田氏は、どういふものか、無数の毛ジラミが發生し、晝夜これに悩んでゐた。

○ソコで、散歩に出た序、藥種店に立寄り、毛ジラミ掃蕩の藥を手に入れやうとするが、言葉が通ぜぬ。柴山氏を頼みて、「頼む頼

む』と目で相圖をするが、ゼンツルマンの柴山氏は、クスリ／＼笑つて、更に毛ジラミに言及せぬ。つまり兼ねた山田氏、『チヨツ、此處だ／＼』と、局所を押へて、掻く眞似をする。番頭それを知つて『ウフツ……判りました』

○ところで、店頭には、丁度貴婦人三四名、買物をしてゐたが、山田氏の掻くのを見ると、一度にキヤツといつて、おどり上り、風舞ひして、一目散!

○京城の官界や、學界には、東北出身の人材が多い。

○イヤ、嘗て京城のみならず、全日本的に見て、東北人の勃興といふことは、争はれない事實だ。

○これに就いて、瀧戸先生は語る。『僕等の子供の時は、東北地方は、郡長にせよ、署長にせよ、山林區の區長にせよ、稅務署の署長まで、悉く薩長の奴原で、大きい額をして、のさ張り歩いたものだ。ソコで、僕等の親爺にしてもしつかりやれ、あいつらに負けるなど、極力子弟を勵ましたものだ。星霜茲に卅年、この父老の志の酬るるゝのは當然ぢやないか』

○先生は、また言葉を改めて、『御承知の通り、齊藤(總督)さんは東北人ぢや、逆境に戦うた人ぢや。従つて今の朝鮮人に理解がある。彼等が神の如く總督を景敬するの、無理はないといへる。のう君、そうぢやないか』

忘れぬ顔

と其場をつくるへば、若い婦人は「常盤館で……」と附け加へた。

店に立寄り、手シラミ掃蕩の薬を
手に入れやうとするが、言葉が通
ぜぬ。柴山氏を顧みて、「頼む頼
みふことは、争はれない事實だ。

するもの、無理はないといへる。
のう君、そうぢやないか」

忘れぬ顔

高橋昇

(三義載寧鐵山)

先日、朝旅館に着いて間もなく
出かけたまゝ翌日の夕方まで、あ
ちこち飛廻つて宿に歸つた。支關
番が直ぐに『二十二番さんお歸り
……』と聲を掛けたのには一寸驚
かされた。

と言ふのは此旅館には、數年前
までは幾回も行つた事があつたが
其後今回が始めてであり、昨日室
に入つて出た丈で、旅館の者は客
の顔を覚えるのは、職業柄必要な
事には相違ないが、部屋の番號と
共に覚えて居るのは感心だ。

シカシこゝに二つの事が考へら
れた。一つは各部室に、客の不在
在を一目に示す様、揭示板でも、
豫ねて備へてあり、丁度全体の客
の内、僕一人が外出中であつたの
で、其揭示板を見たら、二十二番
丈が外出だつたと直ぐに解つたの
かも知れぬ。

そ一つは、學生時代に友達が僕
を『二度見ると忘れぬ顔だ』と
言ふた事があり、又實際一度會つ
た丈の人に、これを裏書きされた
事が、既に二回もあるの、支關
番も亦其轍ぢやあるまいか。

一度見ると忘れぬ顔と、裏書
きされたのに就いて、古く書いた
ものが有つたので、其儘次ぎに書
く事にしやう。

去年(大正三年)暑中休暇が將
に終らんとする九月の初め、僕は
郷里から九州へ来る途中、なつか

しい京都に久調を叙し度いと思ひ
立寄つた、丸太町から出町行の電
車に乗換へて間も無い事である。
何とは無しに横を向くと、向ひ側
の六七人も先きの席の姿隠しから
ぬ婦人と、フト視線が合つた。

婦人はニツコリして丁重に挨拶
するので、帽子を取つて丁寧な答
禮した。サテ答禮はしたが、誰れ
だか一向思出せぬので當惑した。
若い女に挨拶せられて、學生が當
惑して居る様子が、おかしかつた
のだらう、向ひの紳士が笑つて居
た。何はともあれ京都に居た時に
知つて居る人に相違無いと思ひ、
世話になつた所や、訪問した所を
いろ／＼物色して見た最後は、一
度下宿した寺の奥さんの顔が思ひ
浮ばぬ、其外で挨拶して呉れる人
なら、直ぐに思出されさうだから
どうしても寺の奥さんと心にき
めた。

電車が終點に着いて下車する時
に、婦人に近寄つて
『失禮ですがお寺の方ですか』
と切り出した。其言葉の終るか終
らぬに
『イエ……博多で……』
と遮られて進退谷まつた。博多で
はまだ新参者で、知人も少なく、
まして婦人で、シカモ京都へ来て
居るとは、トテモ解らぬ。只大き
な目をキョト京都さすばかり。

鬼に角
『おりませう』

と其場をつくらへば、若い婦人は
『常盤館で……』
と附け加へた。
それで成程知られて居る筈、又
知らぬ筈と合點した。少し話をし
て別れた。

それより約三ヶ月前、卒業生諸
君の送別會を常盤館で催した時、
幹事の一人として席を賑はす爲め
に、餘興などやつて、衆目を一身
に集め、又最後迄舞つて始末した
ことがある。僕は其席に居た多勢
の女中連を覚えては居なかつた、
又覚え様ともしなかつた。

本年(大正四年)一月、博多の
譯待合室で、堂々たる紳士が近よ
り、帽子を取り挨拶せられる。見
た様な人だと答禮はしたが、シカ
シ思ひ出せぬ。兎狩に出かけ様と
言ふ時である。何か話して居る間
に解るだらうと
『今日はどこらへ』
『宰府の櫻見に醫科の〇〇博士
などと御同行で、あなたは……』
といふ様な、いろ／＼の話をして
居るが解らぬ。とう／＼

『此前お目にかかりましたのは
何處でしたか』
は苦しい
『津屋崎で……』
でスツカリ解つた。

昨年秋季皇靈祭の日、單身支海
の波を友に、北方へ遠足した。丁
度津屋崎へ着いた時に雨になり、
療病院へ駆け込んだ。雨宿りの先
客があつて、坊ちゃんを一人連れ
て居られた。何とかするも多少の
縁とか、自然話もした。博多の方
であつた。病院の支關で患者が中
に遊んで居るのを見たり、雨に泡
立つ浪や、雲足早い空を眺めて、
浪屈な思ひをする事約一時間、雨

【四三】

の小やみになるのを待ち、一緒に
出かけて、渡舟を渡り、ソコで別
れた。其方と再會したので、前は
和服であつたが、今度は洋服であ
つた。コチラはいつも制服制帽の
一脱張りである。

× ×

第二回卒業生發別會が、又常盤
館であつた時に、其女中さんの事
を尋ねた所、僕等の會があつて間
もなく嫁入つて、其家が京都に引
越したのだとの事であつた。

兎狩の時には、歸りに風が出た
りして

卯狩する人を罰せの山おろし烈
しかれとは祈らぬものを
など、狂歌つたのを思出される。

◆ 社交術閑話

勿 忘 草

○明治屋へ行つて「ヨコの支店
長さんは、おいくつで」と訊く。

○記者は時々、人をほめやうと
して、柘をとり違えて、この失策
をやる。南無三々々。

【 四 四 】

○店の人顔見せて、「サア」と
いふ。その中一人が、「何んでも
六七でせうよ」といふ。「四十六
七にしては、お若いですネ」と感
嘆すると、その人あわて、兩手
で、押えるやうにして、「ッヨ、
冗談ぢやありません。可愛想に
…マダ三十六七ですよ」、サアし
まつた。

手拭の由來

鈴木勝海

(朝鮮鐵道會社)

手拭なるものは只今では手を拭く布巾
即ち御手富貴と言ふ事に社會一般がして
仕舞ひました。があれは元來手巾と言ふ
のが本當の名で元は頭巾の兄弟分であり
ます。頭巾即ち頭へ冠る日本在來の帽子
から發達したもので矢張り頭へ冠る事を
目的に出來たものであります。

御手富貴になつたのはズツと後世であ
ります。現今では私共の如き平民でさへ
シルクハットであらうが、陸軍大將のシ
ヤツポであらうが、冠らうと思へば冠れ
る世の中になりましたが、昔はどうして
入笠しかつたのです。深編笠、天蓋、
烏帽子、兜などといふシヤツポは支配階
級の獨占物で平民が冠れば先づ首が飛ぶ
と言ふ危険な代物でありました。

處がどうしたのか此の頭巾と言ふもの
は上下を通じて冠つたものであります。
萬事抜目のない平民が何時迄も此の頭巾

で満足して居る筈がありません。一つは
特權階級の不公平に對するバランスを取
るために、今一つは烏帽子や編笠に鼻を
明せるつもりで何時の間にか此の頭巾を
改良して仕舞ひました。

手巾即ち手拭なるものは斯うして發明
されたものであります。ですから手拭を
頭へ冠るといふ事は彼等に取つてどの位
有意義であり自慢になつたか知れませぬ
色々染め方や冠り方に就て苦心が拂はれ
従つて藝術的にも實用的にも極度の發達
を見たのは蓋し當然の事でありませぬ。

現今では市中に余り手拭を冠つたり鉢
巻をしたりする人々を見受けなくなりま
したが、一寸風の便りに聞く處に依りま
すと、警視廳令とかで差止めになつたと
かいふ事です。

嘘か本當か知りませんが苟くも世界の
一等國民ともあらう者が頼冠りや向ふ鉢
巻は外國人に對して見つともないといふ
理由ださうです。従つて江戸子の威勢の
いゝ魚屋が賣残りを冷蔵庫に貯へ鳥打ち
を冠つた馬方がバツトをバク／＼吸ふ様
になりました。手拭は舊式なハンケチと
いふ事になつて只手を拭くだけの事にな
りました。が之れも矢張り時代の變遷…
…致方も御座いませぬ。

餘儀なくして終る。

『そんなに忙しいのなら夜と日
曜も何とか出來たらうに…』
と言ふ人もあつたが、時適には十

裸業運ベン?

裸業運ベン?

柄澤 四郎

(京城新聞社)

どうせ徹底した避暑なんかは、
餘程、循り合のいゝ生れ方をした
者でない限りは、出来るものでな
い。とは考へてゐるが、矢張り夏
になれば暑し、汗も出る。二三日
間でも何處か涼しい處に海水浴に
でも。と言ふ者もあるが、貧乏關
なしの上に、些さか人間が不精に
出来てゐて『二三日や一週間ちや
詰らん……』と度我慢に落着く。

×
處が、お天當様の遣口は皮肉だ
こんな自惜味と無精で、つちあけ
た避暑否定論者に、暑さに構はず
餘分な仕事を、押付ける。些さか
『これでも貴様は度我慢を言ふか
……』といった懲戒に類する。
實を言へば、それとて暑くなら
ん裡に……と心懸よくポツ／＼仕
事を運ばせて置いたのなら、今さ
ら足許から鳥の立つやうに騒がず
濟んだのだらうが、これも結局、
無精者の崇りがさうさせた。

×
仕事と言へば、勿論原稿用紙と
睨み合ひと相場がきまつてゐやう
だからと言つて、餘分の仕事で
ある以上、毎週の新報の方は、書
く分量が減る譯でなし、他の連中
が家に歸つて種一つで、大平樂を
並べてゐる時間を、その仕事の方
に割愛するより仕方がない。然も
出来た時次第の催促なし、といつ
た旦那仕事なら兎も角だが、厭で
も應でも、菊版六百餘頁を此の秋

までに書き上げなくては追付かぬ
こんな工合で、今歳の夏は、汗
さへのんびり流してゐる譯にゆか
なくなつた。

×
それも、改めて汽車賃拂つて避
暑地に出懸けずとも、せめて涼し
さうな郊外で、自分の建てた住宅
の書齋にでも納つて遣るのだつた
ら『絶好の銷夏法です』と言へ
もしやう。が不幸にして六疊が一
間、而も居間に子供部屋に兼職の
方が却つて忙しい位の書齋が、唯
一の樂屋だけに、全く方廻しがつ
かぬ。

×
思案に餘つた揚句が、近所の下
宿屋に夏分で明き間のあるのを幸
ひ、晝間だけの約束で借りて、臨
時書齋の出張所を設けることにし
た。

×
下宿屋と言ひ乍ら、閑な時では
あり、晝間は誰も居ず、僅かな時
間でも机に向へば、妨げられ、煩
はされることはなし、存外、仕事
の能率は上る。

×
早朝から執筆労働に服し得るの
は、一週に一度乃至二度位なもの
で大抵の日は、成る可く社の方を
早仕舞ひにして歸つて来て、大抵
の者が、これから午睡でも遣らう
か、と言ふ頃から午後五時半乃至
六時頃迄、眞裸で遣り出す始末……
些さか言ひ方は變だが、今歳の夏
は裸業運ベンに精進することを

餘儀なくして終る。

『そんなに忙しいのなら夜と日
曜も何とか出来たらうに……』
と言ふ人もあつたが、時適には十
二時過ぎまでも遣つたこともある
が、毎夜、毎日曜とは第一に健康
上から續き兼ねた。

×
第一、自分の家に居る間だけは
出来るだけ職業意識を離れやうと
したので、夜と日曜は貴重な自分
の時間、ゆつくりする爲めに保留
した。

×
臨時書齋出張所を開設する程な
ら、随分、仕事の能率は上つたら
う、と言ふものもあるが、毎日朝
から遣り出せる譯ではなし、その
點は皆目判らぬが、或る日、妙に



油が乗つたので、午前九時から午
後五時半までに、勿論間で三十分
程は筆を擱いたが、兎も角、二十
字詰十行の原稿紙で六十三枚書い
たのが、今までの最高能率だつた
自分の創意にのみ委せて書くよ
りも、照合したり、参考材料と頼
引きで遣らなければならぬから、
書き上げる枚数は、時間の割合に
進み兼ねた。

×
種々と又句は言つてみるものゝ
夏になつたら出来るだけ暑い思を
しなくて済むのが一番結構に違ひ
なく、暑い時は仕事に精進して汗
を流す方が、却つて暑を忘れて銷

夏法になる、といふのは半分の理は存しても、四分の負惜味が絡んでゐる。

處で現代は、その負惜味の絡んだ餽夏法を遣りたくても、肝心の仕事が無くて困るんだから、一層暑苦しい世相になる。

それに較べたら、自分の裸業運ペンでも負惜味でなく感謝される流す汗も盡き果てたと思はれ、ペン執る指が硬直しさうになつた頃宅に歸つて風呂に飛込み、湯上りに引掛ける冷ビールの味は、確かに裸業に精進した者のみの解し得る醍醐味に近い。

◆四百を撞く

三木一彦

○旭町小林病院の院長平山義雄氏は、ツイ目と鼻との旭勝俱樂部の御常連だが、球は、四百を撞くといふので、同好から恐れられてゐる。

○ところで、この妻き天才は、近ごろ方向轉換をなし、大段辻氏に就て、將棋を習ひ出した。『平山さんのことだから、一年も経つたら、スグ四五段になるでせう』
○今度は、將棋黨がおそ毛を振つてゐる。

清凉里にて

角田芳子

(南米倉町)

清凉の里の草生にいこひつゝ、林の上に白雲を見る
打仰ぐ空はおほらか見はるかす青き稲田は雲の影ゆく
はちす葉の霧もかわきて啼くせみの聲のみ高し松の梢に
空の青稲田の青に清凉里小川の水のすみとほるかも
林より青き稲田をまろびつゝたもとに來り青あらしふく
故郷のうまし海山知らざればこよなきものに子は川に遊ぶ
はだかの子三人相より相わかれ水かけあそぶ聲をあげつゝ(五、八、一〇)

【四六】

菊池長風氏著

朝鮮雜記

全十卷完成
一冊壹圓半

五月下旬第一卷發行、以後三ヶ月毎に續卷配本

◆小唄阪訪問

綴 岡 生

○八月十日の晝ころ、小唄阪に岡村介石氏を訪ねてみた。

○年輩五十三四、風貌堂々……殊にその快辯には、スツカリ煙に巻かれてしまった。

○京城には、エライ人間がゐますな。

○二三の客人が歸ると、『まアお上り』といふので、書齋に通される。易談が出る。言々熱を帯びて来る。

○『ソコで』と介石氏は、襟を正して、『最近に易占したのぢやが』と、言葉を切つて、『どうも現内閣——濱口内閣は、近い中に面白くない日が來さうだ。私は、それを八月二十八日と斷ずる。君は、どう思ふ』

○いはれて、私は、何んとも返事出來ぬ。『ハヘー、左様で』とかしこまつてゐると、『たよりないネ君は……』聲、萬雷の如し。私はいよ／＼以つて縮み上る。

○『まアお茶でもお上り』で、蘇生の思ひ。やつとこゝろ、辭し歸つたが、兎に角介石といふ人は、一つの興味だ。と同時に、私は、その八月二十八日に、大きい好奇心をもつてゐる。サア／＼當るか八卦!、當らぬか八卦!

讀史漫錄(七)

參判・參議・正郎・佐郎の順であるから課等級のところである。故に村東亮は年輩と、小唄立といふ

讀史漫錄 (七)

中村榮孝

(朝鮮史編修會)

青春敬老會

東國輿地勝覽を見ると、江原道の江陵の風俗として、『青春敬老會』といふのが載せてある。江陵では、名節に値ふ毎に年七十以上の人を景勝の地に集め、宴會を催してこれを慰めるのである。判府事の趙奮といふ人が、この美俗に感心し、公用の米布の餘りを密附して泉貨といふものを立て、その經費を支辨する道を講じさせた。實とは米布や錢貨などを集め、これを基本にし、その利息を費用に充て、永く財源とする組織であるが、趙奮は、青年の勤勉實直な者を擧んでその出納を管理させ、宴會の費用にさせた。そしてこの青年が老人を慰安する會合を名づけて、青春敬老會といつた。その日には、召使などの身分の賤しいものまでも、苟も年齢七十歳に達したものでなければ皆な列席させたのである。

朝鮮では一般に敬老の風があるが、地方にその例を求める者は、古來必ず江陵の俗を擧げて賞揚するのを常とした。第十八世紀初頭(肅宗・英祖頃)の學者李瀾(號は星湖といふ)は、その著書説の中にこれについて言及し、大いにかゝる美俗は奨勵すべきであるといつてゐる。いまこの風は減びてしまつたが、土傳によると、壬辰役(文祿役)の後、再び行はれな

いやうになつたといつてゐる、これは由來不明な美事の衰廢を壬辰役に結びつける一例に過ぎない。

この外にも敬老會は多いであらうが、今水原郡の管内に屬する南陽でもこれがあつて、やはり貴賤を問はず、ただ年齢の高下で順序をつけてゐたといふ。

青春除拜

朝鮮では敬老の風を貴んだので青年にして榮達するものは極めて稀であつた。第十七世紀初め(宣祖・光海君の頃)の有名人學者李睟光(號は芝峰といふ)が、その著芝峰類說の中に面白く記事を遺してある。

芝峰の頃で最も年少にして承旨になつたのは朴東亮で、年二十五の時であつた。壬辰役で宣祖が兵を義州に避けた時に扈從して功勞があつたから、正郎から拔擢されて同副承旨になつたのである。承旨は、王命の出納を掌る承政院の官名で、都承旨・左承旨・右承旨・左副承旨・右副承旨・同副承旨各一員、注書二員、もし事變があれば假注書一員が加へられるのが定員である。王と直接政務に就て交渉するので承旨の地位は非常に重いものであつた。その資格は、いづれも正三品といふ高いものであるから、年少の人では中々任命されることのないものである。正郎は、六曹の官で正五品、判書・

心をもつてゐる。サア、當るか入封!、當らぬか入封!

參判・參議・正郎・佐郎の順であるから課長級のところである。故に朴東亮は年輩といひ地位といひ非常な拔擢といはねばならない。それから尹暉は、年三十で、司諫から同副承旨に陞つた。司諫は諫諍論駁を掌る司諫院の次官で從三品であるから、官位の順序は普通でもあらうが、年が若かつたのである。

次には、同じく宣祖甲午の年、(一五九四年、文祿役の翌々年)都承旨張雲翼が年三十四、左承旨吳億齡が年四十三、右承旨具晟年が年三十七、左副承旨姜燦が年三十八、同副承旨鄭光績が年四十四、著者李睟光は年三十二で右副承旨であつたので、當時の人々は、承政院は滿座皆な青春となつたといふ。平生かなりの年輩の人々がその地位を占めてゐたことを思はせるであらう。

序でに同じ芝峰類說に大臣の年輩について書いた一條がある。ただ李睟光の氣ついた所では、李朝で年少で大臣になつた者は、宣祖朝の朴淳・李山海・金應南が年五十で、柳成龍・李元翼が年四十九で、李恒福が四十三で、李德馨が年卅八でなつた例があるといつてゐる。また年老いてから大臣になつた者は沈守慶と李憲國とは俱に七十五であるが、これは近世稀なことだといふ。これらで大臣の普通の年輩は見當がつくであらうが時々青春除拜の例も朝鮮に於いて見ることの出来るのは悦ばしい。而もそれが大體有事の際であつたことは、李睟光の時代は壬辰役からついで滿洲に清の興起して種々問題の多かつた時であるのを見ても判かるであらう。

新東京素見雜記

天野利武

(藏大法文學部)

【四八】

出をなつかしみもするのである。但し、龍宮城の上を遊ぎまはる大きなすいきを見て、あらひにしたらうまからうと考へるだけ昔ほど單純ではなくなつたと懺歎もしたが、このすいきやつぼんの頭の上に、食欲を離れた、エロテイズム汪淫のカシーノウ(娛樂館)があらうとは……げに淺草といふ處は不思議な處ではある。

何うして此んなになつて來たらうと思ふ。此んな風でもいゝのだからかと思ふ。何かしらしつかりとしたものが缺けてゐる様な、不安な氣持ちがする。あの夥しいカフェーとして麻雀俱樂部。だが、この恐るべき精力と時間の浪費と深刻な不景氣との因果關係を追求するのは、余りに非尖端的なせんさくであるかも知れぬ。

○ 久し振りで渡る永代橋の頼もしさ。新東京の新橋梁と新道路。之だけは、十年前の東京の道と橋とを知るものに爽やかな喜びを感じさせずにはおかない。しかし、七錢拂つて乗込んだ川蒸氣船の昔ながらの姿は何うだらう。現代的なすばらしい數々の橋と、その下をくぐる原始的な蒸氣船と、何と不敵な不調和ではないかといひ度くなる。都市の全体的美的調和を保つことに都會人がもつと協力しなければ駄目だ。七錢が十錢になつてもいかに少しすつきりした船を浮べたいものだ。

○ 神田に骸骨の幽霊が出る家があつて、大した騒ぎだと朝日の三面に出た。その邊を管轄してゐるM署の署長が舊友であつたので、調べさして貰はうと思つて相談に行つた處が、下らないからよせと云ふ。聞いて見ると信心家の幻覺と知れた。しかし、それだけのこと

に大騒ぎする野次馬根性と、屈竟の夏物とばかり見逃さないジャーナリズムの抜目なさには、流石東京と感心させられた。

◆廊下風聞記

三木一彦

○ 齒科醫專の柳樂校長は、お嬢さんは三人あるが、坊ちゃんは、一人もない。『坊主(男)も、一人位は悪くない……』

○ ところで、同校の先生達、敢て校長の方針を遵奉するといふワケぢやないが、誰も彼も、出来る子が女ばかり。『オイ、どうも奇體ぢやネー』、『ウン……ヤに先例ばかり追隨して……』

○ 校長激勵して曰く、『どうも諸君は、創造力が足らん……それ藝術の第一義は、模倣でなくて……』

○ 東京で生れて東京で一人前にしつて貰ひ、其上年に一度は東京の埃を浴びに行つてゐるから、之でも立派な江戸つ子だと自惚てる奴があつたら、須田町の交叉點に放り出して連雀町の藪を探せといつてやれ等と我身に云ひきかせてゐる中に幸すしの前に來て仕舞つた。實はその前に、萬世橋の驛の車屋に藪は何處へ行つたと聞いたたら、『何處へも行きやしねえ』と叱られたのである。但し幸すしは震災前の方がうまかつた様だ。半年東京を去つたら田舎者だと諦めはしたものの、焼けない前の東京の方があじがあつたと負惜みならぬ懐しさを覺える。

○ いやな言葉だが尖端的な新東京尖端的な東京人なるものを見ると

人間の感情は氣儘なものだ。舊東京を代表して唯獨りのそりと横はつてゐるはげちよろけた新大橋を見てゐると不調和を超越して微笑ましくなるではないか。だからこそ、吾妻橋から上ると直ぐ六區の水族館に飛び込んで人影稀れなるに驚きもし、古い少年時代の思

英語でマンエーター即ち食人魚ともいひます。性甚だ猛烈且食を索むること極めて貪慾で腐つた肉で

いやな言葉だが尖端的な新東京
尖端的な東京人なるものを見ると

の水族館に飛び込んで人影稀れな
るに驚きもし、古い少年時代の思

藝術の第一義は、模倣でなくて…
」

洋上閑話 (一)

松崎嘉雄

(通信局海事課)

海の姿は天気清明にして風の無い日は誠に油を流した様に見渡す限り漂渺として大きな鯨を始め多数の魚類又は海藻を保存して恰も平和の女神その者の如き姿である然るに一朝大風の襲来するや狂瀾怒濤、岩を噛み船を覆し或は津浪となつて陸上に迄大損害を興ふるなど大自然の偉力を極度に發揮し恰も魔神その者の姿を現はすのである。即ち海の姿程千變萬化するものはありません。四季、朝、晝、晩、三百六十五日變化を恣にして居る。そしてその變化の主たる原因は風の程度に由るのであります私は之から二つの極端なる場合即ち風の全く無いときと海と大颶風のとぎの海とに就いて所感を述べて見たいと思ふのであります。

昨今は暑さが非常に厳しいので各地に於て水泳が盛んであります。此の水泳中に鯨に襲はれました例は澤山ありまして、其の一例は數年前岩田といふ水泳家がたしか博多から釜山迄約二十海里即ち陸の里數で約六十里を泳ぎ切るといふ頗る爽快なる企て中偉大な鯨に襲はれたといふ事實が當時の新聞を賑はしたことがありました。此博多、釜山間には洋々たる支海嶼と對馬海峽とが横はつて居ります。そして臺灣の方から流れて参ります處の黒潮即ち暖流が九州の西方に於て一支流を分ち、此支流九州の沿岸を北上しまして此

對馬海峽に入つて参りますが流速の最も速いところで約二海里、鯨は好んで此暖流に游泳するものであります。夫の紺碧に澄む對馬海峽の海中には多数の鯨が横行して居るのであります。故に岩田の此横斷計畫は誠に大和民族有史以來の一大快挙でありまして實に男性的冒險であつたのであります。そして彼が悠々此の大海に飛込んで悠々として其の壯舉に就きました

たが途中で自分の身の丈けよりも長い大きな鯨が眞白い腹を示しながら恰も大砲の丸の様な勢で彼の腹の下を通過したのである。此の鯨は口が腹の近くにあるので白い腹を現はして襲来するときは即ち敵に噛付くとの姿勢でありまして此の時は既に危険の切迫した時であつたのであります。誠に身の毛の上たつやうな恐ろしい状態であつたのであります。幸ひ彼は護衛の船に急に飛び上つて仕舞つたので漸く一命を拾つたわけであり

ます。鯨は鯨類に屬して居りますが、此の鯨の種類は二十種類以上もありますが、此の暖流に游泳する鯨の中層は猛性の鯨が多いのであります。私は此の猛な鯨を釣つた實際を話しましやう。此の鯨は熱帯地の海洋に棲んで居ると言はれますが、時としては食餌を求めて沿海に來襲し、又は港灣にも入つて來る事があります

英語でマンエーター即ち食人魚ともいひます。性甚だ猛烈且食を索むること極めて貪慾で腐つた肉でも何でも構はず噛みつくのである。丁度陸上では獅子が百獸の王と言はるゝ如く、鯨は海中に於ける百魚の王と言はるゝ位置を占めて、他の魚類から恐れられてゐる。私は熱帯地方を帆船で航海して居つた際、無風帯に入つた事があります。帆船が無風帯に入ると幾日も総べての帆が垂直に下つて進航が出来ない。一箇所にブラ／＼して居る。こういふ時に限つて鯨が船の側にやつて來る。故に海員は之を鯨日和といつてゐる。此の時が一番海員の無聊を感じる時である。幸ひなることには此の時八九尺の大きな鯨が水面上に鯨の齒の様な鋭い背鰭を出して極めて靜かに恰も大蛇の如くうねりながら船を目掛けて泳いで來る。之が海員の唯一の慰樂となる。一般に其脊の色は薄茶であるが熱帯特有の澄んだ海水に反映して毒々しい光澤を示してゐる。此の鯨襲來の光景は誠に物凄く底氣味の悪いものである。即ち足裏のムヅ痒い恐ろしさを覺ゆる。熱帯の海上に休止の状態にある船から乗組員の食後の残飯が海中に棄てられるので大小多数の魚族が船の周囲に集る。その魚族を見掛けて鯨がやつて來る。そうすると多くの小魚は驚き恐れ逃げて迷ふのである。或時は數匹の鯨に挟撃せられ逃げ場を失つて海面に飛び上るものもある。但し彼は他の魚類に較べて動作が遅鈍なので、餌物が十分得られないと見え、常に空腹を感じてゐるのである。船から捨て、やる何物にでも噛み付く。早朝船の艙即ち船のある處を俯して見るを數匹の鯨

が船の前方より流れて来る新聞紙でも罫語の空罫でも囁付く、そして海中深く何物かを見付けて追つ駆け一時姿を没するも間もなく海中からゆらりと海面に浮揚し来る光景は更に凄みを加へる。私は仲間と此の罫を釣るべく秤の鉤の様な大きな釣針にロープを結んで釣糸となし、針には牛肉の大塊を付けて海中に投じた。そうすると彼罫は遙か遠方から之を見付けて悠揚として忽ち進撃して来た。茲に面白いことには彼の前面には數匹の魚が必ず先登を切つて来る事である。之を水先魚と稱して居る。其の長さ一尺乃至二尺位で恰も東北地方の川に棲む山女に似た又は鮎に似た優美な姿の魚である。即ち萌黄色の細長い體に暗緑色の縞が幾條も奇麗に列んで居る。彼等は常に罫の鼻先の附近に游泳して餌に向つて尖端を切るのである。又罫は此等の水先魚をオトリとして他の魚類を誘惑して獲物を釣寄せる作用を爲すとも言はれて居る一面又水先魚は其の頭部にある小判形の吸盤を利用して罫の腹部に密着して海洋を旅行することもある。即ち彼等は互に此の大海の眞只中に於て共存共榮を營んで居るわけである。かくて彼水先魚は我等の牛肉に向つて突進して来て肉をツツキ始めた。恰も王者の露拂の形である。大きな罫は其の後から茶色の脊を躍らしてやつて来たそして此王者が近付くと見るや、水先魚は一齊に牛肉を離れた。彼罫は最初牛肉の周圍を用心深く一周した。そして俄然銀色の腹を翻して大きな赤い舌を開いて牛肉に囁付いた。それは前にも述べた通り彼の口は腹に近い方についてゐるので、餌に囁付く時は勢ひ仰向

きとならざるを得ないからであるそして其の齒は薄く鋭く眞白で誠に薄氣味の悪い程奇麗な齒並を有してゐる。我等は最初釣糸を海上に投ずる際、揚貨機の滑車を利用したので、罫が牛肉に囁付くや否や、リーダーの呼令一下十數人の野次馬が一齊に甲板を走つて此釣糸を引いた。處が偉大なる罫が此の瞬間跳躍一番自らの頸を破つて海底深く消え去つた。我等は續いて襲來し來れる他の一匹に向つて第二の牛肉を投じた。そして彼が例の調子で之に囁付いたとき、今回は急に引上ぐることを止め、暫時彼が行動に徒つて釣糸を伸縮しつゝ巧に之を船側に導き寄せ、更に他のロープを適當なる輪に作り、即ち俗にシッコクシとなして之を水面に卸し彼の偉大なる胴に

【五〇】

挿入して此のロープを以て引上げ遂に成功した。然し彼は憤然として怒り、白い大きな鋭い齒を露いて甲板上を躍り廻り容易に人の近寄ることを許さない。止むを得ず揚貨機に釣り下げた罫、丸太を以て力任せに之を叩き、果ては彼が怒りて開く口に此の丸太を突き入れ數回衝撃を與ふることに依りて流石の海洋の王者も閉口した。そこで初めて甲板上に彼が偉軀を横え其の頸を鋭利なナイフで切斷して什舞つた。然るに驚くべし彼は身二ツに拘らず其の頭部は尙暫くは動いてゐた。丁度ウナギの頸を切つたときと同じ様に。それから其の腹を割いて見た處、一尺餘の白骨が腹中から出たので一同戦慄を催したのである。

(以下次號)

◆紅茶の匂ひ

北漢山人

○殖銀の守屋さんが今もつて獨身であることは、知る人々に氣をもませる。

○「いゝのがあるが、どうだネ」、『僕の先輩のお嬢さんだ。今年十八!、少し若過ぎるかも知れんが、その代り容貌は満點だ。オイどうする』、『實は、五萬圓ほど持つてゐるんだ。そつくり持つて來るといふ。本人は二十七、何々容貌か……容貌は、水谷八重子をモ一ツ嚙きをかけたやうな麗人さ何とかよい返事をしてくれ給へ』

○されど、三國一は、『ウ、ウーン』とばかり、少しも要領を得させない。

○その中、候補者は、もう決つ

てゐる。チャンと東京で、見合ひまで執行済といふ噂。相手は、何者だ?と、一同眼を輝かす。

○某縣の多額納税者のお嬢さん女大出身、齡二十三歳、容色絶世……と報告される。

○それが、今年の二月頃……が今以つて朝鮮入りも何んにもない格別ニコツとした三國一のお顔も拜さない。

○本事業は、考へれば考へるほど神經衰弱に値する……とは、某氏の腕を組んでのヤキモキ談。

今村嗣氏 著

朝鮮漫談

(本社にて取次)

旅より旅に

類に緩く、之は又悪い方での天下一品、甚だしき艶消しに御座候。汽車三時間を要して十一時半身

り彼の口は腹に近い方についてあるので、餌に噛付く時は勢ひ仰向

させない。○その中、候補者は、もう決つ

旅より旅に

長谷井市松

(朝鮮銀行)

身延詣で

昨夜深更(午前一時)富士驛下車、今更ようとする宿の女中に起きて貰つて、やつと投宿鹿島館とか申し、此地一流の旅館に候。

驛を出づる時、兩三滴の雨を迎え、寝に就て後蕭々涼々の雨聲を聞きしが、今朝は全く霽れて、朝嗽閃々山類に横射し、刻露清秀氣象萬千の感あり、八時五十八分發にて之より身延の靈地を訪ふつものに候。

驛頭驛を天外に放てば、富士は上半身を雲表に現はし、而かも八合目あたり迄は大雪溪を畫き居り中央は白霧蓬々として抹殺し去り下方嶺野のあたり鮮綠色に輝き、我等がために最大の祝福を送るが如く相見え居候。斯くて愈々今次の行の最後の頁を飾るべく旅立ち可申候(五、二四、朝富士驛にて身延行の汽車を待つ間に)

○ 車中善男善女の講中二十餘人連れの一団あり、聊喧擾に過ぐるも些の寂寥を感じしめず、其初め左方に招くが如く相見え候富士は、いつの間にか、右方に廻りて微笑み居候。

余が隣席に洋装の一老紳士あり頻りに佛教を論じ、釋尊を講す、曰く釋迦は天才にあらずして修養の人なり、従て佛教は天才の學にあらずして眞個修養の學なり、而

も佛教の眞髓たるあらゆる科學、藝術、哲學、宗教を抱擁し、あらゆる學理と一致すなど、頻りに氣焰を揚げ居り、相手方は四十二三の温厚寡黙の人柄、唯々諾々として聽聞致居候、何れにしても身延詣でには有縁の法論、此人大宮驛に到つて下車致し候、果して如何なる種類の人物に候べきや。

○ 今迄右に左に我等と平衡致し來り候富士も、いつしか煙雲漠々の中に没し去りて、車は平凡な山と山との間を、而も悠々として馳せゆく。貧しい村落が點在する、車中一老人の物知り顔に、コレが日本三急流の一なる、富士川だなどと語り居候へ共、昨保津川の絶勝を探りたる小生には、此間の風光は一語單調にして平凡と申すより外なく、十島驛以降靜岡縣が、山梨縣に轉移すれども、汽車は相も變らず牛の様に、ノロイことに御座候。(一〇、五〇分)

○ 今回の旅程到る所に、好風景を一時に満喫したるが故に、本日の行の如き必ずしも單調にあらず、必ずしも平凡と稱する能はざるべきも、唯何となく物足らぬ感有之連日鯛や鱸の洗ひを飽喫致候あとに、鱈か鱈の煮付位を食へさせられた様な心地致し、聊閉口の爲體而も此汽車徒らに料金の高きに過ぎて、車體は至極粗惡、速力は無

類に緩く、之は又悪い方での天下一品、甚だしき艶消しに御座候。汽車三時間を要して十一時半身延驛着(往復賃金三、四〇)乗合自動車に搭じて、日本第一の釣橋と稱せらるゝ一大鐵橋を渡り、戸數三百かなり股賑な身延の町を通つて、正十二時所謂身延の山門下に到達致し申候(自動車賃四十錢橋賃一〇錢)

○ 壯大なる仁王門をくゞりて、老杉千古に盤在する棧道を上り、更に本院に詣で申候。此間石階五丁ばかり、中央鐵鎖を通じて昇降に便す、右に當山開基大壇越波木井實長の木像を安置致居り、之より右方更に一坂の導くあり、道本院に通じ居候。

○ 偶ま密樹に聲々の大瑠璃鳥を聞く、溪水之に和して頻りに長廣舌を振り居り、一境の幽趣初めて味ふに堪えたり、其初め心に聊不満足を感じたりし我の、今や此靈驗の地に入りて、自ら襟を正すの思を感じ居候。

○ 山徑を上り盡して本院を望みつゝ、ソコのベンチに腰うちをろして汗拭ひ居候に、何處より飛び來り候にや、全身濃緑、嘴足紅色の佛法僧鳥の頭上老杉の梢頭に、兩三聲の奇聲を弄し候らひしは、何の因縁に候ぞや。

○ 由來佛法鳥は靈現の地にのみ住し居り、紀州高野は其尤多き處と稱せられ候も、近時木曾福島にて營巢育雛したる實例あり、曾ては友人某の上州迦葉山にありて、屢々佛法僧を聞く、一度來りて聽かずやと慫慂せられたることあり、余の此鳥の法音に接せんことは、年來の宿願にて候らひしに、今端

なくも此隨喜渴仰の念願を果すことを得、歡喜勇躍の状盡し難く候之れはた身延參拜の一靈驗にも候べくや。

○ 抑身延に詣づるには、之より上り二十五丁と稱する、奥の院に參し、更に海拔五千七百尺と云ふ七面山を攀ぢて、始めて身延全山を極め、眞個靈現の地を踏みたりと云ふを得べきも、此行既に時を簞さず、止むなく踵を返して下山に決し申候。只幸に汽車發するに猶二三時の餘裕あり、仍て寶物殿に入りて拜觀、中に日辰上人身延山中精林の記あり、一讀面白く感じ候まゝ、一筆摘録仕り候。
山は廣漠にして周匝十三里と云

◆無駄ばなし

北 漢 山 人

○土地信託の末森氏は、『今の若いものは、トント尻のたしにもならん』と、空嘯いてゐる。

○時々算盤をとつて、『さア俺と速算の競争しやう』、ところが氏の算盤と來ては、指頭神あるものゝ如く、いかなる人間も、向ふに立てるワケでない。

○若殿原がおぞ毛を振つてゐると、『なら、拙者は暗算で行く。貴公達は、算盤で來なさい』——その暗算がまた、恐ろしいほどの正確さ、神速さ。若殿原グワともいふものがない。

○先生涼しい顔! 『何んならウン……相撲でもいゝよ』、この方は、柔道二段だから、いよく以て物騒。

ひ來れり、七面山ともには是れに増なるべし、宗祖の眞骨を奉安置、日本國中の知恩報恩の者は御利生に預る靈場なり。松柏杉檜の大木、諸堂伽藍を圍して園林雲を吐き、高山日月を頂き、誠に眞の靈山、事の寂光は諸國參詣の者も目を驚かし、信心肝に銘するばかりなり云々山坂下り盡して仁王門の前に來り姑し振り返つて眺め候に、青鸞重疊、古木蒼蒼、奇鳥類りに奇聲を弄し、溪聲幽かに寂淨を傳へ、法音胸に沁み亘るかと怪しまれ候、行くく身延渡木井兩川に沿ふて河鹿の聲に送られつゝ、徒歩一里半身延の驛に歸者致候。

○一同小聲でボヤいて曰く、『チヨツ……おやぢめ! 實に穢ぢやノウ』

○本年七月南鮮地方一帶並に九州、中國方面を襲つた大風水害は近年稀に見るひどいものであつた

○岡村介石氏は、それを月初めに豫占し、自家の前に戸板を持出し、それへ張紙して大書して曰く
暴風雨豫言
本月十八日より廿五日迄に優勢な颱風襲來し、内鮮を通じて被害甚大の前兆あり、特に海陸の警戒を望む。

○ところが、下旬になると、果然やつて來た。豫想以上の大物がやつて來た。その慘禍は、實にヒ

【五二】

姑く姿を隠して居た富士が、又歸りには上半身をみせて微笑み居候、何等の幸福に候べき。富士よ君との會見も之で姑く終り告げよう、御無事であれよ! かく心に叫び申候。

さて私は今次の旅程に於て、途上諸所にダリヤの花の咲き初め候を見るにつけて、吁我田園のダリヤも、今や主なくして寂しく咲ひて居るだらう、斯う思ふと歸心矢の如きものあり、而も一抹の哀愁我胸を巡り申候。噓十日の旅よ! 絶勝の巡遊よ! 私は今ソレを無事に果し終えたことの悦びを喜ぶ念が一人に御座候。(五、三〇、富士驛への車中にて)

ドかつた、

○介石氏兩手で頭を押えて『サアしまつた!、また的中した!』

○夫人をばから責めて曰く『易さへ見なければこんなことにはならないのよ。氣味の悪い人ネ』、小唄阪スツカリ嫌はれてしまひました。

○山口均四郎氏は、京城の辯護士中、最も痛快味に富んだ先生であります。

○或る日その山口氏を訪ふて、『奥様がお書きになるでせう。今日日は、一ツ奥様にお願ひしたいんです』、スルト何んと、山口氏の返事が、『君ツ、山の神に字なんか書けるもんかイ。アーン、僕ではどうだ』

○ヒヤツとした。お次ぎには、たしかに奥様が居られると直感してゐた私け……。

失敗を語る

の停車場で私の隨行すべき管の大人が微笑みながら『ヤアー』といつて私の迎に出て來て居られたの

方は、柔道二段だから、いよく
以て物騒。

然やつて来た。豫想以上の大物が
やつて来た。その惨禍は、實にヒ

たしかに興味が居られると直感し
てみた私は……。

失敗を語る

菊山 嘉男

(總督府會計課)

雑筆社の高橋君が見えて何か失敗談をものしてくれとの御注文、失敗談なら山程あるがさてどれを撰び出すべきか。

あんまり深刻すぎるやつ、まだ時効にかゝらないやつ、人様の御迷惑になる虞を多分に持つやつ、職務上差し障りのあるやつ等を除くとするとまるで蟬のめけがら然たるを免れ得ない。しかず事は聊か舊聞に屬するが旅行失敗談の中極くアツサリした所一二を御紹介致さんには。

先づアメリカから始まる。紐育滞在中の或一日、日本から遙々隨行の格で同行し奉つた某大人がニュー・オリーンスの見物につれていつてやらうと仰つしやる。但しその大人は一日早く出發途中華盛頓で用をすまし翌日の午後八時華盛頓發の汽車で落ち合ふ約束をきめた。

紐育、華盛頓間ではあるがアメリカ上陸以來一人で旅行するのは初めてである、用心のため少しく早く出發しやうと考へてゐる處へ丁度久方ぶりの友人の來訪ありホテルから停車場までは自動車で十五分位と思ふが念の爲に三十分と見てそれまで話して行かうぢやないかといふので時計を前に置いて四方山の話に打ち興じ驛まで見送つてくれるといふ友人を無理に斷つて悠々停車場に向つた。

二十分もたつたのに中々停車場らしい處へ出ない、時刻は用捨なく進む、獨り車の中で氣をもみもみ汽車に乗るのだから早くくと幾度か運轉手をせきたてる。

その中だん／＼驛の近くになつたものと見え賑かにもなるし見覚えのある建物等も見えて来た。然しどうでせうこうなつて来ると殆んど辻毎に交通巡查が立つてゐて一一その整理をうける。もうほんの近くに停車場の建物を見ながら自動車走つてゐる時間よりも交通整理のためとまらされてゐる時間の方がよほど長いといふ始末平素はたゞ交通整理の手際にもむしろ感心させられてのみ居つた吾輩もこうなつては聊か氣がイラ／＼する。最後の整理線を突破して停車場の車寄せに着いたときは發車時間をすぎる事正に一分。それでもアメリカの汽車は時々大分遅れる事があるのだからなんと負け惜しみを唯一の頼りとして一散に改札口に駆けつけつては見たものゝ生憎始發驛のことゝてそうは問屋がおろしてくれず結局自分が汗をかいたのと周囲の人達が妙な目をして見てゐるのが頭に残つたゞけであつた。

これを如何にして華盛頓で首を長くして待つて居られる大人に知らしめたかは諸君の御想像にまかせるとして翌朝ニューオリーン

の停車場で私の隨行すべき筈の大人が微笑みながら「ヤアー」といつて私の迎へに出て来て居られたのは聊か恐縮した事だけを自白して置く。

倫敦の變のひどくして不愉快なことは有名なものであり此の季節は同地の所謂有産階級は競つて南歐其の他比較的快適なる地方に避難し旅行者の如きも己むなき用件を有するものゝ外は此の季節を避くることは話には十分聞かされてゐたが私は倫敦のクリスマスマスの状況を見ると共に世に有名なる倫敦のフォッグとは果して如何なるものなりや体験するも亦一興と平素の茶目氣も多分に手傳つて歐羅巴大陸の旅から再度倫敦の人となつたのは其歳も將に暮れなんとする十二月廿日過の夜であつた。

何はともかく此の頃新に倫敦入りをされた井上さんや矢島さんの様子を見て来てやらうといふので晚餐をすまずと直に家を出た。出るときはまだ八時すぎで町の様子にも別に變つた所もなく勿論フォッグのこと等に付ては何の考もなしにたゞ友人なつかしの一念のみでその上に私の宿から三、四町しか離れてゐないときいては矢も盾もたまらず駆けつけたのであつた故國戀し友人なつかしの情の外久しぶり無遠慮に語り得る機會を得たことに陶醉して尻を上げたのは夜中の十二時に近かつた。

何の氣もなしにドアをあけて見ると何時の間に忍び寄つたか外は一面のフォッグ、大分ひどそうだから泊つていつたらどうかと井上さんはいつてくれる。然しどうせ三、四町しか離れてゐないのだし兩君にした所でもまだ二日前からこゝに落ちついたゞけである上

もう宿の人達もみんな寝しつまつたとき突然泊つて行くといひ出すのも余り氣の毒ではあり、なあに大したこともなからうと高を括つて後ろにドア一の錠をおろす音をきながら表へとび出した。

勢に乗じて飛び出しては見たものの、さて困つた、一寸先は暗といふ言葉があるが一寸先どころの騒ぎではない自分で自分の指先瓜先すら見ることが出来ない。兩側の家の恰好は勿論のこと辻々に立つて居る電燈の火さへたゞボーツとしてゐるだけでその笠に書いてある文字は無論なんにも讀めない。折角目印にしてある角の三階家なんて勿論なんにも分らない。況や門柱に大きな白字で書いてある町名番地の如きこうなつては何の役にも立たない。方角の立て様がない。角の廻りを一つ間違つたら最後益々深く迷ひ込むばかりでどうしても元の所へ出て来ない。勿論店の開いてゐるのなんぞはない。すべての地上トラヒックはとまる案内を知つてゐるであらう所の自動車にも乗れない。それでも時々歩いてゐる人には出くわす。シメタあいつに聽いてやらうと思つてゐるとあへこべにいせき切つて先方からしきりに何かきかれる。こちらが外國人で今道に迷つてゐる最中なんてことは勿論わかり様がない。先方も御多分にもれない迷い手だ。こんな先生に何をきいたつて馬鹿を見るだけだ。觀念の脚をきめて亦さぐり歩きを初める時はだん／＼と、迷ひ初めてからもうかれこれ二三時間もたつたかと思はれるけれども無論時計など見る由もない。文字通り暗中横索をつゞけそれでもやつと自分の宿らしい所に出た。然しもう夜の

三時頃である。いかつに違つた家の戸でもがたつかせてはどんな目に遭ふかもしれない。ためつすがめつ家の番號に見入り家の恰好を窺ひ大體大丈夫と見て鍵を出してガチャリとやる。都合よく開く。その時のホットした氣分は昔小學校時代先生につれられて初めて大阪へ修學旅行に行き夜自分の宿の名もきかずに夢中で外に飛び出し歸るとなつてまごつき、とゞお廻りさんの御世話で宿につれて歸つてもらつたとき以來のホットであつた。

訪問覚え帳

むらさき

「大村です。何か御用ですか」
「いえ。大變御無沙汰してゐますので社の先生が御詫びかたがた御目にかかつて来るやうにおつしやいましたので……」
「ハハ……さうですか。よく見えておいて下さい。何處で會つても忘れないやうにネ」
會議所で……大村書記長と初めてお目に懸つた時。

彌生會句集

松原の中の天幕や南風	鈴木日穂子
蟻の道桶の浮き根を漕りけり	北川左人
喜雨の戸に母の待つなる歸省哉	安達綠童
日盛の道失へる蟻一つ	河村素庵
歸省子に大なる西瓜切られけり	本田白露
たまりたる羽蟻の疊掃きにけり	入澤禾生
南風や歩廊に並ぶ視察團	檀野正人
岩清水出る緑陰に憩ひけり	桑原蒼花
南風や泳かぬ人のほつれ髪	丹馬玄浪
石段を登り登りて蟻の列	高木好夢
山莊や大蟻這へる青壘	大藤波天
緑陰の彼方は廣き芝生かな	富田四露
雨後の日のカン／＼照るや蟻の列	藤黄申
仙人掌の花吹きわたる雨かな	無
花げしのほぐるゝ風や椽の蟻	古賀隼人
拓け行く赤土原や蟻の塔	西崎梧朗
歸省子の朝鮮服を着てゐたり	福島尙古
掃きしあと新に出來し蟻の道	石田周山
南風や入道雲の現はれぬ	吉利陽村
南風に池の小舟の向きかへぬ	浅生風雨
歸省して古き硯を洗ひけり	山内九華

九月一日の思ひ出

私も尤と思ひまして主人の意に反し暫く滞まることに致しまして、八月も過ぎ

九月一日の思ひ出

大和田よね

(大和田町二丁目)

案をつづけそれでもやつと自分の宿らしい所に出た。然しもう夜の

私は大正十二年の春主人の實母の病氣危篤の報に接しまして、主人の後を追ふて當時五才の長男と二才の長女を伴ひ支海を越え二晝夜ぶつ通して東京に歸りました。母は惜しくも孫達の顔見たいばかりに待つて居たかの如く着いた翌朝——夜明方に何の苦しみもなく六十九歳を一期として永眠し不歸の客とはなりました。

主人は葬儀萬端を済ませまして二七日の法事を行ふてから間もなく京城に歸任し、私達母子三人は家事の整理の關係もあり旁々二三ヶ月残ることとなつたのでした。

そして私は幼児二人を相手に、兄(獨身)と共に淋しく目を透つて居ります内にまだ半歳も経たぬ長女が百日咳に冒されその咳が高潮に達した頃運悪く肺炎を併發し、兄と共に看護に盡しましたが、京城に居ります時に丸々と肥へて丈夫であつたその子が日に日に衰える一方で病氣は昂進し、主治醫であつた小兒科の權威として知られた瀬川博士も保證は出來ぬ、只心臟が一ツ頼りだと宣言せられました。私共兄妹は全く氣が氣でなかつたのです。斯くして一週間計りを経過しました。處が神の守護?天命の盡きざるどころでありませうか?熱は漸く低下しやつと死線を越え得たかの感じになりました。少しは愁眉を開きました。そして博士も言はれました。

肺炎の方は心臟が強かつた關係で危険圏内を脱したが百日咳と兩方で極度に衰弱して居るから餘程注意して保養回復に努めぬと或は更に餘病再發せぬとも限らぬ。

と御注意がありました。全く一見して衰弱は酷かつたのです。骨と皮丈の屍の様な小さな體が微かな呼吸に依つてのみ生きて居ることを感知せしむる位でした。私も主人が居りましたなら夫迄氣を痛めませんでした。主人が任地にあるので随分と心配を致しました。

それで一生懸命病後の回復の日も早いやうと努めました。恰度此年は今年と同様暑さが酷しくて病後の長女はあせもに苦しめられ妙々しく回復の兆も見えませぬので、七月も過ぎ八月の半になりました。主人からは家の方は兄一人では致方がないから親友のOさんに居て貰ふ様にし家財を整理し八月二十五日頃迄に渡鮮する様にとの手紙が参りましたので、Oさんにお願し八月二十五日に引移つて貰ひました。

私も一日も早く渡鮮したい事は山々でしたけれども長女の病後の回復が思ふ様ではありませんでした。と、友人の方々より此の酷い暑さに病後の子供を抱へ更に長男迄連れての長途の旅は無理だから少し涼しくなつてからにした方がよいと勧めて呉れましたので、

私も尤と思ひまして主人の意に反し暫く滞まることに致しまして、八月も過ぎ

九月一日とはなりました。此日は思ひ出すに身の毛も慄つおそろしき日、また一面無上の感謝の日として一生忘れよふとして忘れ得ない日にならうとは神ならぬ身の何等の豫感だになかつたのであります。

恰度此日は土曜日でした(私共の住居は前に申しませぬでしたが神田の駿河臺南伊賀町八番地で戸田伯爵邸正門前左側でありました今は戸田邸跡は中央大學になつて居ります)

兄は常日の如く四谷の銀行に出勤しOさんもお勤めに出られ、後には私とOさんの奥さんと子供とでありましたが、晝食の仕度も終へ最早十二時近くならうとする頃、迎も大きな地鳴と共に突然家中がクラクラと揺れました。餘りに恐ろしい地震なので茫然として子供二人を抱へ狼狽致したのでした。そして棚のものは皆落下し屋外は瓦は飛び、上下の揺れ様が横揺れとなり歩行も出来ませぬので暫く疊に伏して居りました。Oさんの奥さんは露所のコンクリートに座つた儘動きませんでした。その中近所が騒がしくなり皆家を飛出しますので間斷のない震動と互や壁の飛散する危険を冒し腹這ひながら子供を一人づつ抱えてやつと戸田さんのお庭に逃れました私共も他の人達も眞逆あのやうなおそろしい結果にならうとは考へることが出来ませんでした。戸田さんの方々も廣い庭に天幕を張つて下さいまして其内止むであらうから止む迄此所に居れば大丈夫ですと云ふて下さいました。御近所

の方々もさう信じて居られました。處が地揺れが益々斷續して甚しくなり何時止むとも見へませんので不安と恐怖に脅えて居ります。處に續々避難の人達が邸門に這入つて参りまして家が崩れたことや淺草本所が大火事で燃えて居ることなど探へる様な話に、愈々不安で居ります。午後一時三十分頃です。下谷の病院の看護婦の一隊が續々患者を擔架に乗せ正門から戸田さんの邸内に這入つて参り、最初は私達近所の少數の避難場所であつた所の戸田邸内の何百坪の庭が既に雑沓を來す程、多勢になりました。そして看護婦の一隊は勿論火に追はれて此處に來たのでありません。

斯うして居ます。午後二時頃であつたで御座います。上野廣小路から外神田同朋町が焼けた其勢で須田町から小川町が危険だ、此處も危険だ皆逃げろ！と消防手の人や男達が告げまして煉瓦塀を打ち抜き千何百人かの避難者をどしどし出しました。

私共四人も他に行かねばならなくなり前後も忘れて戸田邸を逃れまして本郷の高臺の方に行かうと思ひました。御茶の水橋が落ちたと聞き、方向を變じて人波に揉まれ乍ら小川町に出ましたが、此時は既に火の手が廻はつて其處彼處と焼けて居りますので自轉車や荷車や人力車で荷物を運ぶ人、老人や子供を背負ふて逃げる人で右往左往實に危険でしたが、私共も長女はOさんの奥さんが負ひ私は長男を通れ火焔と暑さで焼ける様な中を小川町停留場を過ぎて神田橋へと漸く迎り付き、此處は火災もありませんので停電で乗てられるある電車の中で聴きふと中に入

りました。處がまた此所も危いと怒鳴られ神田橋を渡つて大手町に出て幾度も場所を變へては家の方を眺め乍ら廻り廻つて竹橋驛隊の中庭に安全地帯を求めたのでありました。此處は民家とは相當離れて居りますのでそれに高いので安全ではありましたが何も頂くものがなく殊に渴してゐましても水も御座いません。その上は危険の魔手に付き纏はれ追はれる様な不安な氣分に襲はれます。神田の家の方を見ますと四時頃にはその附近一帯は火焔に包まれて居り、あゝ家も何も皆んな焼けたと思ふと云ひ知らぬ凄愴を感じられました。斯うして死の危きを免れましたが見渡す限り火の海と化しまして轟々たる音響と天を燒く火焔の勢の物凄さで生きた心地もなくその夜は其所に一夜を過す事となりました。斯くして夜に入り猛り狂ふ一面の火の波を見ながらOさんはP兄はPと其の安否を心配しながら——長男が逃げ廻る道々お父さん——と泣き叫びました——が此處に落付きましてからは煙々たる火を見ましては父は朝鮮に居ることも忘れて御父さんは最う焼けて死んだらうなんて頻りと聞きますのでそれに病後の長女が絶えず空腹を訴へる様に泣き續けますけれど、餘りの驚きに乳を與へんとすれど一滴も出ませず、身も魂も消ゆる様な思ひを致しまして一夜を明かし餘震に脅へながらOさんの弟さんの居るト戸塚に行き、途中で邂逅したお隣のお祖母さんと共にその世話になり、それから轉々が出来、巢鴨刑務所前に室借りをする事となつたのでした。そして神田の家の焼跡に避難先を掲げ

兄は朝鮮の主人に自轉車にて埼玉縣川口町迄行き無事の電報を打ち食料品などを買求めて歸りましたそれから三日目の五日に私の郷里の父が地方決死隊に加はり上京しまして神田の焼跡から避難先を知り訪ねてまゐりました。此時の親の純情には生れて初めて感激し父に縋つて泣ける程泣きました。父は私共が三人生きては居ぬものと諦めて萬一の準備として種々食糧も背負ふて参りましたが、白布三反を遺骨包装用として準備して來た程でありました。そして私と父と子供二人は八日に兄を残して壽司詰の汽車で上野を出發し無事實家——岩手縣下に歸ることが出来ました。

斯様にして私は病兒を救ひ三人無事に今日あるを得ました事は當時を回想致しまして名狀し難き感懐と共に深き感謝を禁ずることが出来ません。

◆武道家閑話

漢 江 瀧 郎

○南山町新芳本のあるじ中原守雄君——そのお父うさんは、中原伸といふて、明治年間屈指の劍道家であつた。

○大日本武徳會の創立にも參與し、功勞淺からずといふので、その筋から履歴書を徴された。スルト白紙一枚を提出して『これで御免を蒙ります』、役人驚いて『オイヤ、これ白紙ですネ』といふと、『さうです……貧乏より外、別に書くこともないんでネ』

○武道は盛んだが、もう斯ういふ氣質の人は見られなくなつた。

下の太夫に於てをやである、所謂格に入つて格を離れ、格を離れて

もありませんので停電で乗てられ
てある電車の中で翹すふと中に入
すこととなつたのでした。そし
て神田の家の焼跡に避難先を掲げ
○武道は盛んだが、もう斯うい
ふ氣質の人は見られなくなつた。

呂昇の思出

大村百藏
(龍山元町)

如何なる藝術でも、藝術と名の
つく以上は、ヨシそれが多数であ
れ少数であれ、全然周囲の鑑賞者
と交渉なしに居られぬ、まして
興行藝術となつて来ると、いやが
應でも大衆と離れては立行かれぬ
ので、時には低級な藝術批判にも
迎合せねばならぬ場合がないとも
限らぬ、呂昇にしても、之が淨瑠
璃耳の肥へて居る聴客に依つて支
持されて来た文樂のやうな舞台で
あれば、それほどの苦勞もなかつ
ただらうが、まだ其頃までは『ヨ
ゴレ』と呼ばれて、世間から侮蔑
的に品位附けられて居た上に、比
較的義太夫趣味の幼稚な人達に聽
ひて貰はねばならぬ女義太夫の立
場に於て、其語り口にも多少の潤色
を用ひたからと云つて、一概に呂
昇の淨瑠璃は外連である、ヨタで
あるとして其藝術的價值を決めて
しまふのは酷である、一時問題と
なつたことのある、三十三間堂の
語り口にしても、アレほど研究心
の強かつた品昇にして『歸る古巢
の柳は今、切崩されて枯柳』の文
句を、あれまで濃艶に語らずとも
モツと沈んだ調子で陰氣に陰氣に
と語り詰めて行くのが本筋である
位なことは、百も二百も承知して
居たではあらうが、ソコに舞台上
の人氣を一身に背負つて立つて居
た、眞打ち太夫の苦心があつたも
のと思はれる、元來義太夫淨瑠璃
なるものは、斯道の先輩が道破し

た如く、呑込の悪い人に物語する
心持で、誰にも得心の行くやうに
正本の意味を語り情を語つて聴者
を恍惚境に入らしむる處に獨得の
本領があるのであるが、さればと
云つて義太夫を講釋と間違へては
ならぬ、古來音曲の司とも言はれ
たほどの藝術であるから、飽まで
眞摯な態度を以て、作中に現はれ
て来る人物、情景は更らなり、複
雜なる人事の葛藤、時代相の表裏
に至るまで、一段の曲折を節譜に
合はして語り生かす處に、容易な
らぬ苦心と彫琢と理智と練習とを
要するのである、義太夫語りには
上は名人上手より下は素人天狗に
至るまで、阿僧祇恒河沙ほどの數
はあるが、素人女人を通じて何れ
にも一長一短あり、等級を定める
ことは容易でない、何處まで上達
すれば免許皆傳が得られるか、義
太夫の道にはクライマックスと云
ふものがない、素人天狗が族出す
るのは之が爲である、否な素人天
狗ばかりでない、女人天狗もザラ
にある、藝術の間口と興行とが無
限に廣くて深いので、古今未だ會
つて其奥を極めた人は無いのであ
る、名人攝津大様を以てしても、
一代幾千百回と數知らず語つた中
で、たゞの一度も満足に語り得ら
れたことがないと云つて居た位ひ
で、彼れほどの大家でも、或意味
に於てマダ修業中に世を聳つた人
とも言ひ得られる、況して大様に

下の太夫に於てをやである、所謂
格に入つて格を離れ、格を離れて
格に入ると云つたやうな淨瑠璃を
聽かして呉れる太夫が現代果して
幾人あるかは別問題として、少く
とも大家と云はるゝ人の語りにな
つて来ると、自から技巧とか潤色
とか云ふ小刀細工の痕が無くなつ
て、さながら平坦な道を歩む如く
ソコに何とも云はれぬ餘韻を味ふ
ことが出来るのであるが、當世此
邊の妙味を聞き分ける人は洵に寡
ない、矢張り一般の大衆は第二流
所の技巧の多い、場當り淨瑠璃を
歡迎する傾きがある、晩年の大團
が不遇で終つたのも、叶太夫が文
樂を退いたのも、此間の消息を語
るものではないか、若し鐵とか『
つばめ』とか南部(最近越名と改
名した)とか云ふ若手の人氣もの
が居なかつたならば、文樂の繁榮
が何つまで續くかは疑問である、
大衆に聽かず藝術でありながら、
大衆の批判ほど當てにならぬもの
はない、呂昇にドレだけの實力が
あつたか、其藝術價值を一體何人
によつて決定するか、是れはたし
かに此天才的藝術家の身後に取殘
されて居る問題であらねばならぬ
女義太夫中興の開祖として呂昇を
認むることに於ては、何人も異論
のない處であるが、公平に男女を
通観して其實力を檢定する場合に
問題の重大性があるのである、何
れにしても半可通の素人天狗など
が、彼此言議を挟むべき筋合のも
のではなく、要は呂昇以上の専門
大家の嚴正批判に依つてのみ、解
決さるべき問題である、故攝津大
様の存生中彼は呂昇を評してコン
なことを言つて言る。

彼の女は元來呂太太の弟子だか
ら、私は一度も稽古をした事は

ないが、私の語口はすつかり取つて了つたかも知れませぬ、元來弟子達に差向ひで稽古をするのは、語物の格を教へてやるだけの事で、舞台で語るやうには教へられるものではない、どんなものでも舞台に上すまでには様々の工夫を積んで、是ならばと云ふ自信が出来て始めて語るので、並々の苦心ではない、大勢の弟子もあるが大抵の者け見台丈で差向ひになつてやる稽古だけで満足して、私の力をこめた舞台での語口を熱心に聴いて呉れる者はない、だから皆一ト通り格は出来上つても私の語口の眞髓を會得して居るものは彼女ばかりである、私も一時は彼女の稽古をしてやつて見たい氣もしたが、今日では其必要もなからうと思ふ……」

大様の呂昇観は、追かに提はれた處がなく、公平に彼女の藝術的天才を承認して居る、當時浄曲家の第一人者であつた、名人大様をして『私の語り口をすつかり取つてしまつた』とか、『最早稽古をしてやる必要もなからう』とか云ふやうな、傾倒的言葉を用ひしめた者は、恐らく呂昇の外にあるまい若しありとすれば、二代目越路位ひなものであつたらう、大様の此話は呂昇がまだ松屋町の席を根城として奮闘して居た頃に人に語つたものであつて、今から二十年も前のことである、其頃既に大様の眼にとまつてゐた、彼女の眞剣な研究的態度や、理智の閃きは、彼女の一生を通じて其藝道に精進させ且つ大成させたものであつた。筆者は最近レコードに依つて彼女が引退後に吹込んだ酒屋のサワリを聴いて、聞怨でもなく嫉妬でも

なく、一つに夫半七の身の上を案ずる、純情無垢なお園の遺瀧ない哀愁を、技巧を用ひずシトリと地味一方で語り生かして行く、老大家の手腕に敬服させられたのであつた、文樂一流の大夫でも、此サワリをコトさらに長唄式に振廻はし、或ひは見臺に伸び上り、節扇を敲くなど、ひたすら大向の喝采を傳ふことにのみ腐心する傾きのあるのは、作者の精神に照ら

して以ての外の不心得である、之を要するに呂昇の淨瑠璃は其實力に於て、研究に於て、優に文樂一流の壘を摩するに足るものがあつたに拘らず、一生女藝を以て終らせたことは、時代が此大藝術家を待つ所以の道ではなかつたのである、呂昇のことに就ては、記すべきことも多けれど、雜筆記事としては讀者の思はくも如何と思ひ、こゝで擱筆することにした(完)

【五八】

仁川行

徳野鶴子

(櫻井町)

山の上のこの家居の高ければ月尾鳴はもはるけくは見ゆ
あるじ去りてとし月ふれとおこそかにやかたをまもるナイトの麗像
海につかれいこふ座敷の涼しきにおのづと人等身をよこたへつ
西空やゝにうすれて夕もやの海よりせまる遠の島やま
たそがれて肌すゞしきに高き家の石のてすりけ未だぬくとき
燈臺のともし火淡く光りそめみなとの町の日はくれんとす
海よりの風吹きとほす窓際のわが耳にちかく鳩のなくこゑ
夕まけて潮みちくれば海の香をふふみて風は肌になやけし
夕燒のくも消えはてゝうす暗に沈みゆく海を見つゝさびしき(或る別荘にて)

が引退後に吹込んだ酒屋のサワリを聴いて、聞怨でもなく嫉妬でも

やまと歌

國風會京城支部

雨後蟬聲

○ 田中秀一郎
夕立の雨にあつさけあらはれてせみのなく音も涼しかりけり

○ 濱野鍾太郎
夕立の雨は開かに露れにしをまたうも騒く蟬時雨かな

○ 田中半次郎
村雨の晴れにし庭の梧桐にひときはたかく蟬をなくなる

○ 全 人
雨やみて庭は青葉の色清くせみのなく音も涼しかりけり

○ 工藤 武城
いつの間に雨はやみけむうたゝねの夢をやふりて蟬をなくなる

○ 今村 雲嶺
夕立の晴るゝややかてかた岡の松にすゝしく蟬のなくなり

○ 西田 明松
心地よき夕立晴れて高らかにうたひいてたる蟬の聲かな

○ 清水 正徳
雨晴れて暁したゝる森かけに涼しけになく蟬の諸聲

○ 浅井佐一郎
夕立のはれにしあとはことさらにかしましき哉蟬のもろ聲

○ 安東都天子

夕立にぬれし羽衣ほすとてや梢に蟬のをりはへてなく

○ 全 人
雨はれて庭の木すえにすゝしくもうつくしよしとせみのなくなり

○ 足立丈次郎
夕立はすきて木立もゆるはかりまたなきたつる蟬のもろ聲

○ 中島 貞信
夕立の晴れてすゝしき松風にしらへあわするむら蟬の聲

○ 古田萬龜子
夕立の晴れたる庭の梢よりまたもしくるゝ蟬の聲かな

○ 安東貞一郎
村雨のはれてすゝしき木の間より一聲蟬のなきそめにけり

石

○ 貞一郎
白銀も黄金もやとすものなれはいつてふものはとふとかりけり

○ 萬龜子
生きものを殺したりてふ石は猶那須野の原にかけのころらん

○ 貞 信
おもしろや水うちそゝきなむれは昔そらきたつ庭のすて石

○ 丈次郎
いそ濱に千らと遊びて家つとに小石拾ふも樂しかりけり

○ 都天子
あれはてし野中に立てる大石は幾世ともなく苔のむすらん

○ 佐一郎
つまつきてかへり見すればはだもてそと思ふほにもあらぬ石くれ

○ 正 徳
天地のむた蟠る石すらもタイナイマイトに碎かるゝ世や

○ 明 松
畑中に今ものこれる石を見て昔の宮の様をしらるゝ

○ 雲 嶺
から國のふるき都をしのへとや畑に残れる城跡の石

○ 武 城
ことごとわのしゝまにうつくまり昔むす石のいらへたにせぬ

易

小 岡
村 介
阪 石

○ 半次郎
置くところよろしきをえてすて石もにはのなかめをそへてけるかな

○ 鍾太郎
かすならぬ濱の眞砂の我なれば石にもなりて老いくつるかな

○ 秀一郎
まつら瀉あかぬわかれにひれふりし人のおもひを石にとはゝや

○ 全 人
さゝれ石つみてはくつしくつしては又つみたてゝ遊ぶらなぬ子

○ 秀一郎
ふくるまですゝみの舟の影みえて夏もなきさすめる月かな

○ 鍾太郎

夏 月

〔 190 〕

なつの夜の庭に涼しき月影を宵葉のひまにすかしてそみる

○ 半次郎

つくはひのかたへに生ふる呉竹の葉こしの月の影の涼しさ

○ 正 徳

うちそよつかせのまにまになまたけの葉こしに見ゆる夏の夜の月

○ 貞 信

夕立の名残の露を草にとめそらに涼しくすめる月かな

○ 武 城

川の面に影をやとして中天に涼しくすめる月を見しかな

○ 佐 一 郎

夏の夜のねられぬまゝにさゝさりしまとにさし入る月のすゝしさ

○ 萬 龜 子

やり水に涼しき影をやとしつゝ大空たかくすめる月かな

○ 雲 嶺

ふくるまでかたりあかさむねやしろくさし入る空の月を涼しみ

○ 都 天 子

涼み舟浮へる川のささなみにくたけてはちる夏の月影

○ 貞 一 郎

きくたにも音の涼しきせゝらきにかけそくたくる夏の夜の月

○ 明 松

はしみしてなかわる庭の池水に涼しくやとる夏の夜の月

○ 丈 次 郎

更ぬれば霜やふるかと思ゆるまでつめたくてらす夏の夜の月

話を語る

久松前平

(京城 日報 社)

銀ブラをやつて居ると、行き違ひの紳士が馴れ／＼しく『ヤア君』と呼びとめる。親しみのある顔容をしているので『ヤア』と答へると、紳士は『一寸そこでやらう』と近所のカフェーに案内する。二人は對座して盃を持つ、紳士は古い話をする。相手は如何にも舊友のKに似たところはあるが十数年も前に死んだと聞いて居るからKではない。親戚のものにしても知つたものは居ないと考へると、何うしてもこの紳士におごつて貰ふ筋合がない。東京には實に奇抜な人間が居るものだと思ふと急に氣味悪くなつて、一寸失敬するよと辭さうとすると、矢張り一緒に出る。『オイ君、Kだよ々々』といふ。ナル程Kだ。二人は相擁して泣いた。そして重ねて或る料亭で痛飲、夜を徹して語り盡した。肺病極度に進むで死亡を傳へられて居たのが奇蹟的に全快したのだつた。このこと許りは忘れられぬ (在城某紳士の實驗談)

X
それは夏の陽光が照りつける、しかし

追手に帆をはらませて九州の海洋を快走する薬を満載した和船があつた。と大きな鯨が腹を出して浮いてるのを發見した乗組五、六人は雀躍した。直ちに帆を下して買つて積むだ薬を全部海上に放擲して鯨に船を乗りあげたかと思ふと、爆音と水柱を立てて鯨は海中に、船は轉覆、一同は命拾ひして助けられた。夏の海洋にはよくあることで鯨が晝寝の休養をして居るのを死んだと見て大儲けをしやうとして却つて大損をしたものである (長崎の老漁師談)

X
ある夏の夜、ある旅館の一室で一行男女四名が饜苦しさに惱んで居ると、隣室で面白い遊戯の最中とのことに、靜かに机を運び、その上に衝立てを乗せて松竹梅か何かの欄間に手をかけて見物すると云ふ計劃。中々困難な事業ではあるが興味にそそられてフラ／＼する足許も何のその、やつと覗かれる次第になつた。ところがメリ／＼と欄間が破れてズデンドウ……さあ大變だ、一同床の中にもぐり込むのは宜いが、布團を頭からかぶつて呼吸をこらしてのことだから瀑布の様な流汗には困つた。隣室で帳場が呼びつけられて大變な立腹。こんな可笑しいやら怖ろしかつたことは今日迄たつた一度丈けであつた (旭町某老妓談)

てみると、板から新しい釘を、引
不幸にして私は、その方の門外

それは夏の陽光が照りつける、しかし

度丈けであつた(旭町某老妓談)

ひとり言

永樂町人

暑氣

今年の暑氣は、随分キビしかった。老年組の人々は、顔を合せる
と『ヤー近年になきお暑さで』と互に挨拶してゐる。

果して近年になきお暑さだらうか。これを若い者に聞くと『何、去年も、今年も、ちつとも違ひやしません。本年はくといふのは年寄りの口癖ですよ』

ほんとうは、さうであらう。今年に限つて、格別暑いといふ法はあるまい。尤も年寄りの身になつて見ると、年々抵抗力は、弱つて行く。暑氣に負ける理由が、多くなつて行く。で、一年く『近年になきお暑さ』といふことにならなかも知れない。私なども、どうやらその組に、近づいたやうな氣がする。

フト支那人の『君子は、歳を罪せず』といふ言葉を思ひ出し、微笑してゐる次第である。

失業者

失業者に同情する理由は、もち論ある。但し私などのところへやつて来て、『何とかしてくれ』といふ連中、假りによそへ世話をしやつても、一年とつづくものは先づ稀だ。大抵七八ヶ月目に失職して、またく頭を掻きくやつて来る。

『失業の方が、本業だネ』、冷かすことが、始終である。或る時、大工の頭梁の仕事を見

てみると、板から新しい釘を、引き抜いては、ボン／＼捨てゝあるママ使へさうに見へる。『もつたないネ』と、私がいふと、頭梁も、下職も、口を揃えて、『釘といふやつは、どんなに新しく見ても、一度使つたものは、もう二度とは使へないんです』

面白い言葉だと思ふ。婚前の娘さんや、初度の求職者は、この言葉をよく玩味してもらいたい度いと思ふ。

Kの理論

K君は、私の同郷のもので、或る官廳へ奉公してゐる。いづれにしても、タイした大官ではなくて、先づ官海のもの、穢む小エビ位の存在だ。

但し風采なり、暮らし向きは、そんな者つたもので、その點だけは、高等官待遇といつてもいゝだらう。

このK君、或る時やつて来ての述懐に、『私らでも、ためる氣になれば、一生に三千や五千の金はたまるかも知れぬ。だが、男子一生を、棒に振つて、高々三千、五千のハンタ金をためてどうします小金に縛られたくはないんです。だから私は……』

井上蔵相閣下、あなたの折角のパンフレット、此處では、クシヤ／＼になつてしまひました。

保険社員

近年性慾學といふものが流行つて、大抵な人が、一冊りは讀んでゐるやうである。

中には、剛毅朴枹、無風流そのものといつた人で、そんな外その方の蒐集家と聞いて、驚いたこともある。

不幸にして私は、その方の門外漢だ。で、たびく無知を囁はれてゐる。

ツイこの間も、或保険會社の人が来て、その方の講義をし『だから女性性は、性生活の期間が短い。短いけれども、天分は、豊富にめぐまれてゐる。それ故女性性は、よく同時に、一人で三四人の異性をあやしてゐるでせう。吉原の女性の生活も、彼等にとつては、必ずしも虐待ぢやないんです。それと反對に、男子の性生活は、細くつて長い。長期に渡る。西園寺公が例證です。で斯ういふ結論を提示することが出来ます。男も女も、生涯に、二人づゝの妻、夫をもてば、丁度いゝといふことです。理由は、女は、短期だけれども、負擔力が旺盛だ。一人の男では足りない。同時に、男は期間が長い。最初の妻は、老いて役に立たぬ。故に前後に二人の妻が必要だ』——さう彼は結論して、揚々として辭し去つた。

私は、『今の男は、面白いことをいふ。確かに新しいネ』と感心すると、傍の親友W氏、フツツと笑つて、『あれなんか初歩だよあんたは、ムヤミに感心するからいかん』

謀叛人

二十餘年の昔、九州中津に、同人と浪人窟一戸を構えてゐたことがある。片山潜、平山周などいふ人々も、來つて數泊したことを覚えてゐる。平山は、比律賓獨立の陰謀の張本人であつた。

今も記憶してゐる一ツは、この人々が、溫和で、謙讓で、物靜かで、殆んど大きい聲で、物もいはなかつたといふことである。

冬服

既成品

廉價無比何卒
御來店を乞ふ

特別仕立

新地着荷

御注文に依り
入念調製仕候

京城府鐘路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

守屋徳夫氏著

倫敦より紐育へ

定價一冊

金貳圓也

本書 體裁

四六版小形本裝釘瀟酒
表紙色クローヌ七百頁
寫眞銅版百十數葉挿入



著者今朝鮮殖産銀行調査課長の要職に在り經濟金融のことは即ちその本職といふべく、本書は著者が最近親しく歐米を視察し實地に開見精査したるところを記述したるものにして彼國の經濟社會狀態は、羅如として紙表に在り。且つ著者は三葉子の雅名の下に一流の麗筆を有す。その文藝、藝術、演劇風俗を語りて詳なること素より言を俟たず。敢て江湖の湧くが如き御歡迎を望む。

市内各書店にあり

二十年未
おなじみの
最上醬油

香味
佳絶
ホシ大ソース

お上品な
料理に
淡口醬油

永登大
浦嫁

油醬口淡 油醬最上

内 科
婦 人 科

今 本 醫 院

(京城旭町一丁目)
院長 今本義胤

主筆 大浦貫道

月刊 心の友

京城南米倉町
心の友發行所

社長 福田有造

木浦新報
光州日報

(紙面全く一新)

昭和四年八月廿五日印刷
昭和五年九月一日發行

本誌定價

一ヶ月(部) 四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社

京城府和泉町一七〇
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

京
報
日
報

每
日
申
報

時.....てあ手御の冬秋.....風秋の爽颯

へ井中三は用御の服冬

(でま日五十月十) 中催開約豫服冬



社 會 式 株

部服洋店服呉井中三

番九二五.六二一.七三司本話電